



業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別調査（「法隆寺献納宝物」（第38次））（(4)－①－1）		
【事業概要】 東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田沢裕賀
【主な成果】 (1)前年に引き続き、古今目録抄の調査を実施し、報告書を刊行した。 ・古今目録抄（聖徳太子伝私記）の翻刻のための調査を行った（8月31日～9月2日、12月1日） （客員研究員・奈良大学文学部教授 東野治之） 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報37 古今目録抄3』を刊行した。 (2)通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査および法隆寺宝物館保管の上代裂について調査を行い、本格修理のための事前準備をすることができた。 法隆寺宝物館で保管する上代裂のうち、「I-337-37 赤地花卉文藤纏平絹」（正倉院伝来）ほか16件について調査を行い、これに基づいて本格修理を行った。			
			
「I-337-37 赤地花卉文藤纏平絹」修理前		修理後	
【備考】 (1) 古今目録抄（聖徳太子伝私記）調査日数 4日 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報37 古今目録抄3』（29年3月31日発行） (2) 染織品調査「I-337-37 赤地花卉文藤纏平絹」（正倉院伝来）ほか調査件数16件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	法隆寺献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査を実施することができた。また、古今目録抄については、計画どおり概報を刊行できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	法隆寺献納宝物の絵画、書跡、金工の各種作品を様々な観点から調査し、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画に沿った取組を順調に進めている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b. 特別調査（「書跡」第14回）（(4)－①－1）		
【事業概要】 当館の収蔵品・寄託品の中で、奈良時代から江戸時代におよぶ書跡・典籍、古文書などを調査する。その成果は、総合文化展の展示や目録の刊行等によって公開しており、図版目録として『日本書跡篇和様 I』、『古写経篇』などを刊行している。28年度は、当館の収蔵する古写経の調査が一段落したことで、古写経を多く収蔵する奈良国立博物館の収蔵品のなかから関連する作品などを調査の対象とした。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 高橋裕次
【主な成果】 (1) 調査概要 古写経は名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行った。いずれも奈良時代8世紀の写経であり、当館が収蔵する古写経と関連が深い作品が多く含まれていた。今回は、23件の古写経を対象に調査を行った。 (2) 調査の成果 まず国宝の紫紙金字金光明最勝王経10巻を手分けして調査した。当館では、奈良時代の紫紙金字経は収蔵しておらず、藍紙の金光明最勝王経の断簡が数点あるのみである。奈良時代の紫紙金字経の優品として位置づけられるもので、繊維を細かく裁断し、さらによく叩解していることが確認された。また金字の表面を丁寧に磨いている点は、他に見られない特徴であるといえる。なお、紫紙金字金光明最勝王経の他、10件ほどの調査を実施できた。今後も調査を継続することで、当館の収蔵品との関連を明らかにし、研究を進めて、展示・公開の向上に寄与する予定である。			
【備考】 調査件数：古写経11件 調査日数：1日間 調査人員：6名（東京国立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所） 調書作成：23枚			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究成果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究の推進及び展示・公開に寄与するところが大きい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、計画どおり作品調査を実施することにより、研究を推進し、展示・公開の向上に寄与するという所期の目標に向けて順調に推移している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c. 特別調査（「工芸」第8回）（(4)－①－1）		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・陶磁・漆工・染織・刀剣・甲冑等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館3館及び文化庁・東京文化財研究所の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家目目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の体調や他業務を鑑み、28年度は陶磁・染織の調査会を行うこととなった。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 陶磁（10月28日（金） 1日間） 九州国立博物館にて、同館が保管する文化庁所蔵の日本・中国陶磁及び同館所蔵の日本・中国陶磁を調査し、3館（東京国立博物館・京都国立博物館・九州国立博物館）が所蔵する作品の相互活用に関する調整・意見交換を行った。その結果、来年度の特別展「茶の湯」に関連する特集陳列「懐石の器」に展示・公開するための有益な調査ができた。調査点数は1日間でおよそ10点余り。参加者は、降矢哲男研究員（京博）、酒井田千明アソシエイトフェロー（九博）、今井敦主任文化財調査官（文化庁）、三笠景子主任研究員、横山梓研究員（以上、当館） 以上5名。  陶磁調査風景（10月28日） (2) 染織（9月14日（水）、15日（木） 2日間） 当館において保管されていた法隆寺献納宝物のうち、近年になり修理候補となった袍と裳について調査を行い、当館に保管されるほかの上代裂との同定作業及び修理方針について意見交換を行った。その結果、当館所蔵の上代裂との同定ができ、修理方針が明確になった。調査点数は2日間で13点。参加者は山川暁教育室長（京博）、田中陽子技官（宮内庁正倉院事務所）、小笠原小枝客員研究員、澤田むつ代客員研究員、土屋裕子保存修復室長、小山弓弦葉工芸室長、三田覚之研究員、四戸菜穂非常勤職員（以上、当館） 以上8名。 (3) 染織（3月23日（木）、24日（金） 2日間） 東京国立博物館には、大倉集古館が所蔵する能装束・能道具が217件寄託されている。その多くは江戸時代中期から江戸時代後期の製作で、一部、安土桃山時代から江戸時代初期のものも含まれている。備前藩池田家がかつて所蔵していた大名家の能装束として資料価値の高いこれらの資料の悉皆調査を27年度より3ヵ年行うこととした。2回目にあたる今年度については、2日間で摺箔6領、縫箔8領、舞衣5領、計19領を調査した。本調査により、備前藩池田家の能装束の形態が明らかとなり、大名家における能の実態について知見を得た。参加者は、共立女子大学教授・田中淑江氏（当館客員研究員）、大倉集古館学芸員・三島和美氏、東京文化財研究所・菊池理予氏、当館工芸室長・小山弓弦葉、同研究員・三田覚之、同非常勤職員・四戸菜穂 以上6名			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	各機関の陶磁・染織の専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	文化庁・および九州国立博物館が所蔵する陶磁の各種作品を様々な観点から調査した。また、平成27年度に寄託を受けた大倉集古館所蔵の能装束調査を通して、大名家における能装束の実態についてさまざまな知見を得た。それらの調査成果を工芸史研究ならびに当館の展示に反映させるべく、中期計画の「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」に沿った調査を実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア d. 特別調査（「彫刻」第6回）（(4)－①－1）		
【事業概要】 寺等所蔵の仏像や彫刻作品を調査し、研究報告や論文活動に結びつけ、あるいは寄託増加、特別展等の企画につなげて文化財の活用を図るものである。28年度は、特別展「平安の秘仏—滋賀・櫛野寺の大観音とみほとけたち」出陳作品に対する樹種分析の実施、同「禅—心をかたちの一」出陳作品の調査などをとおして、参加者同士で積極的に意見交換を行い、さらなる活用の道を探った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1) 展覧会に関連して次のとおり調査を行なった。 8月22日 京都・大報恩寺本尊釈迦如来坐像及び四天柱、仏後壁絵画の調査 調査参加人数4名 11月7日 櫛野寺仏像の樹種について森林総合研究所、成城大学岩佐光晴氏との共同調査 調査参加人数9名 11月28日 京都・鹿王院十大弟子立像の撮影及び調査 調査参加人数4名 11月29日 神奈川・建長寺伽藍神像の撮影及び調査 調査参加人数4名 (2) 大報恩寺では、釈迦如来像等の状態を確認し、29年度に本格的な事前調査を行う目途がついた。特別展「平安の秘仏—滋賀・櫛野寺の大観音とみほとけたち」に展示中の滋賀・櫛野寺の仏像については、森林総合研究所等と共同で調査を行い、作品の多くがヒノキであり、一部にカヤが含まれていることが判明した。これは10世紀ごろの用材観を知る上で大変貴重なデータとなる。また、特別展「禅」に展示中の鹿王院や建長寺所蔵作品についても新規撮影及び調査を実施し、その造形や構造から中世における中国・宋代美術の受容を具体的に示す知見が得られた。 (3) 研究成果は、今後の展示計画に活かすとともに、論文や書籍の執筆において随時発表していく予定である。櫛野寺の調査報告については、新規撮影された画像とともに29年度中に当館発行の『MUSEUM』誌にて公開したい。			
			
東京国立博物館・特別展「平安の秘仏」会場での調査風景			
【備考】 調査回数：4回 研究会回数：1回 調査参加者数：延べ21名 調査作品数：48点			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	「平安の秘仏—滋賀・櫛野寺の大観音とみほとけたち」や「禅—心をかたちの一」等の特別展にともない、出陳作品の新規撮影や科学分析を含む実地調査が行えたことは、現地での調査が困難な場合が多いなかで、大変有意義であったといえる。また、研究成果もおおむね公開の目途がついた。なお、大報恩寺での調査は、今後の本格調査を踏まえて特別展実施に向けて検討する準備ができた。これにより、おおむね所期の目的は達成できたと思われる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	調査研究活動の成果の多様な方法による公開という計画に沿った調査を実施できた。成果の公開は、29年度以降、当館発行の『MUSEUM』誌での報告や、展覧会の企画等において行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア e. 特別調査（「絵画」第1回）（(4)－①－1）		
【事業概要】 館蔵品及び寄託品を中心とした絵画作品の調査研究。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田沢裕賀
【主な成果】 東京国立博物館の所蔵品及び寄託品を中心とした絵画作品を、年度ごとにテーマを設けて調査研究を進めるプロジェクトの初年度にあたる。 28年度は29年1月より東京国立博物館で開催される特別展「春日大社 千年の至宝」にあわせ、神道の信仰に基づく作品を対象に、「垂迹画の調査研究」をテーマとした。調査は9月7日（水）、8日（木）の2日間、東京国立博物館本館会議室で実施し、次のメンバーが参加した。田沢裕賀、沖松健次郎、土屋貴裕（東京国立博物館）、大原嘉豊、井並林太郎（京都国立博物館）、谷口耕生、北澤菜月（奈良国立博物館）。 調査の対象とした垂迹画は、春日信仰に基づく「春日宮曼荼羅」、「春日鹿曼荼羅」、山王信仰に基づく「日吉山王本地仏曼荼羅」、熊野信仰に基づく「熊野曼荼羅」といった絵画作品のほか、「春日宮曼荼羅彩舎利厨子」などの漆工作品など、約30件となった。 調査の結果、従来の制作年代に関して再検討を要する作品などが確認されるとともに、箱書や極から伝来に関して新たな知見を得ることができた。 これらの成果は、特別展「春日大社 千年の至宝」図録解説、図録各論等に反映することができた。また、制作年代に関する新知見に関しては、館蔵品及び寄託品の鎌倉～室町時代仏画の研究に今後生かすことができるものとして期待される。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	28年度のプロジェクトは、特別展の開催に合わせ、館蔵品及び寄託品の調査研究を深めたと言う点で時宜にかなったものであると言える。従来、仏画の研究に比べ、垂迹画の研究が十分為されてきたとはいいがたく、今回の研究を実施した意義は大きい。調査の結果、従来の制作年代に関して再検討を要する作品などが確認されるとともに、箱書や極から伝来に関して新たな知見を得るなどの成果があった。今後は、本研究の成果を核として、垂迹画の研究そのものの深化はもとより、仏画や説話画の調査研究にも視野を広げ、進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	本研究プロジェクトは、東京国立博物館の所蔵品及び寄託品を中心とした絵画作品を、年度ごとにテーマを設けて調査研究を進めるものである。28年度は特別展にあわせ「垂迹画の調査研究」をテーマとしたが、29年度以降も特別展、もしくは総合文化展の特集展示に関する基礎研究を継続して進めていくための第一回目の調査研究としては大変実りあるものであった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 油彩画の材料・技法に関する共同調査 ((4)－①－1))		
【事業概要】 本研究は東京芸術大学との共同研究で20年度から開始し、続行している。東京国立博物館所蔵の油彩画約150件の中から、明治期を中心とした作品を調査対象としている。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室は、これまで大学所蔵の明治期油彩画について、調査研究を続け、多数の成果を公表している。本共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析などの科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで東京芸術大学が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国に初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものとする。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 土屋裕子
【主な成果】 (1)①A-11691 原撫松筆「モンタギュ夫人像」、② A-11787 原撫松筆「老人」、③A-11788 原撫松筆「画家ヘンリーの像」のX線透過撮影、蛍光X線分析、調書作成、③については、普通光、側光、紫外線、赤外線写真についても撮影を終了した。 (2)原撫松の作品の表面には光沢のあるワニスが塗布されており、調査の結果、天然樹脂であるマスティックワニスであることが推定できた。 (3)③については、下層に別の絵が描かれていることも判明し、今後、原撫松のモデルなどについての調査も含め、学術的研究も進むと期待できる。光学調査を基にした作品のデータおよび新知見などの所見は、今後『MUSEUM』で発表の予定。			
  			
【備考】			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	28年度も昨年同様に作業を進めたため、評価をBとした。平成29年には館内での蛍光X線分析も含めて少なくとも月に1度の調査スケジュールを組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	一連の調査によって、次第に東京芸術大学の同時期の作品群および多感が収蔵する作品との比較研究が可能になってきている。特にX線透過画像、デジタル顕微鏡画像などの詳細なデータの比較により、作品の特性のみならず、歴史的関係性などについても新たな検討が可能となる。また、作品の高精細画像は、展示の際に使用するパネル、『MUSEUM』の原稿などにも利用され、次第に活用する機会も増えた。課題となるのは、調査回数と公開である。業務の間にうまく取り入れ、調査を進めるのはもとより、結果を積極的に公開、活用する必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の平安時代を中心とした、作品自体の本質に細部の繊細な表現が重要な要素となっている仏教絵画を対象として、東京文化財研究所の有する高精度のデジタル撮影技術によって撮影し、現在可能な最高レベルの画像を形成する。作品研究の深化と作品保護に資することが期待できる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田沢裕賀
【主な成果】 (1) 調査概要 29年2月23日に A-11796 重文 准胝観音像 1幅 絹本着色 平安時代 12世紀 についてカラー画像撮影、 A-1 国宝 普賢菩薩像 1幅 絹本着色 平安時代 12世紀 のカラー分割撮影を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 29年3月31日現在、データを整理中のため、今後検討する。 (3) 調査研究の成果 データ整備中だが、今回の撮影により、東京国立博物館所蔵の平安仏画のカラー高精細画像をすべて撮影することができた。			
			
准胝観音像の調査風景			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	当初予定の撮影は順調に終わることができたことで、赤外線撮影や蛍光画像、蛍光X線分析など29年度以降、新たに共同研究としてより充実させた計画を立ち上げる準備をすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	前中期計画期間を継承し、当初予定通り主要な作品の調査を実施し、画像を整備することができた。画像の公開・活用方法については今後の検討事項であるが、肉眼観察を超えた情報を記録できる高精度画像は、脆弱で貴重な文化財の巻き広げによる負担を少なくするための基礎情報として有効活用が期待できる。 また、カラー画像が順調に整備できたため、それらの検討成果をもとにしながら、29年度以降の計画として、近赤外線画像、蛍光画像、蛍光X線画像分析など、可能な限りの光学的調査を実施する計画を立てた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍、洋書に関する基礎データを調査し、画像情報を公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 田良島 哲
【主な成果】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。対象としたのは、安政6年(1859)にドイツ人医師シーボルトが再来日したときに携えてきた洋書及び滞留中に収集した洋書である。明治2年(1869)に長子アレキサンダー・シーボルトが外務省に寄贈した後、同17年(1884)に農商務省博物館の所管となり、現在に至ったもので、約300冊を数える。西欧の日本に対する深い関心が知られる内容のものが少ない。 貴重図書として保管されてきたこれら洋書類の調査をもとに26、27年度に公益財団法人図書館振興財団の助成を受けて画像データベースを作成し、一部の書籍については全頁の公開を開始した。 28年度はシーボルト献納本について、引き続き図書類のデジタル画像の作成を継続するとともに、既に作成した画像を当館研究情報アーカイブズ上で公開した。 実績値 “Manual of the botany of the Northern United States” 1856 他計12冊の高精細デジタル画像を作成。 平成27年度までに画像作成済の洋書92冊の全頁を当館研究情報アーカイブズ上で公開。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	27年度までの助成金がなく、館費のみでの対応であったため、画像作成件数は少なかったが、調査成果の公開を着実に継続した。他の類品のない資料であるので、成果の公開は学術的な意義が大きい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
C	成果公開の意義は大きいですが、データ作成等のための予算が十分に確保できていないため、公開の進捗は十分とは言えない。科研費等の資金獲得を図る必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 東洋民族資料に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約3500件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	出版企画室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 東京国立博物館の他、南山大学・天理参考館・早稲田大学において南太平洋及び台湾の民族資料に関する調査を行った。 ・東京国立博物館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に南太平洋民族資料（南洋資料）の整理に資する知見を得た。 ・東京国立博物館が所蔵する南洋資料の管理や活用に関する知見を得た。 (2) 調査によって得られた知見は、平成館企画展示室における特集「南太平洋の生活文化」に反映させた。			
			
【備考】 館外調査：南山大学（8月24日）、天理参考館（8月25日）、早稲田大学（10月20日） 特集：「南太平洋の生活文化」（11月15日～12月23日 平成館 企画展示室）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・27年度のバブアニューギニアにおける現地調査に引き続き、28年度は国内の他機関の調査を行うことで、東洋民族列品のうち南太平洋民族資料（南洋資料）に関する基礎的な情報を充実させた。 ・国内の他機関における南洋資料の保存管理や展示活用に関する有意義な情報を得ることができた。今後も引き続き情報交換を行う関係が構築できた。 ・国内において十分に周知されているとは言い難い南太平洋の生活文化を一般に紹介することを試みた。ギャラリートークによって南洋資料を来館者に紹介することで、今回の展示の手応えや今後の展示の構想を得ることができた。 ・29年度以降も当館所蔵品をはじめとする国内外の東洋民族資料の関連資料の調査に取り組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・従来ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館13室の「アジアの民族文化」に展示活用されて、展示内容が着実に充実してきている。 ・東洋館13室「アジアの民族文化」の展示に活用されて列品情報の整備が進捗したことを踏まえて、28年度は平成館企画展示室において南洋資料の特集展示を試みた。これによって東京国立博物館の南洋資料の概観を公開することができた。 ・29年度以降も引き続き、これまでの調査研究を通じて得た知見や交流に基づき、更なる調査研究を重ねて南洋資料の平常展示や特集を工夫していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ a. 特集「藤原行成の書 その流行と伝称」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 特集「藤原行成の書 その流行と伝称」に関する調査研究 28年8月23日～10月2日に開催した特集「藤原行成の書 その流行と伝称」の展示を充実させるための調査研究。平安時代に能書として活躍し「三跡」と称された藤原行成の直筆作品と、その行成の書の流行と受容を適切に示すために、展示作品や関連資料の調査によって、展示手法、展示構成の検討を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室主任研究員 恵美千鶴子
【主な成果】 (1) 作品調査 5月23日：個人よりお預りした藤原行成の書2点の調査を実施した。 5月26～27日：行成紙手鑑、龍華樹院額ほか伝藤原行成筆の書や関連資料を調査した。 6月16日：伝藤原行成筆「和泉式部続集」の調査と附属する極札の調査をした。 (2) 成果とその公開 ・展示内容を示すために、平常展調整室協力の下、各題箋に内容を示す札をつけ、画像等パネルを作成した。 ・出版企画室協力の下、図録『藤原行成の書 その流行と伝称』を作成し、販売した。 ・広報室協力の下、トータルブログ「藤原行成の書」を公開した(8月26日)。 ・教育講座室協力の下、ギャラリートーク「三跡・藤原行成の書」を行った(8月30日)。			
			
展示風景		展示内容を示すために題箋に札をつけた	
			
		展示図録	
【備考】 調査日数：4日間、図録：1冊作成、成果の公開（ブログ、ギャラリートーク）：2件 関連論文：1件予定（恵美千鶴子「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』の書写年代について」、田島公編『禁裏・公家文庫研究』第6輯、思文閣出版、29年4月刊行予定）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	展示計画の段階より、効率的に作品調査を実施することができた。作品調査の実績があったため、現存数10点に満たない藤原行成の直筆作品2点を所蔵者から借用できた。展示手法・展示の面でも、平常展調整室の協力により、展示内容をわかりやすくするための札や画像パネル等が充実し、広報室や出版企画室の協力により、成果の公開を速やかに行ったため、当初の目標を上回る成果を得ることができたといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
A	特集「藤原行成の書 その流行と伝称」に関する調査研究は、プロジェクト責任者の27年度までの研究成果を生かしたもので、実績をさらに蓄積することができた。平常展調整室ほか各担当の協力もあり、展示構成や展示内容を小札や画像パネルで補うことにより、適切にわかりやすく示した。そのため展示図録の売り上げもよく、増刷することができた。本調査研究の成果は、29年度以降の総合文化展「宮廷の美術」等でも活用する予定であり、『東京国立博物館紀要』に研究論文としてまとめる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ b. 特集「上海博物館との競演」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 上海博物館が所蔵する工芸品及び仏像の名品 55 件を借用し、東洋館の展示を充実する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 富田淳
【主な成果】 上海博物館が所蔵する工芸品及び仏像の名品 55 件（陶磁器 12 件、染織品 17 件、青銅器 10 件、仏像 8 件、家具 8 件）を借用し、東洋館の諸室で活用することで展示を充実させた。 ・東洋館において特集「上海博物館との競演」を行い、東洋館の展示を補完的に充実させた（継続中）。 ・東洋館において恒例企画「博物館でアジアの旅」を行い、東洋館の展示に対する関心を促した。			
			
上海博物館での事前調査		東京国立博物館東洋館での展示	
【備考】 特集「上海博物館との競演」（4月12日～29年2月26日） 企画「博物館でアジアの旅」（8月30日～10月23日）			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・近年の恒例企画「博物館でアジアの旅」に、特集「上海博物館との競演」の展示を組み込んで、「アジア旅」ツアーを充実させるため上海博物館の所蔵品の調査を行った。 ・上海博物館が所蔵する工芸品および仏像の調査を行い、東京国立博物館が所蔵していない類型の作品を選定し、「上海博物館との競演」というテーマの下に両館の所蔵品を並べて展示することで、東洋館の展示を補完的に充実させることができた。 ・上海博物館からの借用に先立つ事前調査が十分にできたので、効果的な展示を行う作品を選定することができた。29年度以降も企画「博物館でアジアの旅」などを念頭において、効果的な展示に向けた調査研究に取り組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・長年の交流がある上海博物館の協力を得て東京国立博物館の展示を充実することができ、またこのたびの企画を通じて両館の関係者が相互に信頼関係を深めることができ、今後の両館の活動にとって一層の発展が期待できるものとなった。 ・東洋館リニューアル以降、東洋館関係の展示や企画に関する工夫が重ねられており、「博物館でアジアの旅」などの企画が定着してきた。28年度と同企画においては、特集を関連させることで企画の内容の選択肢を開拓した。 ・29年度以降も引き続き、上海博物館をはじめとする友好機関との協力的な調査研究活動を継続し、相互にとって有意義な活動を展開していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ c. 特集「親と子のギャラリー 美術のうら側探検隊」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 ファミリー向け展示企画「美術のうら側探検隊」を実施し、来館者の鑑賞体験を深める教育的展示について調査・研究を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 小林牧
【主な成果】			
<p>1) 新しい視点の提供や能動的な鑑賞体験の提供によって、来館者の鑑賞体験を深めることを目指した教育展示、親と子のギャラリー「美術のうら側探検隊」(本館特別2室、7月5日～8月28日)を実施した。</p> <p>2) 小学生高学年・中学生とその保護者を対象とした親しみやすい展示デザインについての研究を行った。「うら側を見る」というコンセプトを体現するキャラクター「ウラミルくん」を設定。探検隊風の衣装と虫眼鏡によって、堅苦しい美術鑑賞のイメージを払拭し、親しみやすい雰囲気作りを目指した。サイン、パネル、ワークシートにおいて、「ウラミルくん」のイラストを多用したデザインを展開し、パネルの形状も吹き出し型にするなどの工夫を施した。</p> <p>3) 普段は展示室で見せることのない展示の「うら側」を展示するために、透明アクリルや鏡を多用した展示具・展示台の開発を行った。</p> <p>4) 能動的な鑑賞体験を目指し、床に設置してのぞき込むようにした展示ケース、内部に光をあてる懐中電灯、手に取って楽しめるレプリカなどの鑑賞ツールを開発・設置した。</p> <p>5) 鑑賞体験を形にできるワークシートを制作、会場で配布した。</p> <p>6) 普段は入ることのできない博物館の保存修復の現場や館長室など「うら側」をめぐるツアーを実施した。</p>			
			
		懐中電灯を用いて埴輪の中を見る展示	鏡で仏像のうらを見る展示
【備考】			
来場者数：152,548人(本館入館者数)			
アンケート：展示全体 とても面白かった、面白かった 85パーセント			
解説のわかりやすさ とてもわかりやすい、わかりやすい 80パーセント			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応
B	展示室では、懐中電灯やレプリカなどを手にとってみる鑑賞者が多く、アンケート結果も好評で、記述式回答でもいままで見られなかった裏側を見ることによって、「興味が深まった」、「わかりやすかった」という感想を数多くいただいた。能動的な鑑賞体験が鑑賞や理解を深める一助となっていることは確認できた。一方で、鑑賞ツールの使い方の説明や展示・照明など、まだ工夫の余地はあり、29年度以降の課題としたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	本特集は、来館者の鑑賞体験を深めるための教育的展示の在り方についての調査・研究のための好事例となった。29年度以降も、新たな展示テーマを設定しつつ、よりよい教育的展示についての調査・研究を深めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ d. 特集「ドレッサーの贈り物—明治にやってきた欧米のやきものとガラス」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 明治期に収集されたヨーロッパ・アメリカの陶磁器及びガラスの展示、紹介			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室主任研究員 三笠景子
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・文久4年(1864)に来日したイギリスのデザイナー、クリストファー・ドレッサーが博物館に運んできた欧米の陶磁器、ガラス及びドレッサーに影響を受けて博物館に寄贈されたアメリカのガラス工芸作家、カムフォート・ティファニーのガラス作品のうち、主だった48件をとりあげて展示した。 ・ガラスに対する適格な修理方法を検討してきた中で、これまで長期にわたり展示公開ができなかった白色ガラスを、28年に、保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー野中昭美と陶磁器修復たま工房の北野珠子氏によって修理、クリーニングし、安全に展示公開することが可能となった。 ・明治期に収集された収蔵品のヨーロッパ製磁器のなかにも、日本へ海運にてもたらされた段階もしくは戦争などで破損や汚損を被っていたため、近年展示できなかったものがあつたが、それらについても明治期に収集された貴重な一群として展示公開に供するため、適切な処置を施し、展示することができた。 ・今回の展示において、列品記載簿に明治時代、とくに博覧会事務局から引き継いだとされる列品について、収蔵年月の誤記や収蔵の経緯について不明な表現が認められ、混乱があつたことがうかがえ、改めて収蔵時の履歴がわからないものが存在することがわかつた。 			
			
クリーニング処置を施した G-1567 白色ガラス切子文瓶 (画像左) と G-1564 切子厚手籠目文瓶 (画像右)			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	博物館には草創期にあたる明治時代に、欧米と政府との政治的なやりとりのなかでもたらされた列品が収蔵されている。しかし、近年の展示体系においてはそれらを公開する機会が極めて少なく、実態は局所的にしか知られていない。その意味で、欧米の陶磁器、ガラスの列品の網羅的調査を試みた今回の企画、展示は意義深いものとする。一方で、調査を進めたなかで、改めて収蔵時の履歴がわからないものが数点あることが判明した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	欧米の陶磁器、ガラスの列品の実態を把握することができ、また展示に供するために適した処置を行うことができた。ただし、明治期においてそれらがいつ、どのような経緯で収蔵されたのか、という情報について改めて整理する必要がある、今後の課題としたい。また、今回展示する機会がなかったものについては、今回同様特集のテーマで新しい文脈から展示公開する機会を設けて、29年度以降も展示できるように努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ e. 特集「歌仙絵」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 総合文化展の特集「歌仙絵」開催に関して、事前調査と出品作品の検討を行った。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 作品調査 ・6月9日 都内で個人所蔵の歌仙絵関連作品の調査 ・7月28日 大阪市立美術館で歌仙絵関連作品の調査 ・8月4、5、15日 東京国立博物館で歌仙絵模本作品の調査 27年度実施した調査の知見とともに、これらの調査の成果は下記の図録、展示解説等に反映することができた。 (2) 展示作品総数：53件（うち、7件が外部借用） (3) 図録の刊行：96ページ。コラム3件、論文1件、作品解説53件収録 (4) ギャラリートーク：1件			
			
展示風景（左：本館特別1室、右：本館特別2室）			
【備考】 (1) 作品調査：3件 (2) 展示作品総数：53件 (3) 図録の刊行：96ページ。コラム3件、論文1件、作品解説53件収録 (4) ギャラリートーク：1件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本展開催が承認された27年度から、文化庁、京都国立博物館、九州国立博物館、大倉集古館など、出品予定の所蔵先と出品交渉を行い、事前調査を行っていたため、28年の集荷、輸送、図録解説等の執筆、展示に関して継続的かつ順調に進めることができた。歌仙絵は個人所蔵のものも多く、これだけ点数の多い展覧を実施しえたことは文化財の公開という点からも大いに評価できるものと思われる。あわせて、今回出版した図録は当館の中世歌仙絵を網羅した図版目録的な役割も期待して発行したもので、今後の内外研究者の調査研究の発展にもつながる要素として評価されるだろう。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本展は東京国立博物館所蔵の中世歌仙絵を中心とした展覧で、これまで継続的に行ってきた館内作品の調査研究の成果に基づくものである。特に多くの絵巻模本の調査研究の成果を展示に盛り込めたことは特筆される。とくに東京国立博物館所蔵の歌仙絵模本の調査を精力的に進めたが、これらは従来展示等に活用されておらず、列品の有効的な活用という点からも、十分な成果を上げたと言える。これらの調査研究を踏まえ、次年度以降の総合文化展での展示解説などにその成果を生かしていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ f. 特集「生誕百年記念 小林斗盦 篆刻の軌跡」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 篆刻で初めて文化勲章を受章した小林斗盦の業績を伝えるため、代表的な作品を選定するとともに、効果的な展示手法や、分かりやすい展示構成を検討する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 富田淳
【主な成果】 ・小林斗盦の篆刻を4期に分け、各期における代表作を選定した。 ・小林斗盦の篆刻の特質を最も良く引き出すための、印材・印影の展示手法を検討した。 ・小林斗盦と古典との影響関係を理解するために最適な資料となる甲骨文・青銅器・封泥・漢印などを選定した。 ・収集家としての側面を伝える古銅印・近人印・印譜・中国書跡・中国絵画などの旧蔵品を選定した。 ・当時の文墨界の交流の諸相を示すため、小林斗盦が政界・芸苑・文壇などに刻した印を選定した。 ・上記の調査をふまえ「古典との対峙」・「作風の軌跡」・「篆刻コレクション」・「制作の風景」・「中国書画コレクション」・「翰墨の縁」の6部からなる会場構成とした。			
 <p>中国絵画の調査</p>		 <p>代表作の調査</p>	
【備考】 ・特集「生誕百年記念 小林斗盦 篆刻の軌跡」（東洋館8室、11月1日～12月23日）			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	事前調査によって、早年から晩年に至る作風の変遷や各期の特質に関する知見を深めることができた。また、「方寸の世界」とよばれる篆刻の小さな印材や印影を効果的に展示する手法を検討し、展示に反映させることができた。小林斗盦の業績に多方面から光を当てることで、篆刻に対する理解を深めるとともに、東洋美術への親しみを促進させることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	江戸から続く篆刻の旧派に反発し本格的な中国の作風を取り入れ、研究と実作の双方において斯界の第一人者となった小林斗盦に焦点をあてることで、この100年における日本文化と東アジア文化との影響関係の一斑を示すことができた。今後は清時代の末に流行した書画の日本に対する影響という文脈の中で、さらに具体的かつ詳細な状況を探っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ g. 特集「掛袱紗—祝う心を模様にかくす」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 12月20日～29年2月19日まで東京国立博物館本館14室で開催される特集「掛袱紗—祝う心を模様にかくす」の開催にあたり、当館に所蔵される江戸時代の掛袱紗をすべて調査し、その染織技法や素材についての歴史的考察を行った。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 調査概要 ・27年度に行った東京国立博物館所蔵の掛袱紗調査(28年2月2日実施)をもとに、その染織技法や素材に関して考察し、制作年代や用途についての見解を明らかにした。 ・調査した37件の掛袱紗のうち、特集陳列のテーマにふさわしい作品を23件選び、その保存状態や展示方法についてさらに詳しい調査を行い、来館者に理解されやすい展示方法について検討した(8月～10月)。 (2) 調査の結果得られた知見 ・掛袱紗に刺繍で華やかな吉祥模様が施されるようになったのは、江戸時代前期の終わり頃、武家階級においてである。江戸時代中期以降は裕福な町人の間にも広まり、日本における染織技術の発達に伴って、江戸時代後期には様々な吉祥模様の掛袱紗が製作された。調査の結果、当館に所蔵される掛袱紗は、江戸時代後期、18世紀末から19世紀前半の武家及び町方のものであることが分かった。 ・調査の結果、これまで袱紗として登録されていた所蔵品のうち2件(列品番号I-3790、I-98-3)は、実際には打敷であったことが判明した。また「裂」として登録されていた所蔵品1件(列品番号I-2759)が、裏地が欠失し裏打された掛袱紗であったことが判明した。 (3) 調査研究の成果 ・調査結果をもとに特集陳列用のリーフレット(A4判・4ページ)を作成した。(画像①) ・調査の成果を反映し、12月20日～29年2月19日まで東京国立博物館本館14室で開催される特集「掛袱紗—祝う心を模様にかくす」を開催した。(画像②)			
 			
【備考】 調査日数：2日 調査件数：37件 関連展覧会：1件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> 従来、まとまって展示する機会がなかった掛袱紗の特集陳列を企画することにより、東京国立博物館に所蔵される掛袱紗を網羅的に調査することができた。 東京国立博物館に所蔵される掛袱紗を特集陳列することにより、江戸時代後期の掛袱紗を初めて公開し、広く一般に知られる機会を得た。 染織文化財は衣服の形態であることが一般的であるが、年中行事や吉事といった日々の生活の中で使用される染織文化財の存在や、そこに現われる卓越した日本の染織技術を明らかにした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> 博物館の「展示・公開」という事業に即して、これまで公開する機会がなかった文化財を調査・研究し、これまで収蔵庫で保管されたままであった収蔵品を展示によって活用できたことは大きな成果である。 29年度以降も、収蔵品の有効な活用に向けた調査・研究を目標に計画的に事業を進め、展示や論文といった形で社会や学会に貢献できるような事業を進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ h. 特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館が手がける文化財保存と修理の役割と成果をわかりやすく広く一般に紹介するため、近年解体を含む根本的な修理を終えた作品を修理過程で得られた情報とともに展示公開し、理解を促進する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 高橋 裕次
【主な成果】 (1) 調査概要 28年度は近年本格修理を行なった作品のほかに、応急修理を行なうことにより取り扱いや保存上の安全性が向上した作品や、鑑賞性が向上して展示活用が可能となった作品を対象として、一般の理解向上につながる作品の選定、処置内容とその説明について調査と検討を行なった。 (2) 調査の結果得られた知見 対象としたのは、本格修理の場合、修理後十分な期間を置いて状態が安定したことが確認できた、27年9月30日から28年3月31日までに修理が完了した作品とし、応急修理は当館アソシエイトフェロー（修理技術者）が処置を行なった絵画作品と立体作品とした。とくに「享保雛」（列品番号 I-1579）は、古い修理によって烏帽子の取付が不可能となっていた作品を、担当研究員とアソシエイトフェローの緊密な連携と適切な処置によって、安定して美しく展示できるようになったもので（『おひなさまと日本の人形』東京国立博物館セレクション、2016年2月20日、P10-11）、27年から始まった当館内での立体作品応急修理事業の一代表例として示すことができるものである。 (3) 調査研究の成果 本格修理完了品として重要文化財「放櫛図」や明治18年に沖縄県から一括して購入した陶磁器など14件、対症修理完了品として肉筆浮世絵、神像など4件、計18件を展示した。会期中、一般向けにバックヤードツアー、ギャラリートークを行ない、多くの参加者が熱心に鑑賞、聴講した。 ギャラリートークの様子			
【備考】 展示 ・特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成館企画展示室、29年3月22日～4月16日、展示作品件数18件。 教育普及事業 ・バックヤードツアー 29年3月23日（木）、参加者60名。 ・ギャラリートーク 29年3月24日（金）参加者45名、3月28日（火）参加者103名、4月11日（火）参加者59名、4月14日（金）参加者68名、計4回参加者のべ275名。			



年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	当課ではより専門的な内容を含む詳細の報告を別途『東京国立博物館文化財修理報告』を刊行しており、一般向けの平易な展示として特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」を毎年年度末に行なっている（28年度で17回目）。毎回作品は変化するが、より明確な展示のテーマ性や見栄えが課題である。本年は実際に処置を行なう当館アソシエイトフェローの活動と「応急修理」を前面に出すことによって来館者と修理技術者の親近性を高めることができ、理解促進につなげることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	当館における装こう修理のフェロー採用が28年度で一旦終了し、今回の展示はその節目として応急修理の成果を展示とギャラリートークで紹介した。これらフェローによる本格修理は28年度3月末完了品もあり、来年度以降の特集に展示する見込みである。保存修復課の活動と成果が本特集によって臨場感を持って来館者に伝わり、文化財保存に関する興味関心と理解の向上へつながるよう、毎年新しい視点で鑑賞できるテーマを設け、事業を展開する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (ア) 中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものであり、あわせてデジタル画像による最新版の画像資料データベースを作成することを目指している。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 沖松健次郎
【主な成果】 (1) 調査概要 根津美術館所蔵作品等の肉眼による観察と、デジタル高精細撮影および赤外線撮影を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 根津美術館本の現状見えている図様の下にある別の図柄の存在と、それが太子の4番目の妃といわれる芹積み姫にかかわる何らかの場面を描いたものでないかと推測される知見を得た。 (3) 調査研究の成果 現在まで蓄積している画像で、各作品の場面について、特に従来不明確であった場面の再検討と整理を行い、より妥当性の高い分類を行った。 太子事蹟と作品との対応一覧についても、データベースとしての検索の便を考慮して、項目をより細分化したものを作成した。			
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の5年目 関連の発表 沖松健次郎 「絵画による仏事空間の荘厳に関する考察—延久元年本聖徳太子絵伝を起点として」 4月23日(土) 筑波大学芸術学美術史学会			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
C	科学研究費助成事業5年計画の5年目である28年度は、残りの調査を実施するとともに、今までのまとめとして画像資料データベースの完成をしなければいけないが、29年3月31日時点では、調査が一部しか実施できていないため、当初計画より遅れている。それに伴い、データベースの作成もずれ込んでいる。しかし、事蹟との対応一覧表は、従来触れられていなかった場面なども比定し分類整理を進めたことから今後の活用上、有効なものを作成できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。5か年の期間において、作品が修理中であったり、調査予定先の都合で日程が合わなかったり、当初予定より調査を実施できた箇所は少なくなってしまうが、事蹟ごとの場面の分類整理は、従来知られていたものよりもより深めることができ、対応一覧も整備することができた。 公開については掲載許可などのクリアすべき課題もいくつかあるが、今後の太子絵伝、説話画などの各分野において基礎資料としての有効に活用されることが期待できる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (イ) 能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究 (科学研究費助成事業) (4)-①-1))		
【事業概要】 能狂言面の造形に注目して調査を行い、制作年代、作家等の推定を可能にする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課長 浅見龍介
【主な成果】 5月29,30日 静岡・佐野美術館調査 6月25日 福井・永平寺予備調査 7月1,4,7日 CT調査 8月2,5,30,31日 CT調査 10月20,21日 愛知・魚町能楽保存会調査 10月30,31日 福井・永平寺調査 12月10,11日 石川県立美術館、金沢能楽美術館 29年1月27~29日 愛媛・東雲神社調査 (1) 佐野美術館の「中将」は金春家の本面だった可能性があることを発見。「山姥」も金春本面の可能性はあるが、面裏の粗い割りには硬い木に由来すると思われるのにヒノキ材であることから出来の良い写しの可能性もある。 (2) 魚町の面により、今所在の知られない金春本面の造形が推定できた。 (3) 永平寺承陽殿安置の道元禅師坐像が出目(幾齋)の作であることが確認できた。面打の家系による彫像の作例である。 (4) CT調査により、面の樹種の推定、木取り、構造、修復の様子などの情報を得ることができた。特に大天神(C-1534)は木心を込めた木から作り、額に節があること、頭部端の従来鋸引きされたと見られてきた部分は、横木の別材を刳ぐことがわかった。小面(C-1537)は一材から作っているが、正中で意図的に割り離したか、割れたものを刳いだことがわかった。その理由は今後の検討課題である。 (5) 調査をもとに総合文化展において29年1月31日~3月26日に特集「奈良・金春家伝来の能面・能装束」を開催した。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	科学研究費助成事業3年計画の最終年度である28年度は、特別展の準備及び撤収のため、9月、11月に調査を実施できなかったが、その他は着実に進めることができた。特にX線CT調査によって目視による観察では見えない情報を得ることができたことは特筆すべきである。また、特集「金春家伝来の能面・能装束」を開催し、136ページオールカラーの図録を刊行した。さらにX線CT画像を掲載した報告書を制作した。特に図録は当初の計画になかったためA判定とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	中期計画に沿って、能狂言面の調査研究を実施した。3年の研究期間の間に調査、写真、資料を蓄積し、一部の作家について特色を抽出することができた。本研究の目的である、制作年代推定、面打(能面作家)特定の根拠を見つけることであるが、一部についてそれを達成した。それらの成果を展示に反映し、図録も制作した。 29年度以降も継続して調査研究を実施し、展示に結び付ける。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (ウ) 日本染織コレクションの形成に関する研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>本研究は、日本国内外の機関や個人コレクターが所蔵する日本染織コレクション蒐集の経緯や来歴、構成内容を網羅的に調査し、近代以前は蒐集されることがなかった日本染織が古美術品としての価値観を形成していく過程を考察するものである。染織史研究者の間では研究対象とならなかった江戸時代以降の袷袷類・裂類を中心に各所蔵先において染織コレクションの全容が分かる調査を行い、近代における日本内外の日本染織の動向を追跡する。本調査研究によって、日本染織の価値が理解されないままに離散する危機のある日本内外のコレクションに価値付けがなされ、現在、美術史の1分野として位置付けられる染織文化史研究が、どのような価値観を基盤として確立されたのかが実証される。</p>		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】	<p>(1) 調査概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名古屋・松坂屋美術館にて、同館に所蔵の日本染織コレクション91件を調査及び研究発表会を開催(8月17～19日/29年2月1～3日) ・神奈川・女子美術大学美術館にて、同機関に所蔵の日本染織コレクション66件を調査(9月6,7日/29年2月15,16日) ・ワシントン・ワシントン大学染織美術館にて、同館に所蔵の日本染織コレクション18件を調査(11月1,2日) ・ニューヨーク・メトロポリタン美術館にて、同館に所蔵の日本染織コレクション66件を調査(29年2月23,24,27,28日,3月1日) <p>(2) 調査の結果得られた知見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名古屋・松坂屋美術館所蔵の日本染織コレクションのうち、大正期に染織のコレクターであった洋画家・岡田三郎助が蒐集し、その後、松坂屋に譲渡した小袖コレクションについては、その全容が明らかとなった。 ・女子美術大学美術館に所蔵される日本染織コレクションのうち、琉球紅型については、その全容が明らかとなった。同館のコレクションは多岐にわたるため、29年度以降も順次調査を行うこととなった。 ・ワシントン・ワシントン大学美術館には、第2次世界大戦前に山中商会から購入した日本染織コレクションが@点ある。そのほか、アメリカ在住の染織コレクターが蒐集した染織を合わせて@点の作品を調査した。以前より調査を行ってきたニューヨーク・ブルックリン美術館が所蔵する山中商会由来の日本染織コレクションとの共通性を見出すことができた。 ・ニューヨーク・メトロポリタン美術館の日本染織コレクションのうち、大正期にアメリカで活動した古美術商・野村正治郎が売買した日本染織コレクションの全容が明らかとなった。 <p>(3) 調査研究の成果</p> <p>27年度の調査成果と合わせた古美術商・野村正治郎がアメリカで売買した日本染織コレクションに関する調査報告及び論考を、29年3月末を目処にまとめた。29年度の東京国立博物館研究誌『MUSEUM』に掲載の予定である。</p>		
			
	松坂屋美術館での調査風景(8月17日)		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の5年計画の2年目 調査実施機関：4機関 調査日数：16日 調査作品数：241件</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業5年計画の2年目である28年度は、さらに調査の進行を円滑に進めるため、調査班を研究分担者が主導となる2つのグループに分けて、調査回数を増やした。他機関とのスケジュール調整が合わず、予定より調査日程が繰り下がってしまったため調査報告を公開する予定が遅れてしまったが、29年度の早い段階で公開の予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画における有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究に沿った調査研究を実施することができた。 29年度以降も、調査団を2～3チームに分けて、さらなる調査データの集積に努めたい。29年度は調査計画の中間期にあたるため、現状の成果をシンポジウムあるいは研究会で公開する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (エ) 絵巻を中心とした古代・中世絵画の伝来に関する研究 (科学研究費助成事業) (4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博搜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、28年度はおよそ8タイトルの文献資料から約1,150件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。 (2) 東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理を継続して行った。28年度は特に(4)の特集に関わる模本など約30件の調査を行うことができた。 (3) 絵巻詞書のデータ化 絵巻作品の文字情報には伝来などについて記すものもある。そこで公刊されている絵巻作品の詞書及び伝来情報のデータ化を進め、28年度は18タイトルの入力を終えた。 (4) 調査・研究の展示での公開 上記の調査・研究を踏まえ、以下の展示として成果の一部を公開した。 ・特集「歌仙絵」東京国立博物館特別1・2室 10月17日～11月27日 ・特集「春日権現験記絵模本Ⅱ―神々の姿―」東京国立博物館平成館企画展示室 29年1月17日～3月12日			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の2年目 (1) 絵巻伝来関係資料の抜き出し件数 約1,150件 (2) 絵巻模本の調査件数 約30件 (3) 絵巻詞書のデータ化 18タイトル (4) 展示への反映 2件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である本年度は、当初計画にのっとり、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査、絵巻詞書のデータ化という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることができた。あわせて、調査・分析を展覧会という形で一般向けに行うことができたのは大きな成果と言える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究調査研究を遂行し、データの収集を効率的に行い、またその成果を展示に反映させることができた。29年度も引き続き、継続的に資料の収集、作品調査を進め、その成果を反映した研究を進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (オ) 古墳時代武装具に関する研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 古墳時代は前方後円墳を中心とした葬送儀礼に、武器・武具・馬具(以下、武装具)が大きな比重を占めた時代である。このような古墳文化は、日本古代国家形成期における社会の安定と成長に重要な役割を果たしたとみられる。一方、日本列島の武装具は古代北東アジア諸地域の影響下に成立し、刀剣・甲冑や馬具装飾に見られる独自性・卓越性などに特色がある。 本研究は、副葬品や形象埴輪を中心に、古墳時代武装具の古代東アジア諸地域相互における位置づけを明確化する。また、武装具形埴輪や古代武装具との比較・検討から、日本列島と東アジア武装具の性格と政治史・文化史的意義を分析して、日本列島における原始・古代武装具研究の総合化と歴史的意義を解明するための研究基盤を確立する。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【主な成果】 1 形象埴輪を中心とした各地方の主要古墳出土埴輪及び韓国出土埴輪資料を調査し、基礎的情報の整備を進めた。 2 調査情報を基礎に、「古墳時代武装具関係資料」を比較・検討し、政治史・文化史的意義の研究を推進した。 ① 実施概要 : 5月28日(会議・研究会)、6月11・12日(調査・研究会)、7月16～18日(調査)、8月23～28日(調査)、29年2月1～6日(調査・合同研究会)、29年3月3～6日(調査・研究会)に、東京国立博物館・高槻市立今城塚古代歴史館(大阪府)・嘉麻市教育委員会(福岡県)、韓国国立光州博物館・全南大南大校博物館(光州市)、国立羅州博物館・国立羅州文化財研究所・羅州市伏岩里古墳展示館・全南文化財研究所・大韓文化財研究院(羅州市・務安郡)、国立全州博物館(全州市)において、資料調査と研究会・会議を実施・開催した。 ②成果・知見等: 会議・研究会で調査成果の分析・研究報告を行い、調査成果の確認と問題点を検討・分析した。 ③成果の公開等: 韓国・慶北大南大校における第2回公開合同研究会(29年2月4日)で、日韓相互に調査・研究成果を発表した。			
			
○資料調査(左・中)・合同研究会(右) 風景 [左: 嘉麻市教育委員会、中: 韓国・全南文化財研究所、右: 韓国・慶北大南大校(朴天秀氏)]			
【備考】 科学研究費助成事業の3ヵ年計画の2年目 ○調査・研究会回数(日数): 5回(延べ18日間)・4回(延べ4日間) 主な調査・分析資料: 福岡県沖出古墳出土埴輪(嘉麻市教育委員会蔵)、大阪府今城塚古墳出土埴輪(高槻市立今城塚古代歴史館蔵)、霊岩チャラボン古墳・金山里古墳出土埴輪(全南文化財研究所・大韓文化財研究院保管)資料など ○主な学会等発表等: 犬木 努「渡田八幡塚古墳の形象埴輪配置 -「今城塚類型」との対比から-」『塚口義信博士古稀記念日本古代学論叢』和泉書院、11月、他2件 ○合同公開研究会 : 1回(慶北大南大校合同研究会「第2回古代韓国古墳研究交流会」、29年2月4日、韓国・慶北大南大校)			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
C	科学研究費助成事業の3ヵ年計画の2年目である28年度は、研究計画の達成度・公開性については、外部調査・研究会の開催回数はほぼ目標を達成し、韓国・慶北大南大校との合同研究会の開催で、成果の確認及び公開性を加えることができた。ただし、内部調査については、館の業務方針により下半期に東京国立博物館所蔵資料(列品)の整理を中断したため、本研究の目標達成は十分とはいえない。29年度は研究環境の改善と共に、27年度評定(B)を上廻ることができるように、研究予算運用の効率性・適時性をより高めた研究計画を立て、本研究の到達目標とした成果を挽回・確保し、精度の向上と発展性・独創性及び公開性の拡充と確立を図る所存である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
C	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を計画した。①の学術的評価に関して、考古学的情報の整理・資料化及び研究会等を通じた活動はある程度目標を達成した。しかし、東京国立博物館所蔵資料(列品)の公開に資する調査・研究としては、上記の理由から蓄積が十分には進展しなかった。29年度は、中期計画における「4-1)所蔵品・寄託品及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究」に沿った調査研究として成果を挙げることが出来るように、研究計画の改善を図り、高度な研究体制・研究環境の確立と効率性・適時性及び発展性・独創性を一層進展させ、列品情報の整備と研究成果(情報)の公開を目標とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (カ) 中世社寺縁起絵・高僧伝絵の成立と近世的受容に関する研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 社寺縁起絵は、神社仏閣の由来や霊験を描き出した説話画で、日本仏教興隆の祖である聖徳太子の絵伝を淵源とする祖師高僧伝絵とともに、鎌倉時代に盛んに制作された。本研究では社寺縁起絵、高僧伝絵の最盛期とも言える鎌倉時代の作例と、その構造を権力基盤の強化に利用した近世初期公武権力による作例を比較し、中世から近世へ至る絵画制作の「場」の実態と歴史的位置付けを明らかにする。そのため、東京国立博物館収蔵品の調査、関連資料のデータ化、社寺縁起絵や高僧伝絵に登場する聖地の現地踏査を行い、これらの成果発表として特集展示を開催する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 瀬谷愛
【主な成果】 (1) 2年目となる28年度は27年度の成果に基づき、引き続き「一遍聖絵」に関連する「東山太子堂古図」(京都・太子堂白毫寺)、「聖徳太子二歳像」(京都・太子堂白毫寺、アメリカ・ハーバード大学美術館)、「遊行上人縁起絵」(遊行寺宝物館)ほかの作品調査を行った。また、一遍の故郷伊予に所在する繁多寺、善応寺、伊予国分寺等(7月4日～6日)、一遍遊行の最南端である鹿児島神宮(大隅正八幡宮)、大隅国分寺跡等(10月28日～30日)の踏査を行い、現地大学教授と有益な情報を交換するなどして新知見を得ることができた。 (2) 美術史学会東支部例会(於成城大学、7月23日)にて、「一遍聖絵の成立と中世律宗」と題する口頭発表を行い、「一遍聖絵」の事跡や表現から一遍の活動と作品の成立背景に律宗が深く関与したとする新知見を報告した。関連して、「ハーバード大学美術館所蔵聖徳太子二歳像および像内納入品」に関するワークショップ(於ハーバード大学、29年3月25日)にて口頭発表を行った。また、「松崎天神縁起絵」に関する研究報告を行った(於防府天満宮、29年2月18日)。一般向けには、28年度調査の成果を含む、善光寺と善光寺縁起絵、一遍聖絵等に関する講演を行った(於長野県信濃美術館、9月10日、参加者約70人)。 (3) 律宗による高僧伝絵制作に関する研究成果として、極楽寺忍性が唐招提寺に施入した「東征伝絵巻」の背景に、永仁6年が唐招提寺中興2世証玄の7回忌にあたりその追善があることを実証する論考(「忍性と証玄—東征伝絵巻施入をめぐって」)を特別展「忍性菩薩—関東興律七五〇年—」(神奈川県立金沢文庫) 展覧会図録に寄稿した。 (4) 28年度は新たに近世に制作された社寺縁起絵、高僧伝絵を対象を広げ、館蔵品、寄託品を主な対象に作品調査を行った。とくに、17世紀の寺社再編整備・創建に関する研究の端緒として、五代将軍綱吉、柳沢吉保の帰依を受けて浄厳が湯島に開いた真言宗霊雲寺派総本山霊雲寺を対象とし、「真言律宗霊雲寺末寺院牒」「日吉山王本地仏曼荼羅図」「江戸名所図会」ほかを調査。その成果は29年4月25日～6月4日に特集「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」(本館2階特別2室)として広く一般に公開する予定である。			
			
		3月ハーバード大学美術館調査	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 作品調査：25件、現地踏査：2回、学会研究会展覧会等発表数：4件、論解説等印刷物：「忍性と証玄—東征伝絵巻施入をめぐって」(「生誕八〇〇年記念 特別展 忍性菩薩—関東興律七五〇年—」展図録、神奈川県立金沢文庫、10月28日)、他1件。			

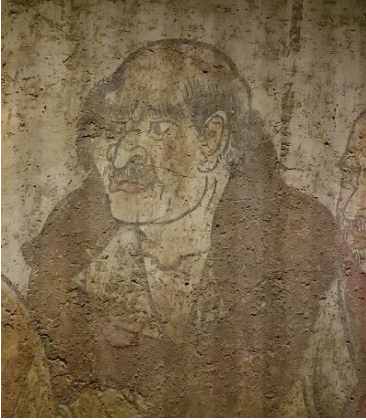
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	科学研究費助成事業の3年計画の2年目である28年度は、1年目に得られた「一遍聖絵」に関する成果を作品調査と現地踏査により深化させ、一遍の活動と関連作品の成立背景に律宗が深く関与した可能性を美術史学会で発表。美術史、中世史、仏教史にわたる新知見を学界に提示することができた。成果はハーバード大学における研究会で海外の研究者にも報告した。この知見は館蔵品を含む他の同時代作品研究にも応用でき、今後もさまざまな新解釈への発展が期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。成果を学会や一般向け講演会ほかで発表することができた。また、28年度は新たに近世の実態調査も対象とし、29年4月25日～6月4日に特集「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」(本館2階特別2室)での成果報告を予定している。最終年度となる29年度は江戸時代前期の研究についてさらに深めていき、鎌倉時代の社寺縁起絵、高僧伝絵との有機的なつながりを浮かび上がらせたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (キ) 神像表現彫刻における物語性の調査研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は仏像とならんで日本彫刻史上重要な位置を占めながら、独自の研究方法が確立しているとはいえないが、神像について、それぞれの神が持つ固有の伝承や信仰という物語を根拠に神の姿(神像)が造られたはずであるという視点に立って、表情や仕草を読み解き、姿にこめられた意味を探ることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 丸山士郎
【主な成果】 (1) 福井・若狭神宮寺 男神坐像・女神坐像の調査 神像彫刻は神仏習合の結果として誕生するが、若狭神宮寺は神仏習合の最初期の例で、その歴史の考察は神像研究に欠かせない。また、当所蔵の男神坐像と女神坐像は鎌倉時代に製作された神像彫刻中の名品で、その表現意図の研究を行った。 (2) 中国・陝西歴史博物館保管の墳墓壁画の調査(9月22～23日) (3) 中国・故宫博物院におけるインド・中国彫刻の調査(12月20・21日) 仏教彫刻の神将形像などにみられる瞋目は怒りを表す形状であるが、9世紀末頃までは怒りとともに異形であること示すこともあった。10世紀以降、異形としての表現はしだいに形式化して意味が忘れられていくが、神像彫刻にもしばしばみられ、異形との関わりが注目される。瞋目は、8世紀に中国から伝わったものであるが、706年に完成した墳墓の壁画にも異形の表現として用いられている。(2)(3)の調査では、該当部分を含めた陝西歴史博物館が保管する古代壁画、故宫博物院で開催された「梵天東土展」出品のインド、中国彫刻の調査を実施した。			
			
章不太子墓壁画		章不太子墓出土金具	
(4) 石川・白山神社 男神坐像の調査(29年3月23日) 9世紀の神像は仏像表現を多く取り入れるが、10世紀になると独自の神像が確立していく。神像表現確立期の作品について調査を実施した。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 調査回数：海外調査2回、国内調査2回			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の最終年度である28年度は、27年度に引き続き鎌倉時代の神像表現を検討するとともに、異国風の神像についての研究を行った。異国風神像は、神像の中でも特異な存在であり、その表現意図の検討は研究上欠くことができないものであり、最終年度として、神像の多様性を踏まえた研究を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。26年度は群像における神像表現の物語性、27年度は写実的で作者の表現意図が読み解きやすい鎌倉時代の神像彫刻について検討し、28年度は神像彫刻の中でも特異な表現である異国風神像の考察を行った。本研究を通して神像に込められた多様な物語性を考察することができた。今後は神像の通史的な考察を行う必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (ク) 法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1)		
【事業概要】 法隆寺献納宝物として東京国立博物館が所蔵する法隆寺伝来の上代裂(じょうだいぎれ、古代の織物)を中心に、献納宝物及び正倉院宝物の歴史的・文化的背景を造形の側から明らかにするとともに、現在バラバラの状態で保管されている上代裂について、本来作品として仕立てられていた当時の組み合わせを作品調査に基づいて明らかにする。また、未解明な部分が多い法隆寺裂の全体像(数量・技法・文様)についても作品調査と写真撮影によってデータベース化を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室研究員 三田覚之
【主な成果】			
(1) 学会発表実績 ・東京国立博物館研究員・三田覚之、「法隆寺献納宝物の幡と木簡について」、12月3日、木簡学会、奈良文化財研究所			
(2) 論文発表実績 ・東京国立博物館研究員・三田覚之、「法隆寺伝来『古裂』の本格修理に伴う配置復元について」、6月、『MUSEUM』第662号、東京国立博物館、査読あり			
(3) その他発表実績 ・東京国立博物館研究員・三田覚之(編集)、『法隆寺献納宝物特別調査概報 古今目録抄3』、29年3月、東京国立博物館 ・東京国立博物館研究員・三田覚之、「海を渡ってきた文様」、12月、『別冊太陽 古墳時代美術図鑑(別冊太陽 日本のこころ)』、査読なし ・京都・妙傳寺より発見の金銅菩薩半跏像の報道発表にあたっての取材対応(NHK)、12月			
(4) 国内調査実績 法隆寺献納宝物の未整理品調査、通年(本調査において、伝世品としては国内最古と考えられる木簡を見出した) 法隆寺献納宝物の染織品調査(本格修理作品16件に対する事前調査)、通年			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 (1) 学会発表回数: 1 (2) 論文発表回数: 1 (3) その他発表実績: 3 (4) 調査回数: 1(16件)			



法隆寺献納宝物の未整理品より発見の木簡

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である28年度は、本研究の一環として行った法隆寺献納宝物の未整理品調査において、伝世品としては国内最古と考えられる木簡を見出した。該当作品については伝来経緯を調査の上、東京国立博物館の列品として新たに編入し、あわせて報道発表を行った。また学術的な報告として、奈良文化財研究所が主催する木簡学会において発表を行った。また、論文1件を発表した。28年度は研究の最終年度であったが、国内及び海外における調査が不十分と考えられたため、研究の深化を図るために科研費を1年延長することで研究の深化を図る準備を行った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。法隆寺献納宝物の未整理品から木簡を新たに見出すなど、館蔵品に対する再評価を行い、また研究成果を法隆寺献納宝物の染織品本格修理に活かすことができた。しかし、十分な調査研究や論文発表、学会発表を行うことができなかった。29年度は研究を1年延長し、調査研究活動により多くの時間を費やせるように図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (ケ) 清朝末期における中国踏査写真資料に関する発展的研究(科学研究費助成事業) (4-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館が収蔵する写真資料のうち、清朝末期に文物、史跡の撮影を行った岡倉天心・早崎稜吉、塚本靖の写真資料に焦点をあて、文献資料の調査及び実地調査によって、現状との比較、写真が撮影された行程、未詳な被写体、被写体が選択された背景を明らかにし、当時における写真撮影の実態を解明する。その成果は、博物館のウェブ上で公開中の「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」に反映させるとともに、特集展示によって写真資料を一般に公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 関紀子
【主な成果】 28年度は、岡倉天心・早崎稜吉、塚本靖が行った中国調査のうち、27年度に行った北京から河北省趙州間の実地調査に引き続き、河北省荊州から河南省洛陽に至るまでの道程を2回に分けて実地調査した。調査では写真が撮影された場所を特定し、現状との比較を行った。 (1) 第1回調査、河南省鄭州から開封・登封、8月16日～8月23日 龍亭、鉄塔、相国寺、禹王台、繁塔、蘭儀口、虎牢関、鞏県石窟、宋陵(永昭陵)、宋陵(永熙陵)、昇仙太子碑、会善寺、永泰寺、少林寺、劉碑寺、中岳廟、嵩陽書院、嵩岳寺塔、法王寺、崇福宮、三関(太室関、少室関、啓母関)、法海寺 (2) 第2回調査、河南省湯陰から河北省荊州 11月20日～11月25日 河南省湯陰：岳飛廟、韓公廟、昼錦堂、河南省安陽：天寧寺、鄴城遺跡、南響堂石窟、河北省邯鄲：黄梁夢、河北省荊州：予讓橋跡			
			
		明治42年 塚本靖撮影 蘭儀口黄河船舶	現在の蘭儀口の様子 (河南省開封市蘭考県)
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目。 28年度の調査回数2回。 平成館企画展示室で特集「清国踏査遊記—関野貞・塚本靖が撮影した史跡写真」(7月26日～9月4日)を開催した。			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、年度計画をほぼ達成した。27年度、調査できなかった河北省の調査地を含め、28年度に予定していた河南省調査地をほぼ調査することができた。また、調査の成果として特集展示を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。本研究計画では、清朝末期に行われた岡倉天心・早崎稜吉、塚本靖の中国調査の行程を3ヵ年に分けて実地調査を計画しており、進捗状況はほぼ順調である。 最終年度である29年度は28年度の調査に引き続き、河南省洛陽以西から長江沿いの調査を行い、全行程を調査する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (コ) 古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する研究(科学研究助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は我が国において伝来、また出土した染織作品を通じ、広く古代東アジア世界における染織文化の実像を明らかにしようとする試みである。これまで日本染織史の分野で研究されてきた作品を国際的な文化交流の枠組みで捉えなおし、我が国に伝来した染織作品がもつ意義の大きさを明らかにしたい。また、考古遺物に付着した繊維を詳細に調査・検討することで、現在では形の失われた作品の遺存状態や織物などの種類、仕様等を通して現存作品と比較検討し、古代東アジアにおける染織品の使用法についても、その実態の解明を目指すものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	客員研究員 沢田むつ代
【主な成果】 (1) 主な調査 ・福岡県大野城市・善一田古墳群出土の盛矢具(胡籬金具と韃金具)等の調査。同古墳群に関する発掘調査では、複数の盛矢具が出土した。他の出土遺物とともに、年代判定の上では重要な要素をもつ貴重な遺物であった。 ・茨城県行方市・三味塚古墳出土品の調査。現在は遺物が2ヵ所(明治大学博物館と茨城県立歴史館)に分かれて所蔵されている出土遺物の調査。 ・法隆寺献納宝物を含む法隆寺伝来の染織品調査(本格修理作品16件に対する事前調査)、通年。 (2) 主な調査成果 ・三味塚古墳出土の遺物は、過去に調査が行われ、報告書も出版されているが、今回、2ヵ所に分散した遺物を調査した結果、遺物に付着した繊維については、これまで言及されていない新発見が得られた。 (3) 主な調査成果の発表 ・これまで2年にわたって調査を行ってきた新潟県胎内市・城の山古墳出土の繊維付着の遺物に関する調査成果の論文を、10月に刊行された『城の山古墳発掘調査報告書(4次～9次調査)』に掲載した。 ・これまで2年間調査を行ってきた宮崎県えびの市・島内地下式横穴墓出土品に付着した繊維について、調査成果の論文を、29年3月に刊行された『島内地下式横穴墓群V 灰塚地下式横穴墓群』に掲載した。 ・これまで3年間調査を行ってきた群馬県・金井東裏遺跡出土の挂甲等に付着した繊維について、調査成果の論文を29年3月に刊行された『金井東裏遺跡 甲着装人骨詳細調査報告書』に掲載した。なお、挂甲に付着した織物から、当時の衣服の素材等が明らかとなり、衝角付甲等については、これまで報告されていない珍しい装飾仕様が確認された。 ・法隆寺献納宝物を含む法隆寺伝来の染織品修理の成果については『MUSEUM』662号で論文の発表を行った。 ・これまで長年調査・研究を続けてきた法隆寺献納宝物の経緋(広東裂)の調査・研究成果をまとめた論文を『MUSEUM』へ投稿した(『MUSEUM』667号、29年4月掲載予定)。			
			
		上代裂の調査・修理風景	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目(ただし、1年間の延長手続きにより、29年度も継続)。 (1) 調査回数：三味塚古墳出土の遺物に付着する繊維等の調査ほか8件。 (2) 論文等の成果物：①沢田むつ代「法隆寺伝来・上代裂 額織・綾・錦・組紐・刺繍・氈等の残欠一平成二十四年度修理の成果」、『MUSEUM』662号、東京国立博物館、6月。②沢田むつ代「城の山古墳出土品付着の織物の仕様事例」『城の山古墳発掘調査報告書(4次～9次調査)』新潟県胎内市教育委員会、10月。③沢田むつ代「島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する繊維等について」『島内地下式横穴墓群V 灰塚地下式横穴墓群』宮崎県えびの市教育委員会、29年3月。④沢田むつ代「金井東裏遺跡出土の挂甲等と横切板鋸留衝角付甲等に付着する織物等について」『金井東裏遺跡 甲着装人骨詳細調査報告書』群馬県教育委員会、29年3月。 (3) 講演会等の回数：3件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
C	28年度は、三味塚古墳出土の遺物等の国内調査はある程度遂行することができた。ただし、28年度は、科学研究費助成事業の最終年度であったが、海外調査を行っていない事情から、29年度の本事業の延長手続きを行ったので、29年度は国内外について調査の機会を拡充させたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施することができた。科学研究費助成事業3年計画において、国内調査についてはある程度実施することができたが、海外調査を行うことができなかったため、さらに、科学研究費助成事業を1年延長し、29年度は報告書の刊行も視野に入れ、より調査研究の機会を充実させたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (サ) 東アジアにおける繡仏の基礎的調査研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1)) (研究代表者: 京都国立博物館企画室長 伊藤信二)		
【事業概要】 本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表した「繡仏」について、中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査に基づいて図像・技法・様式・用例を分析することで、仏教絵画史及び工芸史の観点から同時代繡仏を総合的・体系的に捉えることを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課出版企画室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 中国チベット自治区所在の仏教工芸を中心とする工芸品の実見調査を実施した。調査地は下記のとおり。 ラサ : デブン寺、ガンデン寺、セラ寺、葯王山、ポタラ宮、清政府駐蔵大臣衙門、西藏博物館、大昭寺 シガツェ : タシルンボ寺、シャル寺 ツェタン : ミンドウリン寺、サムイェー寺 (2) 調査の結果得られた知見 中国のチベット自治区所在の仏教工芸を対象とする図像・技法・様式・用例に関する調査を行うことにより、中国大陸の工芸品について地域および民族の造形的特質によって細分して検討する知見を得ることができた。 (3) 調査研究の成果 東京国立博物館が所蔵する東洋資料の列品のうち、特にチベット関係資料の整理に資する知見を得た。 東京国立博物館が所蔵する東洋工芸の管理や活用に関する知見を得た。			
			
刺繍法王像タンカ 西藏博物館 ツェタン: ミンドウリン寺壁画の調査			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の4年目 作品調査地12箇所(中国チベット自治区) 9月19日(月)ラサ: デブン寺、ガンデン寺、セラ寺 9月20日(火)ラサ: 葯王山、ポタラ宮、清政府駐蔵大臣衙門、西藏博物館、大昭寺 9月21日(水)シガツェ: タシルンボ寺、シャル寺 9月22日(木)ツェタン: ミンドウリン寺、サムイェー寺 研究分担者: 企画課出版企画室主任研究員 猪熊兼樹、列品管理課平常展調整室主任研究員 土屋貴裕、 列品管理課平常展調整室研究員 末兼俊彦			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の最終年度である28年度は、中国チベット自治区所在の仏教工芸を対象として、図像・技法・様式・用例に関する調査を行った。本調査により、東京国立博物館が所蔵するチベット関係資料の保管・整理に資する知見、また東アジア工芸史の研究に資する知見を得た。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究調査研究を実施した。28年度は本研究計画の最終年度にあたる。研究期間を通じて、中国の特にチベット自治区所在の仏教工芸を対象とする図像・技法・様式・用例に関する調査を行うことができた。本調査の成果を通じて、東京国立博物館が所蔵するチベット関係資料の整備を一層進捗させることができ、報告者が構想する東アジア宮廷史研究にも資する情報を収集できた。また本研究を通じて得た知見は東京国立博物館が所蔵する東洋工芸を展示する上でも活用できる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ (シ) 高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相に関する調査研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は京都・神護寺に伝来する高雄曼荼羅を中心とする研究である。高雄曼荼羅は空海が中国より請来した両界曼荼羅を写したものであるが、類する作品は中国には残っていない。その表現は多分にインド的であるが、当代にさかのぼる絵画作品はインドにはわずかしか残っておらずインドとの具体的関係は明らかになってはいない。おそらくその表現は、インドの表現が、中国、日本で受容される過程で、それぞれの表現的要素を取り入れたものと考えられる。本研究は、高雄曼荼羅とそれに関係する国内外の作品を検討し、古代アジアの仏教美術の様相を探ろうとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	副館長 松本伸之
【主な成果】 (1) 韓国・国立中央博物館所蔵の西域絵画の調査(6月12日) (2) 中国・陝西歴史博物館、における絵画、彫刻作品の調査(9月22～23日) 本研究の中心テーマである高雄曼荼羅(両界曼荼羅)は中国で描かれた曼荼羅を模したものであるが、中国には同時代の本格的な両界曼荼羅は残っていない。同時代の仏教絵画や世俗絵画も多いとはいえず、国立中央博物館や陝西歴史博物館所蔵作品は貴重な作品である。(1)(2)の調査は、身体表現を中心テーマに実施し、高雄曼荼羅の身体表現の源流について考察する資料を得た。また、碑林博物館では、空海入唐よりも少し早い時期に造られた密教尊像の調査を実施し、高雄曼荼羅の身体表現との比較検討を行った。 (3) スリランカにおける密教美術の調査(29年2月25日～3月2日) 密教ではが独特の法具が用いられるが、密教が生まれたインドにはそれらが残されていない。インドに地理的に近いスリランカにはわずかに残っていて、本調査ではそれらの調査を実施した。その中で、日本では紹介されていない五鈷杵を見出すことができた。 (4) 京都・醍醐寺の密教美術の調査(8月1～2日) 空海の孫弟子にあたる聖宝が開いた京都・醍醐寺に伝わる絵画・書跡・彫刻・工芸などの密教美術の調査を実施した。調査の際には空海没後の密教美術の変容を考察する資料などを作成した。			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の3年目 調査回数：海外3回、国内1回			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の3年目である28年度は、これまでに実施してきたインドにおける作品調査を踏まえ、それらと密接に関連するスリランカの絵画、彫刻等の調査を実施した。また、高雄曼荼羅の製作と近い時期に製作された中国の絵画・彫刻も調査した。それらを通して写真等の多くの資料を作成することができた。また、醍醐寺をはじめとした国内の密教美術の調査も実施した。高雄曼荼羅を、インドの表現が、中国、日本で受容される過程で、それぞれの表現的要素を取り入れたものとする本研究にふさわしい成果を上げることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。28年度は、高雄曼荼羅に関連するインド、中国、朝鮮半島、日本の絵画・彫刻等の作品を調査した。29年度は最終年度に当たるので、これまでの成果をまとめて報告書の刊行を準備するとともに、作品調査も実施する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ a. 大小摺物（絵暦）の美術史及び文化史に関する総合研究（科学研究費助成事業）（(4)-①-1）		
【事業概要】 東京国立博物館蔵「大小類聚」の精査とデータベース作成・公開（研究者対象）			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	客員研究員 岩崎均史
【主な成果】 本科研初年度にあたる28年度は、東京国立博物館所蔵の「大小類聚」（全20冊）中の巻1～巻12までの大小個々のデータ採取（寸法・摺／写の判別・注行者・絵師情報、文字の翻刻・印章の判読）を行い、データベースに入力しつつデータの内容検証を行い、巻12までを完了した。29年度以降このデータベースに大小の形態（趣向及び別途分類も含む）、干支情報などを加えていく。 研究分担者とは常に連絡を密にし、進行状況の報告など相互に行っているが、9月15日には、東京国立博物館において、岩崎均史（代表者）と以下の研究分担者、田沢裕賀（東京国立博物館調査研究課長）、大久保純一（国立歴史博物館教授）、桑山童奈（神奈川県立博物館学芸員）、及び研究協力者北川博子（あべのハルカス美術館主任研究員）、大和あすか（静岡市東海道広重美術館学芸員）、（研究分担者の法政大学教授小林ふみ子は、海外調査のため不参加）以上6名による最初の研究会を開催した。内容は現状の説明と確認、個々の分担内容確認、今後のスケジュール確認、東京国立博物館蔵の「大小類聚」の熟覧を実施した。 研究会では他に、関西方面の関連資料の存在確認と調査を計画すること、神奈川県立博物館の長谷部言人コレクション（長谷部家寄託）に関して、いずれは平行して同様の調査を行うことと、コレクションの帰属に関しても本研究の成果を生かすことなど、研究の深化を深める情報が確認された。			
			
「大小類聚」の調査風景		東京国立博物館所蔵「大小類聚」巻12	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である28年度は、事前に調査を行っていた東博所蔵の「大小類聚」（全20冊）の再調査と確認、データ化を進めた。作業は、初年度ながら主要部分を含む12冊までを終えることができ、年次別の摺り（オリジナル）と描き（コピー）の区別を明らかにすることができ、「大小類聚」の編纂が、当初よりのものでなく、次第に精度を上げていったことを検証することができた。これにより、29年度以降の研究発展に対する視点を確立することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の調査を外部専門家の協力によって行った。28年度は、収蔵作品の調査が中心であったが、研究会により、同種の作品の所在と、調査方法を確立することができた。 29年度以降、他の所蔵先の作品調査を重ねることで、大小摺物（絵暦）の文化史的重要性を明らかにすることができる状況にある。その成果として、データベースの公開を行い、将来的に様々な展示での活用が図られる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ b. 徳川将軍家の御物形成と御用絵師の役割に関する研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）		
【事業概要】 本研究は、明暦の大火後に再構築されていく徳川将軍家の御物形成の様相について、その目録諸本と献上・下賜の記録を調査するものである。それによって御物形成における御用絵師の役割を明らかにし、王権への芸術の関わりという江戸文化の重要な一側面を提示するものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員 小野真由美
【主な成果】 (1) 御用絵師の狩野探幽と狩野常信が、明暦の大火後に蓄積した鑑定控「探幽縮図」と「常信縮図」の調査を進めた。まず「探幽縮図」については、先行研究の成果をデータ化し、とくに注記の翻刻とそのデジタルテキスト化に着手した。また「常信縮図」（東京国立博物館本 57 巻）については、全巻の撮影を行った。 (2) 徳川将軍家の御物目録のうち、もっとも基本となる「御数寄道具之帳」（東京大学付属図書館）、「明暦大火焼失茶道具目録」（篠山市立青山歴史村）、「銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳」（東京文化財研究所）、「諸家遺物得物献上記」（国立公文書館）、「将軍家御物御茶湯道具」（国会図書館）の 5 件の調査を行った。この調査によって、明暦の大火前後の徳川将軍家の御物の輪郭が明らかとなり、大火後の目録編纂に御用絵師が重要な役割を担っていたことが明らかとなってきた。 (3) 鑑定控「探幽縮図」「常信縮図」及び御物目録諸本の調査によって、御用絵師とともに、幕府重臣・永井尚政の関与がみえてきた。よって永井家関連史料を調査し、永井家と探幽、常信の交友をはじめ、御物形成に関わる人物の研究を進めた。 (4) 御用絵師のなかでも表絵師の家系である御徒士町狩野家について調査し、狩野長信筆の新出作品「山水図」について新知見をまとめた。			
【備考】 科学研究費助成事業の 3 年計画の 1 年目。 作品調査：6 件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の初年度である28年度は、御物目録の編纂における御用絵師の関わりを中心に調査した。 ・鑑定控「探幽縮図」「常信縮図」はこれまで、模本や絵手本と位置付けられてきた。しかし、本研究では御物形成と関連付けて調査したことで、多くの新知見を得た。 ・柳営御物の目録諸本は江戸文化の重要な基礎的情報を有するもので、その調査・データ化は美術史、文化史において必要性の高いものである。 ・幕臣と御用絵師の交友だけでなく、幕府の制度面でも名物の鑑定・下賜品の制作が公的に行われたことが、御物形成に寄与していたという本研究の着眼点は、新規性に富み、江戸文化の底流を捉えなおすことのできる意義ある成果が期待される。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 ・29年度以降は、明暦の大火後の徳川将軍家の御物形成の様相を、元禄4年の狩野常信、狩野洞雲らによる鑑定内容によって明確にしていきたい。そのため、28年度は目録諸本によって明暦の大火前後の御物の輪郭を明らかにすることができた。 ・本研究の目的である御用絵師の役割の解明に向けて、引き続き「探幽縮図」「常信縮図」の詳細な調査と、将軍へ献上された名物とともに下賜品の調査を進めていくことを課題とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ c. ディルムン文明の起源－バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究－（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）		
【事業概要】 科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金により全5年度にわたって実施される調査研究の第3年度。27年度に引き続き、バハレーン王国において、平成29年1～2月の5週間、初期ディルムン時代の古墳群の考古学的調査研究を実施し、またアラブ首長国連邦（UAE）において、平成29年2月初頭の1週間、関連する古代遺跡の情報収集を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	客員研究員 後藤健
【主な成果】 (1) 調査概要：バハレーン本島内陸部、ワーディー・アッ=サイルにある初期ディルムン時代の古墳群において、本年度は2基の比較的大型の高塚式古墳（WS4、WS5号）を新たに発掘した。ドローンによる同遺跡の空撮を実施した。またアラブ首長国連邦（UAE）の博物館、遺跡において関連文化財に関する新情報を収集した。 (2) 調査の結果得られた知見：バハレーンで発掘した古墳の3D計測により、WS4号は径11.5m、現存高0.9m、またWS5号は径8.4m、現存高0.8mの円形積石塚で、中心部に堅穴式の石室1室をもつことなどが明らかになった。石室内の被葬者はいずれも1体であり、死者の食糧として調理された山羊の骨付き肉が備えられていた。またドローンによる空撮により、無数に分布する大小の古墳群はいくつかのグループに分けられることがわかった。尚UAEにおいては前3千年紀後半のウンム・ン=ナル文明に関する文化財の発見が近年相次いでいるが、バハレーンにおけるディルムン文明の起源と強い関係があることが、実地に確認された。 (3) 調査研究の成果：過去2回の調査成果に加えて、ディルムン時代の初期型古墳の造営法が一層明らかになった。それは前2050年頃以降の後期型古墳の造営法に発展するものである。			
			
現地日本人会を対象とする発掘現場説明会		ドローンによる3D空撮	
			
UAEの関連遺跡ヒーリー1号墓			
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の3年目 本年度はバハレーンにおける古墳2基の発掘調査と、UAEにおける予備的調査を実施した。 ・公式概報：Gotoh T. et al., <i>Preliminary Report on the Archaeological Excavation at Wadi as-Sail 2017</i> . ・論文：安倍・上杉・西藤・後藤「ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』18（2017年）（印刷中）。 ・口頭発表：Masashi Abe, “Dilmun Era Climate Changes,” Feb. 29, Bahrain National Museum.			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	科学研究費助成事業5年計画の3年目である28年度は、前年度に引き続きバハレーン王国に所在するディルムン時代のワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的調査を中心に実施された。本年度は同国で最初のドローンによる3D空撮を許可され、遺跡（現存部）全体における古墳の配置掌握とグループ化が進められたことは画期的な成果であった。また径10m前後の比較的大型の初期型古墳2基を前2年度に引き続き調査し、その造営法に関して、これまでにない知見を得たことから、所期の目的であるディルムン文明の起源解明に1歩近づくことに成功した。今後も調査を継続することにより、より多くのデータを入手し、目的に到達したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究調査研究を実施した。平成26～30年度にわたる全体計画の中で、バハレーン王国ワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的発掘調査は中核を占めるものであるが、現在までにすでに5基を精査しており、所期の成果を挙げつつある。それ以外に、バハレーン島では皆無とされていた鍾乳洞を発見し、ディルムン時代における気候変動を証明するなど、本研究がペルシア湾地域を対象とする世界の考古学研究に及ぼした影響は少なくない。29年度以降はワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的発掘調査を継続し、より多くのデータを収集するとともに、その成果を内外に発信していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ d. 東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）（研究代表者：筑波大学大学院教授 守屋正彦）		
【事業概要】 東アジアの人々の間には、儒教に基づく礼拝空間における形象が共通の視覚イメージの一つとなっており、またそれに関わる漢詩文も思想の背景として今日まで共有されている。儀式のあり方、礼拝の諸像の形式や配置、また唱道する詩文や作法などの視点から、東アジアに遍在する礼拝の「かたち」の表象を解釈することによって、地域間や民族間の文化の多様性を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育講座室長 勝木言一郎
【主な成果】 28年度は27年度に引き続き、儒教の影響を受けた仏教経典、そしてそれに基づいてつくられた図像に関する調査研究に重点を置いた。 1. 黒水城出土文献に記された父母恩重経の研究 父母恩重経は父母に対する孝道を説く仏教経典であるが、近年の学説では唐代に中国で撰述された偽経とする見方が有力である。そこで黒水城出土文献に徴し、父母恩重経や父母恩重経講経文について調査を進め、寧夏回族自治区カラ・ホト地区における父母恩重経の受容を考察した。 2. 父母恩重経の中国における受容と展開に関する研究 敦煌文書、黒水城出土文献に徴し、父母恩重経のテキストを比較するとともに、敦煌やカラ・ホトにおける父母恩重経の受容と展開について考察を行った。 とくに大足石刻宝頂山石窟における父母恩重経変相の図像について研究を進めた。その結果、大足石刻宝頂山石窟の父母恩重経変相は、敦煌壁画に描かれた父母恩重経変相と別系統のテキストに依拠していることが明らかとなった。その研究成果の一部は「大足石刻宝頂山石窟における父母恩重経変相の図像に関する一考察」と題した論文を『「東アジア文化の基層としての儒教イメージに関する研究」論文集2017』に掲載する形で公表した。 また当館が所蔵する西域美術の模写の中に父母恩重経変相と特定される作品が確認された。次年度の平常展の中でそれらを公表することとした。 3. 中国における孝子伝の研究 父母恩重経変相は中国の孝子伝の影響を強く受けたとする従来の学説を踏まえて、中国の孝子伝を敦煌文書に徴し、孝子伝の諸相と展開を考察した。			
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の3年目			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業5年計画の3年目である28年度は、父母恩重経の調査対象を黒水城出土文献にまで拡大するとともに、中国の孝子伝による影響についても調査が進んだ。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。中国西北部、西南部における父母恩重経の受容について分析するとともに、父母恩重経が中国の孝子伝を受容していった過程を考察した。29年度は父母恩重経のテキストの体系化を図り、最終年度の30年度は父母恩重経と孝子伝との関係を考察する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ e. 「地域考古学」と「聖書考古学」の協業による古代パレスチナ地域史の再構築（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）（研究代表者：天理大学教授 桑原久男）		
【事業概要】 古代オリエント史、その中でも古代パレスチナ地域史の再構築を試みる考古学的研究。当域の古代史は概して、断片的な文献史料や旧約聖書の記述に依拠したかたちで描かれてきた。これに対して、本プロジェクトは、「地域考古学」と「聖書考古学」の立場を対峙させ、双方のコミュニケーションを重ねることで、より魅力的な古代パレスチナ史を提示することを目的とする。 本分担研究が属する「地域考古学」班では、既存の歴史観や資料に対する先入観を極力取りのぞき、発掘で得られた一次資料を丹念に分析することで地域史の復元、再構築に取り組んだ。イスラエル国内の都市遺跡、テル・レヘシュにおいて発掘調査を実施し、青銅器時代の都市国家システムや、鉄器時代末期の帝国支配地域の実態を実証的に検証することができた。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 小野塚拓造
【主な成果】 28年度は研究代表者、分担者とともに2件の海外調査を実施し、古代パレスチナ史を再構築する上で貴重な学術的成果を得ることができた。成果の一部は予備報告の中で紹介したほか、より学術的な論考を準備中である。 (1) テル・レヘシュの発掘調査 ・後期青銅器時代末期（前13世紀）の建築遺構を発掘。出土物の記録と予備的な分析を実施した。その結果、エジプトとの接触を示す土器群が見出され、エジプト第19王朝のパレスチナ北部への進出と、在地の都市国家社会がエジプト人と接触していたことを示す新たな知見を得ることができた。 ・鉄器時代末期の大型複合建築の一部を27年度から継続して発掘。同建造物は前7世紀末～前6世紀に、軍事的・行政的な拠点であったと目される。28年度には出土物の検討を行い、東地中海地域から搬入された遺物を多数見出すことができた。調査成果の予察からは、西アジアに帝国が出現することで形成された新たな経済圏において活発化した海洋交易の影響が、パレスチナ各地に及んでいたという結論を得た。 ・1世紀頃のシナゴグを発見し、新聞等で発信した。 (2) ティムナ銅鉱山遺跡及び冶金作業場址の訪問 ・主に後期青銅器時代に銅の採掘が活発に行われたティムナ溪谷の遺跡をめぐり、同時代の在地の都市国家とエジプト新王国に関する学術情報を収集した。			
			
		出土し始めた鉄器時代の石壁 土器の復元作業	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 (1) 海外調査 2件 (2) 論文発表2件、シンポジウムでのパネルディスカッション 1件 (3) 新聞による関連報道 7件			


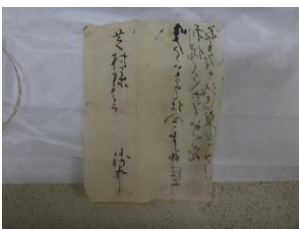
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、継続的に実施しているテル・レヘシュの発掘調査を基軸に、上述した古代パレスチナ史の新たな一面を解明することに成功した。成果は一次資料にもとづく極めて重要な知見を含むもので、古代西アジアに関連する諸分野で注目されるものと期待できる。同地の古代史は『旧約聖書』やキリスト教の誕生などと関連があり、調査成果が7件の新聞記事になったことが示すように、社会的な関心と要請度の高いテーマでもある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。本科研プロジェクトは、テル・レヘシュの調査成果を基礎資料とし、古代パレスチナ史の再構築を目指すものである。2年目にあたる28年度には、先行研究にはない新たな知見を多数得ることができた。29年度に実施される研究の総括に向けて、順調に分担研究を進めることができたと評価できる。29年度は、最終的な調査成果を社会に発信するとともに、有形文化財の基礎的調査に基づく地道な歴史研究の面白さと重要性を示すことが課題となる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ f. 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1)) (研究代表者：九州国立博物館長 島谷弘幸)		
【事業概要】 在欧博物館を対象として、これまでに日本からの調査が及んでいない日本仏教美術作品の悉皆調査の実施と、新たな仏教美術作品の発掘を図る。それらの結果を、オリジナルデータの英語に日本語を付記し、高精細画像と共に総合的にデジタル化する。そのデータをもとに、日本の中だけの研究では分からなかった日本仏教美術の特性をより詳細に解明するとともに、欧州における日本仏教美術研究の進展を図り、日本文化研究の牽引役となる。また、欧州側の日本関係美術品の取扱技術を向上させ、さらに修復技術者の育成も可能にする道を開くことをも目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 丸山士郎
【主な成果】 (1) 調査用関連データ収集・整理 (9月9日ほか) A) 調査前に先方より資料画像の収集を行い、調査用に整理をした。(379点) B) 調査に関連する資料の収集を行った。すでに公刊されている図書や雑誌から関連する記事を抜き出した。 (2) 調査時に収集したデータの整理を行った (11月24日、29年3月23日ほか) A) 調査した際に撮影した画像の整理を行った。 ①浅見調査分 (ドイツ・デュースブルグ・ミュージアム DKM ほか 11月18～21日) ②恵美調査分 (ドイツ・ケルン東洋美術館ほか 29年3月6～12日) B) 調査した際に取得した作品データの整理を行った。			
			
調査風景		附属品の画像	
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の1年目 (1) 調査用関連データ収集・整理 A) 画像整理：379点 B) 資料収集・整理：約50点 (2) 調査時に収集したデータの整理 A) 調査した際に撮影した画像の整理：682点 ①浅見調査分 379点 ②恵美調査分 303点 B) 調査した際に取得した作品データの整理：24件 (391点)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業5年計画の初年度である28年度は、まず課題となっていたドイツの博物館美術館に所在する日本仏教美術の調査を行った。その調査で、在欧個人コレクションにおいて新たな日本仏教彫刻を発掘することができた。ドイツ調査を実施するための前準備である画像や資料の収集と整理により、調査を滞りなく実行することができ、調査後のデータも速やかに整理できたため、順調に進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。本科学研究費助成事業では、在欧博物館に所在する日本仏教美術を調査し、データベースとして公開することを目標としているが、28年度はドイツ国内に所在する日本仏教美術の調査とデータ整理を実施した。29年度には別の在欧博物館における日本仏教美術の調査を実施し、そのデータを増やして行く予定である。29年度以降には、調査した日本仏教美術について制作年代など詳細を研究検討することを課題として、データの充実を図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ g. 武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1) (研究代表者: 国立歴史民俗博物館 上野祥史)		
【事業概要】 古墳時代は、象徴的な器物の授受を通じて、王権中枢が地域社会との関係を構築した時代である。5世紀の古墳時代中期には、武器と武具とを組み合わせた武装具が王権から地域社会(首長)へと配布される象徴的器物であった。本研究は、武装具が古墳に集積する現象に注目し、古墳時代中期社会の特質を描き出すことを目的とする。典型的な事例として、奈良県円照寺墓山1号墳の出土資料を採り上げ、出土品(武装具・青銅鏡など)の調査・実測を経て全体像を分析し、武装具が集積することの意味を「王権」「地域」「東アジア」という3つの視座から検討する。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【主な成果】 古墳時代中期における武装具集積の典型資料の調査及び研究会を実施し、28年度は次のような研究成果があった。 1 東京国立博物館所蔵資料を整理して、基礎情報を提示するために実測調査を進めた。 2 調査情報を基礎として、研究会で「武装具の集積現象」を比較・検討し、研究を推進した。 ① 実施概要 1) 東京国立博物館において、4月2・23日、5月7・22・25～28日、6月18日、7月2・9・23・30日、8月12・13・15～17日、9月10・17日(以上、調査)、8月14日(研究会)の日程で調査及び研究会を開催し、円照寺墓山1号墳出土資料の整理・実測調査及び研究会を進めた。 2) 資料調査の際は、研究協力者を雇用して、実測図の作成等の資料化を推進した。 3) 11月21日に、大阪市文化財協会における報告書原稿の統一・読合せを中心とした研究会と、翌22日に列品(奈良県円照寺墓山1号墳出土品)出土地の現地踏査を行なった。 ② 成果・知見等 : 東京国立博物館における研究会で、分析結果の研究報告を行い、論点の整理とその共有化を図り、これまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析した。			
			
○列品調査(左) 及び列品出土地踏査(右) 風景(8月15日、11月22日)			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の4年目 ○調査・研究会回数(日数) : 16回(21日間)・2回(2日間) ○調査対象・件数 : 東京国立博物館所蔵 奈良県円照寺墓山1号墳出土資料(約80件) ○主な学会等発表等・論文等公開 : 古谷 毅「大塚古墳が築かれた時代-副葬品から見た古墳時代中期における大塚古墳-」『山梨考古』第141号(2016年度 地域大会特集号)、10月1日、山梨県考古学協会 他			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
D	科学研究費助成事業4年計画の最終年度である28年度は、研究計画の継続性・適時性・正確性および発展性・独創性について、問題はないと考えられる。達成度については、上半期の調査回数は十分であったが、下半期は館の業務方針により東京国立博物館における資料整理(列品整理)を大幅に縮小または中断したため、研究目標を達成できなかった。29年度は、継続計画で27年度評価(B)を上廻るように、研究環境の改善と研究予算運用の効率性・適時性と研究精度の向上を図り、本研究の到達目標とした成果を挽回・確保し、公開に向けた準備(報告書作成)を進める所存である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
C	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を計画した。①の学術的評価に関して、考古学的情報の整理・資料化及び研究会等を通じた活動はある程度目標を達成したが、東京国立博物館所蔵資料(列品)公開に資する調査・研究としては、上記の理由から十分に蓄積が行えなかった。29年度は、中期計画における「4-1)所蔵品・寄託品及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究」に沿った調査研究として成果を挙げることが出来るように改善を図り、高度な研究体制と研究環境の確立と効率性・適時性及び発展性・独創性を一層進展させ、列品情報の整備と研究成果(情報)の公開を目標とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ h. 極薄青銅器と響銅を対象にした製作技術の比較 ―東アジア金属工芸史の再構築― (科学研究費助成事業) ((4)-①-1)) (研究代表者：九州国立博物館学芸部企画課特別展 室主任研究員 川村佳男)		
【事業概要】 戦国時代（紀元前5世紀）以降の中国で急速に普及していった、厚さ1mmに満たない青銅製容器「極薄青銅器」の製作技術について、3Dスキャン、蛍光X線元素分析装置など光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明する。また、南北朝時代（5世紀）以降に流行した轆轤挽きによる薄作りの青銅器「響銅」の製作技術との比較を通して、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【主な成果】 (1) 注口のついた匱（はぞう）という極薄青銅器の製作技術、とくに注口の部分に関する技術について、「鑢（ろ）付け」によって鑄造実験したサンプル（写真右）と「一鑄」によって鑄造実験したサンプル（同左）の内部構造をCTスキャンで解析した。注口の成形は両技法で可能であり、外見に大きな相違は見られないが、CT画像により注口基部に明瞭な違いを見出せることが分かった。 (2) 和泉市久保惣記念美術館や中国陝西省の博物館が所蔵する響銅の製作技術に関する調査を実施し、中国の唐時代に製作されたと考えられてきた響銅のなかに、日本の奈良時代製のものがある可能性がわかった。 (3) Cu（銅）・Si（錫）・Pb（鉛）の比率を少しずつ変えながら鑄造した各種サンプルに轆轤挽き（ろくろひき）成形を行い、どの比率で鑄造したものが響銅（きょうどう）に適しているのか実験を行った。 (4) 中国国家博物館及び首都博物館所蔵（11月21日～23日）の青銅器の展示調査を行った。			
			
異なる技術で作成した極薄青銅器実験サンプルのCT画像比較		響銅の実験サンプル	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目 専門的・技術的な援助・助言回数：4回。調査回数：6回。作品調査件数：約35件。撮影点数：約200カット。			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である28年度は、極薄青銅器の製作技術に関する調査、及び助言を行い、極薄青銅器の製作技術が多様であることを実験と調査によって示すことができた。実物の極薄青銅器に対してもCT画像を用いた内部構造を解析し、鑄造サンプルの解析結果と照合する課題は途中であるが、当初の目的はおおむね達成できたといえる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究調査研究を実施した。特に、28年度は匱の注口部分を対象にして、極薄青銅器の製作技術と製作痕の対応関係に関する基礎的な成果を熟覧とCT撮影によって得ることができた。29年度以降は極薄青銅器のその他の部位についても光学機器による解析や熟覧を進め、極薄青銅器の製作技術に見られる多様性及び時期的・地域的な差異と多様性との関連を考察していきたい。最終的に、響銅が5・6世紀の中国ひいては東アジアに展開した響銅の製作技術と、戦国時代の紀元前5世紀に出現した極薄青銅器の製作技術を比較し、両者の関係性の有無を明らかにすることを目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ i. 工芸の展開—金属工芸鑄金における真土型鑄造法の研究—(科学研究費助成事業)((4) —①—1)) (研究代表者: 東京藝術大学 赤沼潔)		
【事業概要】 日本各地及び中国など東アジアに残る鑄型の遺物と鑄造製品を調査分析し、そこから得られた情報に基づいて実際に製作を試みることによって、我国に伝わる真土型鑄造法の歴史的変遷と地域あるいは時代による技術材料的な特性を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 神庭信幸
【主な成果】			
(1) 第1回調査: 10月12日 芸大鑄金研究室にて狛犬鑄造実験の実施。			
			
狛犬鑄造実験風景			
(2) 第2回調査: 10月27日 ワシントンにあるアフリカン・アメリカン歴史博物館にて金属製装飾品の調査を実施。 金属装飾品、金属工具などの製作技術に関し、鑄造法に注目してヨーロッパ、アフリカ、北米における16世紀以降の真土型鑄造技術の利用と展開について調査を行った。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 調査会: 2回			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、真土型鑄造法の原型製作、外型製作、内型製作、乾燥、鑄込み、研磨、着色など実際の作業を再現することにより、作業工程の記録と作業結果の検証を連続的に行うことができた。これにより、映像記録及び鑄造物を用いた他の鑄造法との比較研究が可能な基盤ができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施することができた。また、27年度の調査結果などに基づいて再現実験を実施できたことは大きな成果である。最終年度では真土型鑄造法に関する技術、材料などについて映像および文献をアーカイブ化する予定で進んでいる。これまでの調査・再現実験などを通じて、再現実験にやや遅れがあるものの必要な作業は計画通り進んでいる。29年度に向けてスケジュール管理を確実に進めている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ j. 対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究—大航海時代を中心に—(科学研究費助成事業)((4)①-1)(研究代表者:東京文化財研究所文化財情報資料部広領域研究室長 小林公治)		
【事業概要】 16世紀から17世紀における南蛮漆器について、製作技法と作風の点から漆器・螺鈿・鍔金具を中心に考察を加え、製作地の同定と輸送ルートの解明及び現地での需要の実態を解明する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室 研究員 末兼俊彦
【主な成果】 南蛮漆器の主な需要地であるポルトガルに赴き、現地に伝わる当該作品及び日本製の文化財について調査を実施した。 ポルトガル・リスボン Museu Nacional de Arte Antiga Edificio da Torre do Tombo Museu Nacional de Arte Antiga Museu Militar Mosteiro dos Jeronimos Praca do Comercio & Arco da Rua Augusta Dra. Teresa Pames collection FUNDACAO ORIENTE MUSEU Palacio CONVENTO DA TRINDADE Santa Casa da Misericordia de Lisboa Jorge Welsh WORKS OF ART ・日本未紹介の関係資料について知見を得た。 ・ポルトガル伝来の作品について、日本国内向けの作品との差異を見出せた。 ・また、国内における関連作品についても調査を実施し、文化財用CTスキャナを活用した化学分析を行った。			
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の2年目 作品調査地12箇所 【9月19日】 Museu Nacional de Arte Antiga, Edificio da Torre do Tombo 【9月20日】 Museu Nacional de Arte Antiga, Museu Militar 【9月21日】 Mosteiro dos Jeronimos, Praca do Comercio & Arco da Rua Augusta, Dra. Teresa Pames collection 【9月22日】 FUNDACAO ORIENTE MUSEU, Palacio CONVENTO DA TRINDADE 【9月23日】 Santa Casa da Misericordia de Lisboa, Jorge Welsh WORKS OF ART 国内調査: 滋賀・藤栄神社所蔵洋剣			



(Santa Casa da Misericordia de Lisboa での調査)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業5年計画の2年目である28年度は、輸出漆器の主たる需要地・ポルトガルを対象として、同国の国公立・私立の博物館や個人所蔵者所有の当該作品について、製作技法と作風の点から漆器・螺鈿・鍔金具を中心に調査を行った。本調査により、日本未紹介の関係資料について知見を得た。また、日本国内に伝来する関係作品についても調査を進め、文化財用CTスキャナなど、国立文化財機構が所有する化学分析装置を活用した研究を行った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。研究期間を通じて、国内外に伝来する当該作品について広く調査を行うことができた。本調査の中には日本未紹介の新出の資料も多く含まれており、これまで知られていた作品との比較による研究の発展が見込まれる。報告者が構想する海路を中心とした文化交流にも資する情報を収集できた。また本研究を通じて得た知見は東京国立博物館が所蔵する作品を展示する上でも活用できる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ k. 日タイ間の文化交流に関する資料集成と統合的研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）（研究代表者：九州国立博物館学芸部企画課特別展室長 原田あゆみ）		
【事業概要】 本研究は、これまで知られてきた資料を、新出の交易・文化交流資料から見直し、日本とタイにおける文化交流の実相を再構築することを目的とする。これまで続けてきたタイにおける日本美術、日本におけるタイ美術の悉皆調査を継続させ、資料そのものに関する正しい評価を行い、これまで埋もれていた資料の活用を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室 研究員 末兼俊彦
【主な成果】 タイ王国国内における日タイ間の文化的交流を物語る作品について調査を行った。 特に、近代におけるタイ王国と日本の仏教文化交流を視野に入れ、日本国内に存在する作品について知見を得た。 京都 萬福寺、妙法院、仏光寺 愛知 日泰寺 ・日本国内に伝来する作品とタイ王国内の関係資料について知見を得た。 ・また、国内における関連作品についても調査を実施し、文化財用 CT スキャナや蛍光 X 線分析装置などを活用した化学分析を行った。			
			
		妙法院所蔵柄鏡	萬福寺所蔵のタイ金銅仏
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 作品調査地（国内）4カ所 萬福寺、妙法院、仏光寺、日泰寺。 九州国立博物館とタイ王国芸術局との学術協定による調査に参加し9月6～11日の期間、タイ王国のバンコク国立博物館、チャオ・サン・プラーヤー国立博物館にて作品調査を行い、日本国内伝来の作品と比較を行った。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、日タイ間での文化交流の実態を調べるため、近代における両国の交流に焦点をあて、その足掛かりとして京都・愛知の寺社伝来の仏教美術を中心に、製作技法と作風の点から調査を行った。文化財用CTスキャナなど、国立文化財機構が所有する化学分析装置を活用した研究を行った。本調査によりこれら関係資料について知見を得た。また、九州国立博物館とタイ王国芸術局との学術協定による調査に参加し、タイ王国内に伝来する各作品についても日本国内の作品との比較研究を行った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。28年度は本研究計画の2年目として、日本国内を中心に内外に伝来する当該の作品について広く調査を行うことができた。報告者が構想する海路を中心とした文化交流にも資する情報を収集できた。本調査の中には日本未紹介の新出の資料も多く含まれており、これまで知られていた作品との比較による研究の発展が見込まれる。また本研究を通じて得た知見は東京国立博物館が所蔵する作品を展示する上でも活用できる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 1. 住吉派の模写から見る近世御用絵師の絵画制作研究（科学研究費助成事業）（(4)-①-1）（研究代表者：鹿児島大学教授 下原美保）		
【事業概要】 本研究は古典文化復興の一環として近世初期に設立され、多くの古典模写を手掛けてきた幕府の御用絵師住吉派の模写研究を基盤とする。本研究の目的は、住吉派における模写の在り方—目的、画題選択、依頼主、活用方法等—を具体的に明示し、同じく幕府の御用絵師である狩野派や板谷派の模写と比較することで、同派のみならず、研究の遅れている近世御用絵師の絵画制作状況をより明確にすることである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課主任研究員 山下善也
【主な成果】 作品調査 (1) 東京国立博物館にて、住吉具慶筆「元三大師縁起画稿」7巻を調査（7月4日） 鹿児島大下原美保氏とともに。意見交換 (2) 東京都台東区上野の寛永寺護国院にて、住吉具慶以下一門合筆「元三大師像」を調査（8月18日） 鹿児島大下原美保氏ほかとともに。意見交換 (3) 東京国立博物館にて所蔵・寄託の住吉派作品・狩野派模本を調査（随時）山下单独で 大和絵専科と看做されがちな幕府御用絵師住吉家が、仏画・漢画なども実によく描き出していることが、(1)～(3)の調査によって確認された。			
			
寛永寺護国院にての調査風景			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画1年目 調査回数8回、15件			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である28年度は、東京国立博物館あるいは近隣に所在する住吉派作品の確認・調査を行った。行えていない狩野派模本との比較検討など、29年度の研究につなげていく基礎固めをすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。28年度は、身近な作品に関して住吉派の調査を中心に行い、所期の計画を概ね実施した。29年度は、調査する地域を館外へ広げるとともに、近世御用絵師である住吉派と狩野派の相異と共通点について研究していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ m. 19世紀日本の女性南画家の移動と交友圏（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）（研究代表者：実践女子大学文学部教授 仲町啓子）		
【事業概要】 本研究は、伝統的に〈交遊圏〉を存在基盤として展開した南画が、近代社会への適応という課題にいかに対処したかという点を、南画の主たる担い手である男性からの視点ではなく、女性たちの〈移動〉をキーワードとして分析し、新たな問題点を提起する。特に19世紀に限定して考察するのは、江戸時代的な遊歴と、幕末維新时期以降に現れる過激な〈移動〉を対比させるとともに、地方ごとの親密な〈交遊圏〉から、新たなパトロンの出現、さらには美術の制度化と皇后らによる国家的なプロジェクトが出現する過程を、断絶された「近代」ではなく、一連の持続的歴史的展開という側面から考察したいという意図による。〈移動〉と〈交遊圏〉の質的变化が、女性南画家の社会的存在形態を変化させただけでなく、表現方法・内容にも影響を及ぼす点も考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課主任研究員 山下善也
【主な成果】 (1) 静岡県立美術館にて「徳川の平和」展を調査（11月1日） 徳川幕府治世下の美術文化の成熟を肯定的に紹介する同展は、当科研の課題と密接にかかわるため、十分な時間をかけて調査する必要がある。 新出作品を含め19世紀の南画作品も数多く紹介されており、多くの収穫があった。 企画者である同館野田学芸員と意見交換をした。 (2) 東京国立博物館にて所蔵・寄託の19世紀の南画作品を調査（随時）			
 <p>南画作品の調査風景</p>			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目 調査回数5回、20点			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である28年度は、東京国立博物館に所在する女性南画作品及び交友圏の画家作品（館蔵品・寄託品）の確認・調査を行うとともに、静岡県立美術館「徳川の平和」展の調査を行った。特に「徳川の平和」展調査では、特別展企画者に直接取材することができ、南画家の交友圏について重要な情報収集ができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 28年度は、身近な作品に関して女性南画家及び交友圏の画家作品の調査を中心に行い、所期の計画を概ね実施し、研究対象のおおまかな見取り図的なもの把握することができた。29年度以降、さらに具体的な情報収集、関連付けを行い、研究の肉付けを進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究 1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ n. 「月次祭礼図模本」総合復元研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）（研究代表者：愛知県立芸術大学 岩永てるみ）		
【事業概要】 「月次祭礼図模本」（東京国立博物館）は室町時代（15世紀頃）に描かれた屏風絵を江戸時代に写したもので、原本はすでに失われている。本図は祇園会などの祭礼描写が丁寧で、洛中洛外図との関連性への関心から美術史的注目も一段と高いが、模本という制約によって本来の絵画表現は不明な点が多かった。本研究は、技法、歴史、美術史、材料の各分野からの専門知識や研究成果を総合して、原本の図像復元を目標に絵画分析を行う学際研究である。失われた原本図像を復元し、その過程で得られる各分野の研究成果を集約することで、中世と近世の狭間にある本図の表現や成立背景について解明を試みる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 瀬谷愛
【主な成果】 (1) 2年目となる28年度は、2度の研究会（9月12日、10月16日）が行われた。1年目に引き続き検討をもとに研究代表者の所属する愛知県立芸術大学で復元画制作が推進され、実際の作品制作へと進んだ。 (2) 復元画制作にあたって表現を比較するために計画していた作品調査について、所蔵者の都合により遂行できなかった。そのため、「月次祭礼図模本」と図様が近似することが指摘されている東京国立博物館所蔵の狩野益信（洞雲）筆「年中行事図屏風」（A-12439、江戸時代・17世紀）について、現在修理中であって外部の調査が行えないため、個別にその熟覧を行い、29年度のプロジェクト遂行に備えた。 「年中行事図屏風」6曲1隻のうち第4～6扇			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 研究会：2回			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
C	科学研究費助成事業の3年計画の2年目である28年度は、研究代表者の所属する愛知県立芸術大学での復元画制作作業が進む一方で、計画していた比較作品の調査については所蔵者の都合により遂行できなかった。改めて、「月次祭礼図模本」と図様が近似することが指摘されている東京国立博物館所蔵の狩野益信（洞雲）筆「年中行事図屏風」（A-12439、江戸時代・17世紀）の調査を課題に設定し、29年度に遂行できるよう努める。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。歴史学、美術史学からの検討を経て、2年目は具体的な復元図案の制作に入っており、切箔、本画の線描、彩色にかかっている。最終年度に調査を予定している当館所蔵「年中行事図屏風」に関する情報提供などを行うことにより、最終年度に完成予定の復元画の説得力を高めた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ o. 曾我蕭白筆「群仙図屏風」の図像およびその文化的背景に関する研究（出光文化福祉財団）（(4)－①－1）		
【事業概要】 「群仙図屏風」は曾我蕭白のもっとも著名な作品であるにも拘らず、画中の各人物の図像とそれらの総合的な意味が未だ解明されておらず、その型破りな構成を促した文化的背景も依然として不明である。本事業の目的は本図にみられる各人物や他の題材の図像を詳細に再検討した上で、それらが全体として意味するところを明らかにしつつ、作品の文化的背景を検証することである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課国際交流室アソシエイト ミウオシユ・ヴォズニ
【主な成果】 (1) 「群仙図屏風」との関連が予想される作品の調査 ・ボストン美術館にて蕭白筆「久米仙人図屏風」など、作品3点の調査を行った（6月1日） ・九州国立博物館にて蕭白筆「群童遊戯図屏風」など、作品6点の調査を行った（10月7日） ・三重県立美術館にて蕭白筆「林和靖図屏風」など、作品3点の調査を行った（11月22日） ・東京国立博物館にて蕭白筆「群仙図屏風」の調査を行った（29年2月10日） ・サンフランシスコ・アジア美術館にて「瑤池仙會圖」の調査を行った（29年3月24日） (2) 「群仙図屏風」に関する新見解 ・中国・日本の資料を手がかりに、本図に混入されている三星のイメージとその意味を再考した。 ・本図に林和靖のイメージが重ね合わされているとする説の裏付けとなる資料を見出し、そのイメージが本図の全体的構成とどのように関係しているかを検討した。 ・上記の「林和靖図屏風」には和合二仙をはじめ、夫婦和合を象徴する題材が複数描かれていることを明らかにした上で、「林和靖図屏風」と「群仙図屏風」との関係を検討した。 ・本図の虎を伴う仙人と龍に乗る仙人について異論があったが、画中のモチーフや先行作例との比較により、それぞれの像主を特定できた。 ・「群仙図屏風」の構成は八仙図に基づいているとする見解もあるが、むしろ瑤池仙會図をはじめ、八仙・三星・西王母をいずれも描く画題の方が蕭白にヒントを与えた可能性が高いと指摘し、作者の意図を検討した。			
【備考】 調査回数：5回 調査点数：14点 曾我蕭白に関する論文発表：『MUSEUM』第663号「曾我蕭白のふたつの寒山拾得図——主題およびその文化的背景の検討を中心に」8月15日発行			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	「群仙図屏風」における三星と林和靖のイメージとその意味を再考し、また虎を伴う仙人と龍に乗る仙人の像主を特定した上で、本図の全体的構成が瑤池仙會図などの画題に基づいている可能性を提示することにより、「群仙図屏風」の図像とその文化的背景の全容解明に一歩近づいたと考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 「群仙図屏風」の図像については検討の余地がまだ残されている。例えば本図における西王母と林和靖との関係が不明であり、また蕭白の強烈な色使いにも特別な意味があると思われるため、今後これらの点について考察を進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ p. 三条西公条をめぐる絵事―「詠歌之大概歌仙図」を中心に― (メトロポリタン東洋美術研究センター) ((4)-①-1))		
【事業概要】 三条西公条は、三条西家を継ぎ、父・実隆から和歌の奥義を継承した。本研究は、公条をめぐる絵画制作と文芸との関わりを調査するもので、とくに京都・陽明文庫所蔵の「詠歌之大概歌仙図」の制作背景にある公条と文化人との交流の様相を明らかにすることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員 小野真由美
【主な成果】 (1)「詠歌之大概歌仙図」(京都・陽明文庫所蔵)の調査を行い、付属品の添状2通と短冊1枚の内容を翻刻するとともに、絵画表現の特徴について同時代の諸作品との比較分析を行った。それによって、公条と大覚寺義俊、里村紹巴との交友、さらに紹巴と飛鳥井雅庸、柳宮連歌師の紹之との関連が明らかとなった。また歌仙絵の筆者に狩野秀頼周辺絵師を想定した。 (2)「二尊院縁起絵巻」(京都・二尊院所蔵)の調査を行い、その制作背景や絵画様式について検討した。「二尊院縁起絵巻」は、これまで全巻の画像がなかったが、本研究によって全巻の撮影が行われた。 (3)「紫式部石山詣図」(宮内庁書陵部所蔵)の画像を入手し、公条の賛の筆跡を「詠歌之大概歌仙図」と比較した。それによって、公条の幅広い絵画制作との関わりを考察した。 (4)「詠歌之大概歌仙図」の絵画表現と比較するため、「高雄観楓図」「厩図」(東京国立博物館所蔵)の調査を行った。それによって、「詠歌之大概歌仙図」の面貌表現が、「高雄観楓図」「厩図」と近似していることが明らかとなった。			
【備考】 メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成の1年計画の1年目 調査件数：4件 論文：1件			


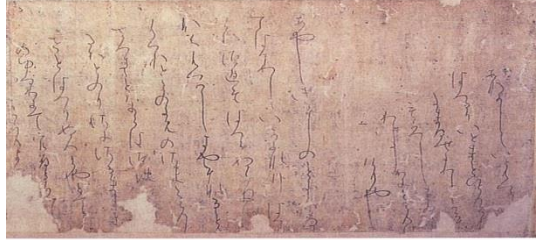
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成1年計画の最終年度である28年度は、「詠歌之大概歌仙図」を中心に、「二尊院縁起絵巻」「高雄観楓図」「厩図」の詳細な調査を通じて、中世後期の公家文化における三条西公条の活躍や、それを取り巻く人々との交友、そのなかで描かれた絵画作品について多角的に考察することができた。とくに添状などから実証的に文化交流の様相を明らかにすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。本研究は、中世後期・16世紀における公家文化、とくに歌学の中心にあった三条西公条と大覚寺門跡・義俊、そして近世初期におよぶ活躍を成した里村紹巴らとの交友を示す具体的作例として「詠歌之大概歌仙図」の意義を考察し、中世から近世初期の文学と美術の新たな視座を示すことができた。今後は歌仙絵の筆者として想定した狩野秀頼周辺の絵画制作について、さらに調査を進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 訓点資料としての典籍に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 漢文を訓読するために施された、「訓点」とよばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は典籍である。これらに付された訓点により、当時の日本人がどのように本文を訓読していたか、あるいは日本語の有り様が判明する。当館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く收藏することから、それらを中心とした調査研究を行うことにより、得ることの出来た成果を展示や講演、あるいは論文など、博物館における事業へと還元する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
【主な成果】 (1) 典籍の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、8月4日をはじめ、29年3月13日までに計8回の調査を実施し、とくに重要な部分に関してはあわせて写真撮影を行った。 (2) 調査作品は、重要文化財「白氏文集巻第三・巻第四」（館蔵品）、あるいは重要文化財「法華経巻第二 万里小路宣房筆」や重要文化財「和歌色葉集残巻」（以上、ともに寄託品）など、20件におよんだ。 (3) とくに、「法華経巻第二 万里小路宣房筆」については、これまで八巻本の法華経の一部と考えられていたが、巷間に散逸した断簡の情報を収集することで、十巻本として作成されたことを明らかにした。その報告を兼ね、平成知新館において「中世の古写経」と題した展示を行い、あわせて講演を実施したことで、成果を広く国民へと発信した。 (4) また、こうした研究の成果として、紙背文書を中心に、27年度より調査を進めていた国宝「稿本北山抄巻第十」は、解題を付した書籍を勉誠出版より刊行した。			
			
稿本北山抄巻第十		稿本北山抄巻第十紙背	
【備考】 ・調査回数 8回 ・調査件数 20件 ・撮影コマ数 約100カット ・成果の公開（展示） 1回（平成知新館、29年2月7日～3月12日） ・成果の公開（講演） 1回 羽田 聡「万里小路宣房の法華経」（土曜講座、29年3月11日） ・成果の公開（出版） 1件 『国宝 稿本北山抄巻第十』（勉誠出版、29年2月）			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	調査回数8回は、27年度の実績値と比較すれば、減少しているが、その対象は卷子や冊子など、いずれも時間を要するものであり、結果として昨年度と同様の件数を調査できた点に鑑み、所期の目標は達成していると判断した。また、調査結果の展示や講演への反映、書跡としての刊行という、ほかの博物館事業との連携を図ることが出来た点も勘案している。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	本事業は前中期計画より継続の事業であり、【備考】に示した実績値が27年度のと比して減少している項目もあるが、展示あるいは講演という成果の公開を新たに付加することが出来たため、今中期計画の所期の目標は達成していると判断した。27年度は「後進の育成」を課題としてあげていたが、この点について、当館では29年度より典籍のアソシエイトフェローを採用するため、期待できる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 出土・伝世古陶磁に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 日本国内で出土・伝世した陶磁器について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員 降矢 哲男
【主な成果】 (1) 調査 ・福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵品調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 ・近畿地方の江戸時代から続く旧家の所蔵品や金剛寺所蔵の陶磁器の調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。(詳細は処理番号 1411B5 および 1411B4 参照)。 ・15世紀から16世紀を中心とした日本海交易で用いられた陶磁器について、特に沖縄地域や北関東地域の当該時期の遺跡から出土した貿易陶磁器を中心に、調査や写真撮影等を行った。 ・個人コレクションの陶磁器の調査を行い、写真撮影等を行った。 (2) 成果内容 ・旧家の所蔵品や金剛寺所蔵の陶磁器などの調査を行い、所蔵品の全体的な様相を把握することにより、収集のあり方や陶磁器の流通のあり方についての知見を得ることができた。調査途中ではあるものの、金剛寺については、寺の歴史的な経緯と陶磁器の流通状況とが、年代的に一致するような様相もみえてきている。 そして、個人コレクションの調査により、一部寄贈予定を含む、30点ほどの作品の寄託を受ける予定であり、館蔵品で網羅されていない時期や産地の作品の展示が可能となり、平常展の内容をより充実したものとするができる。 また、研究内容の状況を論文等にまとめることにより、日々の研究成果を一般に公表した。			
【備考】 (1) 調査回数 15回 ・主な研究発表 ① 「戦国茶道文化と三好氏」大東市立生涯学習センターアクロス 8月21日 ・主な論文執筆 ① 「禅院に伝わった唐物の名品『目の眼』」476号 5月1日 ② 「京焼の色絵はどのように生まれたか」『なごみ』438号 6月1日ほか1件			
			
愛宕坂茶道美術館の調査風景			

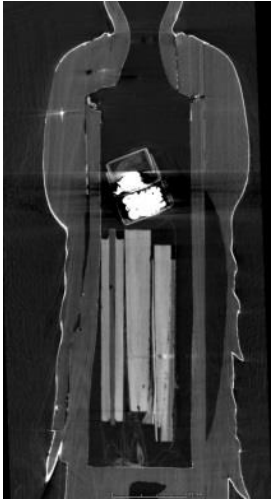
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	基礎データを蓄積していくことが本プロジェクトの根本である。28年度は複数の事例の調査を行うことができた。こうした基礎データの蓄積を継続的に行えたことは大きな成果である。ただ、27年度と比べると、成果公表を行う機会が少なく、29年度は28年度までのデータの蓄積を活かした成果発表をより積極的に行っていきたい。また、調査の過程で展示を拡充できるだけの寄託品を受け入れられることとなったことは、大きな成果といえる。このことにより、大規模な展覧会や講演会などの博物館事業の内容を充実させていくことに繋がるのが期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	今中期計画の初年度として、着実に調査を進め、多くの基礎データの蓄積を行い、研究発表や展示を通じて、研究成果を着実に還元してきている。また、基礎データの収集を通じて、館蔵品や寄託品を充実させることもできた。 29年度以降も、基礎データの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを照らし合わせながら研究を行い、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ CTスキャナ等科学機器を用いた文化財の調査研究 ((4)-①-1)		
【事業概要】 X線CTスキャナ等の分析装置を活用し、文化財の調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室アソシエイトフェロー 池田素子
【主な成果】			
<p>(1) 特別展「一禅心をかたち」(4月12日—5月22日)において、26年度に行った建長寺・建仁寺の2点の「蘭溪道隆坐像」のX線CT調査の成果が公開され、建仁寺像に納入された頭部を3Dプリンタで造形し複顔をするなど展示にも活かすことができた。</p> <p>(2) 特集陳列「丹後の仏教美術」(7月26日—9月11日)にあわせて、縁城寺蔵・大日如来坐像、同・賓頭盧尊者坐像、金剛心院蔵・地藏菩薩立像の3点についてX線CT調査を行った。大日如来坐像では木組みや内割り等に見られる特徴的な構造、賓頭盧尊者坐像では玉眼の挿入方法、地藏菩薩立像では像内納入品の詳細な形状、構造等が判明した。調査の成果は、図録に報告し、展示室内でも各像とともに写真パネルで紹介した。</p> <p>(3) 大津歴史博物館からの依頼で、新知恩院蔵・木造釈迦涅槃像のX線CT調査を行った。 体長13cmの本像は、胸の部分に水晶が埋め込まれている。調査の結果、水晶は、上下以外は本体と密着しておらず、胸部との間に空間があることが判明した。調査の成果は、大津歴史博物館の企画展「新知恩院と乗念寺」(10月15日—11月27日)の会場で、本像とともに写真パネルで紹介され、図録でも報告された。</p>			
			
地藏菩薩立像(金剛心院)の X線CT断面像			
【備考】			
調査点数：X線CT16点、X線透過撮影7点、蛍光X線分析27点 成果の公表：「禅：心をかたち」展覧会図録 pp.319-322／「丹後の仏教美術」特集陳列図録 pp.4,5,12／大津市歴史博物館「大津の浄土宗寺院 新知恩院と乗念寺」展示解説図録(新知恩院) pp.16,17			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	28年度は、所蔵品や寄託品の研究の一環として、X線CTスキャナ等の分析装置を導入する機会が増えた。また、文化財保存修理所に受け入れられている修理寄託品について実施することが多かった。多角的な考察が必要となる実資料の研究や、所有者・修理者・文化庁との連携・協議で実現した修理前調査であったため、年度内には成果発表に至っていないが、X線CTスキャナ等の分析装置の活用によって、学術的な研究が一層充実し、安全な修理にも貢献することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画における、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究が順調に行われた。自館の特集陳列にあわせた借用文化財の調査とその報告のほか、他館からの依頼に応えた調査によって他館の企画展にも協力することができた。展示室で掲示されたCT像の写真パネルのように、外観ではわからない内部構造の視覚化が、展示資料の理解につながるという手応えを得た。28年度の主な成果報告は、X線CTスキャナによる調査によるものであったが、29年度以降は顕微鏡や蛍光X線分析装置などその他の装置による成果も公表していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究 河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）		
【事業概要】 京都国立博物館では長年にわたり、京都を中心とした近畿地区の社寺に伝存する文化財の悉皆調査行ってきた。28年度からは、4年にわたって科学研究費補助金による助成を受け「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」というテーマのもと、大阪・河内地域に存在する社寺の文化財を中心に調査を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 浅湫 毅
【主な成果】			
(1) 河内地域の社寺調査			
<ul style="list-style-type: none"> ・28年度から4年にわたって助成を受ける科学研究費補助金による調査である。 ・28年度は、河内長野市の所在の天野山金剛寺において悉皆調査を行った。 予備調査 9月14日 本調査 10月17日～10月28日 補足調査 平成29年2月27日～3月2日 ・本調査の成果は、科研の最終年度である平成31年度末に発行予定の報告書で公表する予定である 			
			
金剛寺での調査風景			
(2) 京都市内における社寺調査			
<ul style="list-style-type: none"> ・過去に行った京都市内の社寺調査のうち、建仁寺塔頭及び永観堂禅林寺に関して、将来の報告書刊行に向け、これまでに作成した調書の分類・整理を継続して行った。また、29年度以降に新規で調査を行う龍光院（大徳寺塔頭）に関して、下見及び住職との打ち合わせを行った。 			
(3) その他の地域の調査			
<ul style="list-style-type: none"> ・過去に行った丹後地域における社寺調査の成果及び新規調査の成果に基づき、特集陳列『丹後の仏教美術』を開催し（7月26日～9月11日）、これまで京都国立博物館が行ってきた、近畿地区における社寺調査の成果の一部を、展示及び図録の形で広く公開した。 			
【備考】			
科学研究費助成事業4年計画の初年度			
<ul style="list-style-type: none"> ・本調査に関しては最終年度に調査報告書を刊行する予定である。 ・丹後地域における過去の調査成果を反映した図録『丹後の仏教美術』を、特集陳列にあわせて刊行した。 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<p>河内地域の調査に関しては、科学研究費助成事業4年計画の初年度である28年度は、河内長野市の金剛寺において悉皆調査を行った。2週間にわたる調査で、本坊及び宝物館に安置される文化財に関しては、ほとんどの作品について調査を行うことができ、報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影を終えることができた。</p> <p>また、これまで京都国立博物館が行ってきた社寺調査の成果を十分に反映した特集陳列『丹後の仏教文化』を開催し、図録を刊行することができた。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<p>中期計画に沿った近畿地区の社寺調査の一環として、河内地域の仏教文化と歴史に関して科学研究費助成事業に申請し、それに基づく調査研究を実施した。本事業は4年計画であり、初年度から3年度にかけては各年度1ヶ寺を当該地域から選択し（28年度は金剛寺、29年度は観心寺を予定、30年度は協議中）、全研究員参加による悉皆調査を行う予定である。28年度に関しては当初の予定どおり、金剛寺の文化財について調査を行い、十分な成果を上げることができた。</p> <p>過去に行った調査寺院の補足調査に関しては、河内地域の調査に重点を置いていたため十分には行うことができなかったものの、調書の整理等に関しては継続して行った。29年度以降は河内の調査とあわせて補足調査を行い、早期の報告書刊行を目指したい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 幕末近代の商家が伝えた文化財の総合調査(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>大型の寄贈案件を効率よく処理するために、科学研究費補助金(基盤研究(B))「幕末近代の商家が伝えた文化財の総合調査:貝塚廣海惣太郎家コレクション」を活用して、大阪府貝塚市の旧家の五つの土蔵が伝えた大量の文化財を調査する。所蔵者の意志のもと寄贈先を検討し、当館への寄贈分は、搬入後に燻蒸した上で本格清掃を施し、受贈手続きを経て収蔵品として整備する。29年度中に寄贈顕彰の展覧会を開催することを目標とする。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 永島 明子
【主な成果】	<p>当家は江戸時代後期に米穀や肥料の間屋として身を起し、幕末には廻船問屋として活躍した後、仲買、株式投資、銀行経営などに転じてその資本により近代産業の発展に寄与した商家である。当館は24年度に調査を開始し、作業効率の向上をめざして27年度より採択となった科学研究補助金を投入し、27年度までに書画・工芸・考古・歴史資料の収蔵品708件と教育事業や茶会等のイベントで用いる備品271件を受贈してきた。これまでの調査から、歴代当主が同時代の画家や工芸家のパトロンとなり、また、表千家を支える地方数寄者のひとりとして大量の茶道具を蓄積し、姻戚関係にある大商人や華族と贈答や形見分けを通じて品物を交換していたことがわかっている。</p> <p>28年度は延べ114日間、学生アルバイトや美術輸送会社の作業員を含めた述べ245人を動員し、絵画2件、書跡1件、彫刻1件、陶磁142件、漆工・木竹工7件、染織3件、歴史4件の計160件の収蔵品と、7件の備品の受贈を実現した。またこれまでに受贈した作品の図録用撮影を開始し、58件193カットを整備した。土蔵の環境調査も継続した。</p> <p>本プロジェクトは、科学研究費補助金の継続が予定されている29年度までに調査や寄贈手続きを終え、寄贈顕彰を兼ねた展覧会の開催を目標とする。その予告と調査の中間報告として、一般観覧者向けの土曜講座「廻船問屋の土蔵が伝える木・竹・漆の文化財」(7月23日)を開き好評を得た。地方新聞事業部からも展覧会への問い合わせがあった。</p>		
			
土蔵内での作品探索	土蔵より搬出	現地での簡易清掃	書跡調査風景
			
寄贈予定品の搬出	京都国立博物館旧管理棟での燻蒸作業		
			
本格清掃後、鑑査会用に陳列	撮影のための開梱	姿見(鏡)の撮影作業	
【備考】	<p>科学研究費助成事業の3年計画の2年目</p> <p>28年度は、絵画23件の調査と69カットのメモ撮影、書跡30点の調査と60カットのメモ撮影、彫刻3件の調査と39カットのメモ撮影、金工25件の調査と25カットのメモ撮影、陶磁182件の調査と910カットのメモ撮影、漆工・木竹工143件と1110カットのメモ撮影、染織15件の調査と417カットのメモ撮影が実施され、土蔵の環境調査も継続された。28年度の特集陳列「生誕300年 伊藤若冲」や平常展「香りの調度」において、27年度の寄贈品が展示された。</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である本年度は、最終目標の展覧会を念頭に各分野で粛々と調査を進め、寄贈数を増やし、図録用の撮影を行い、中間報告として一般聴衆を対象とした講座を開くことができた。また学生たちに作品の取り扱いや調査の方法を伝授する結果ともなっている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 最終年度の展覧会にむけた調査や寄贈が、概ね順調に推移している。 引き続き調査と寄贈を進め、800点を超える寄贈品から出陳作品を選定し、展覧会の構成を考え、図録用の撮影を行い、広く一般市民に幕末明治期の商家の暮らしを紹介できるよう努める予定である。 27、28年度とも調査主体たる研究員の人事異動があり、一貫した視点を引き継ぐことの困難から、非効率かつ研究員に負担を強いる状況があり、所蔵者からも大きな不評を買っているのが課題である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 日本の宮廷装束・調度に関する基礎的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 一般には目に触れる機会がほとんどない日本の伝統的な宮廷装束及び調度について所蔵調査を行い、基礎的な情報を記載した調書を作成する作業により、宮廷の物質文化の実像に可能な限り迫る。その成果を報告書や展示として紹介し、日本民族が培った美意識を広く伝える。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【主な成果】 学術研究助成基金助成金事業の3年計画の2年目である28年度は、27年度に引き続き、京都国立博物館が所蔵する歴史分類作品群のうち、宮廷装束及び調度の悉皆調査を継続して行った。 また、現存する宮廷関係作品のデジタル・データベースの作成に向け、他機関所属宮廷関係作品の文字情報及び画像情報のデジタル化を行った。その結果、多くは近代の作品であり、近世に遡る作品が少ないことが改めて浮き彫りとなった。 研究途上ではあるが、研究成果を盛り込み、ICOM ミラノ大会服飾国際委員会において研究発表を行った。			
			
ICOM ミラノ発表風景		作品調査風景	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 ・京都国立博物館が所蔵する歴史分野作品の調査(調書作成・簡易デジタル画像の撮影) 調書 32件 画像 370枚 ・京都国立博物館所蔵作品の保存公開用画像 5件 ・他機関所蔵作品のリスト:6機関 349件 ・他機関所蔵作品紙媒体画像のデジタル化:6機関 220件 ・ICOM(国際博物館会議)ミラノ大会服飾国際委員会において、研究成果に基づき日本の宮廷装束について発表 7月4日 Kyoto -a Treasure House of Traditional Japanese Costumes- (イタリア・ミラノ国際会議場) ・ICOM服飾国際会議のウェブサイト上に発表内容をまとめた論文を発表 http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/costume/pdf/Milan_2016_Proceedings_-_Yamakawa.pdf (29年1月10日より公開)			


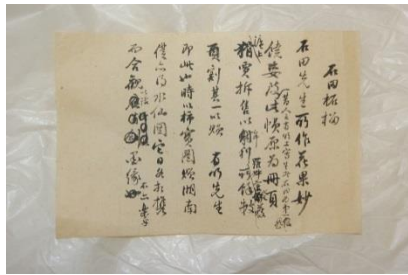
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、上半期に作品調査を予定通りに進めることができず、下半期に集中して行うこととなった。しかしながら、他機関資料のデジタルデータ化は予定通りに進み、最終年度に簡易データベースを作成する準備を進めることができた。ICOMミラノ大会の服飾国際会議における発表と、ウェブサイト上で公開された論文をを通して、宮廷装束をとおして日本民族が培った美意識を伝えることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	京都文化の根幹を成す宮廷に関わる研究であり、中期計画における趣旨に即した調査研究を実施することができた。最終年度に向けて、作品調査を継続して実施するとともに、現在把握できた作品の簡易データベースを作成する。あわせて研究成果公開として、29年度後半に京都国立博物館において特集陳列「御所文化を受け継ぐ—近世・近代の有職研究—」を開催し、京都で培われてきた宮廷文化を広く紹介する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 科学研究費補助金の若手研究(B)による事業。大正から昭和にかけて数多く中国書画が日本に将来された背景を、「京都学派」の漢学者にして書画鑑定に秀でた長尾雨山(1864~1942)の業績を再検証することにより明らかにする。膨大な書簡や詩文稿、書画作品など雨山に関する一次資料の整理と調査を核とし、断片的な紹介にとどまっていた雨山の業績と思想を総合的に理解するための基礎的研究とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 呉 孟晋
【主な成果】 28年度は3ヵ年計画のうちの中間年にあたる。京都近郊在住の長尾雨山の遺族が所蔵する文献資料や書画作品について、27年度である程度その全容を把握することができたが、28年度ではその成果をもとに個別の資料・作品について調査を行った。最終的にこれらの資料・作品を目録として公開するために、名称や内容についての誤りを正し、精度を高めることに注力した。主には以下の3項目を実施した。 (1) 目録の精査: 27年度に作成した目録の内容を校正した。たとえば、27年度は全体の点数を把握するための作業であったため、草稿については冒頭数字のみを拾っていたが、資料群のなかでも中国書画にかかわる重要な資料約700点について、重点的に見直しを行い、名称などを改めた。この作業には、西上実・京都国立博物館名誉館員の協力を得た。 (2) 作品調査: 京都国立博物館が所蔵及び寄託を受ける中国書画について、随時、長尾雨山の箱書きのある作品を調査した。大和文華館や澄懷堂美術館など国内の美術館や、海外では台北故宫博物院で関連する中国絵画を調査した。その結果、京博上野コレクションにある伝沈周筆柘榴図の箱書きの草稿が含まれていることがわかるなど(図1・図2)、調査対象の資料的価値を確定するに至った。 (3) 研究発表: 上記の成果の一部を6月に京都で開催されたAAS(アジア研究協会(米国))学会の分科会において、「The Modernity of Nagao Uzan's Connoisseurship」と題する口頭発表を行った。また、その一部は文化センターの教養講座でも触れており、一般向けに長尾雨山の活動を紹介する機会を得た。			
			
(参考) 伝沈周筆柘榴図		図2 伝沈周筆柘榴図の軸箱蓋裏にある長尾雨山の識語	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、初年度の成果を踏まえて、目録の精査、作品調査、研究発表を行うことができた。中間年度として、館蔵品を含めた作品調査、特に、長尾雨山の中国絵画理解の様相についての調査結果により、京博上野コレクションにある伝沈周筆柘榴図の箱書きの草稿が含まれていることがわかるなど調査対象の資料的価値を確定するに至り研究を深化させることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。最終年度である29年度までに資料・作品目録を公開するための作業を進めることができた。ただし、資料総数が膨大であるため、目録に収録する項目などどのような形で公開するべきか、検討を要する課題も見えてきている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク a. 特集陳列「丹後の仏教美術」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 特集陳列「丹後の仏教美術」(7月26日～9月11日)に関わる調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 浅湫 毅
【主な成果】 <p>(1) 特集陳列には、新規調査に基づく作品を含め、絵画・書跡・彫刻・工芸作品36件を陳列した。このうち大半の作品は27年度までに調査自体は終了していたが、28年度は図録用の新規写真撮影を行った。その結果、丹後の仏教美術作品に関して、新たに写真資料を得ることができた。</p> <p>(2) 図録用の写真撮影と並行して、科学機器(C Tスキャナー・赤外線カメラ)を用いた調査・撮影を行った。C Tスキャンの結果、金剛心院・地藏菩薩立像は像内納入品の詳細な内容について判明し、また、仏性寺・阿弥陀如来立像は唇に水晶を嵌めるといった特異な作例だが、その後ろに金属製の歯が納められていることがわかった。これらの成果は図録及び展覧会会場において、広く一般に公表した。</p> <p>(3) 会期中にあらためて出品作品の調査研究を行った結果、縁城寺の大日如来坐像・阿弥陀如来立像が、いずれも鎌倉時代の南都系仏師の作例として重要であることが判明した。両作品に関しては、継続した研究が必要という観点から所蔵者の理解を得、展覧会終了後も当館に寄託していただくこととなった。</p>			
【備考】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 出品作品 36件 ・ C Tスキャン撮影 4回 ・ 赤外線撮影 1回 ・ 図録の発行 1冊(特集陳列図録『丹後の仏教美術』) ・ 講演会 3回(「丹後の寺社縁起」『京都国立博物館土曜講座』京丹後市・小山元孝氏ほか) ・ 作品の新規寄託 2件(「大日如来坐像」京丹後市・縁城寺蔵ほか) 			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	丹後地域の仏教文化に関する、当館のこれまでの研究成果をいかに発揮し、充実した内容の展覧会となった。また、近年導入したC Tスキャナーなどの科学機器を活用し、像内納入品の詳細な内容や、表面からの目視では確認できない、仏像の特異な構造に関して調査するとともに、その成果を展覧会図録及び展示会場内の解説パネル等で、広く一般に公開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画における、有形文化財の展覧事業・教育普及活動に関連する調査研究として、順調に行われた。当館は、継続して京都を中心とする近畿地方の社寺調査を行い、その成果を展覧会に反映しているが、本特集陳列も、長年継続して行ってきた社寺調査の成果を基礎に、新た調査を行って実現したものである。展覧会としては、上記の成果を反映して充実した内容となったが、展覧会に際して行った調査・撮影で、近畿の社寺が所蔵する文化財に関する、新たな知見及び写真資料を得ることができ、さらなる展覧会の企画にあたって、貴重な資料を得ることとなった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク b. 特集陳列「徳川将軍家と京都の寺社」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 京都・知恩院所蔵徳川家関連資料の調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊
【主な成果】 特集陳列「徳川将軍家と京都の寺社—知恩院を中心に—」(6月14日～7月18日)に向けて、京都・知恩院所蔵徳川家関連資料の調査及び撮影を行った。 (1)29年3月4日に知恩院所蔵徳川家関連資料17点の写真撮影を行い、併せて保存修理指導室主任研究員羽田聡及び企画室研究員井並林太郎によって調査研究を行った。 (2)29年3月7日に知恩院所蔵重要文化財・徳川秀忠坐像の写真撮影を行い、併せて東京国立博物館学芸企画部企画課長浅見龍介によって同像及び重要文化財・徳川家康坐像、於大の方坐像の調査を行った。及び、あわせて、知恩院所蔵徳川家関連資料について、知恩院総務部と情報交換を行った。 (3)上記の調査の成果について、『徳川将軍家と京都の寺社—知恩院を中心に—』として図録を作成し、一般にも公表を行った。 (4)上記の展覧会成果を受けて、重要文化財 徳川家康・秀忠両坐像の修理について知恩院と調整し、朝日新聞文化財団助成申請を行い、来年度から2ヵ年の計画で修理が行われることが決定した。			
【備考】 ・調査作品数及び撮影作品数 21点 ・成果の公表：特集陳列図録『徳川将軍家と京都の寺社—知恩院を中心に—』(6月14日)刊行			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	知恩院所蔵徳川家関連資料は従来ほとんど公開されることがなく、本格的な調査は初めてであった点、かつ、その調査機会の貴重性に鑑み、当初計画にはなかった図録を刊行し、一般にもその成果を還元しようとした点については一定の評価がなされてしかるべきであると考えている。また、この展覧会を受けて、重要文化財 徳川家康・秀忠両坐像の修理について知恩院及び文化庁・京都府と調整し、朝日新聞文化財団助成申請を行い、その決定を見た点でも意義が高かったと考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を遅滞なく果たしている。また、一般公開の機会のほとんどないものを寺院の特別協力を得て、公開を可能とした。知恩院所蔵近世文化財について、文書を除く有形文化財の調査は従来あまり行われていなかっただけに、意義あるものとする。知恩院については本年度で計画は完了し、所期の目的は達成している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク c. 特集陳列「与謝蕪村」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 特集陳列「生誕300年 与謝蕪村」(8月23日～10月2日)に関わる調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 福士雄也
【主な成果】			
<p>(1) 当館所蔵品・寄託品に個人所蔵の作品を加え、約40件の作品調査と写真撮影を行った。調査の過程で、昭和3年(1928)にモノクロ写真が書籍掲載されて以来所在不明だった「東坡宝山昼眠図」(個人蔵)が再発見された。この作品以外に使用例の確認されていない朱文方印「灑南之人」は、蕪村の出生地が摂津国であることを裏付ける研究上の新資料としても注目される。</p> <p>(2) 作品調査を経て、上記再発見作品を含む6件の作品を新たに寄託品に加えることができた。その結果、館蔵品・寄託品のみ構成による15件の小規模展示ながら、蕪村の初期から晩年にいたる各時期の優品を揃えることができ、画風の変遷およびその中での各作品の位置付け等、蕪村研究の基礎となる情報を蓄積することができた。特に、雨森章迪の賛を有する「漁夫図」(個人蔵、未出陳)は、蕪村の交友関係を知る好個の資料である。</p> <p>(3) 展示に合わせ刊行した図録では、全出品作品をカラー図版で掲載し、個別解説を加えた。重文「新宅画賛」(個人蔵)、「山荘会友図襖」(個人蔵)などは、カラーでの図版掲載は初めてのことと思われ、これは蕪村研究という点においても意義のあることといえる。</p> <p>(4) 上記調査研究の成果を観覧者へと還元し、その理解に資するため、作品解説の前にリード文を置くことを試みとして行い、アンケート等を参照する限りおおむね好評を得た。</p>			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査件数 約40件 ・撮影コマ数 約100カット ・講演等 芳賀徹「描かれた『奥の細道』—蕪村から小野竹喬まで」(9月10日) ・図録「特集陳列 生誕300年 与謝蕪村」刊行(8月23日) 			



与謝蕪村筆「東坡宝山昼眠図」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	生誕300年という節目の年に、京都に縁深い与謝蕪村の作品を特集展示し、図録等を通してその魅力をわかりやすく紹介した。その準備段階における調査研究で蕪村の伝記に関わる作品を見出し、摂津国出生説を補強する資料を提示できたことは、所期の想定を超える成果と言える。展示・図録には、こうした調査研究の成果が反映されている。また、作品調査は新規寄託品の受け入れにも結び付いており、年度計画に叶う成果が得られている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
A	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施することが中期計画目標として定められている。そのなかで近世絵画分野においては、京都ゆかりの諸画家に関する資料・作品の調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、画家の伝記や画風変遷についての研究を進めることができたことは、新規寄託品の受け入れ件数を含め、当初の想定を超える成果であったと言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク d. 特集陳列「皇室の御寺 泉涌寺」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 特集陳列「皇室の御寺 泉涌寺」(12月13日～29年2月5日)に関わる調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室主任研究員 羽田 聡
【主な成果】 (1) 泉涌寺に伝来した美術作品を語るうえで、欠かすことのできない「日中の交流」「皇室とのつながり」というテーマに基づき、書跡・絵画・彫刻・金工各分野の数ある所蔵品から、調査を実施のうえ、これを体現するに相応しい全40件を選び、展示を行った。 (2) 全40件のうち寄託品は9件であり、ほかはすべて泉涌寺、および塔頭寺院から借用した。これらは普段、寺外で公開されることがほとんどなく、とりわけ「三宝大荒神坐像 快慶作」(重要文化財、来迎院蔵)は秘仏として非公開であるため、貴重な機会を多くの来館者に提供することができた。 (3) 会期中は講演の開催、並びに刊行物の発行により、10年以上にわたり中国へと留学し、泉涌寺開山となった俊苧(1166～1227)が日本の仏教さらには文化に果たした役割を、展示作品を交えながらわかりやすく解説し、展覧会をより理解するための一助とした。 (4) 上記(2)は近隣社寺との連携という観点に立脚するなら、今後の関係構築においても、展覧会の実現は大きな原動力となることが期待できる。これを間接的に裏付けるように、「観音菩薩坐像(楊貴妃観音像)」(重要文化財、泉涌寺蔵)をはじめ、3件の彫刻作品について、X線CT撮影による調査を行う許可を所蔵者から得たうえ、会期終了後の29年2月9日および10日の両日にこれを実施した。 (5) 上記(4)に記したX線CT撮影による調査の結果、「観音菩薩坐像(楊貴妃観音像)」(重要文化財、泉涌寺蔵)については、像内納入品が存在することは知られていたが、従来、言われていたような金属製ではなく、木製であることが新たに判明した。			
【備考】 ・調査実施 3回 ・出品作品 40件(うち国宝1件、重要文化財10件) ・講演等 2回 浅湫 毅「泉涌寺ゆかりの仏像」(29年1月21日) 西谷 功「俊苧律師と泉涌寺」(29年1月28日) ・刊行物 1点 羽田 聡「博物館ディクショナリー 泉涌寺と俊苧」(29年1月17日) ・X線CT撮影 3件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	27年度に実施した特集陳列に比して、【備考】欄に記した実績値はほぼ同数であることから、所期の目標は達成していると判断した。また、通常の特集陳列であれば、収蔵品を用いて行うことが常であったが、博物館外からも多くを借用するという新たな方法を試み、近隣社寺との連携を深めた点、展覧会終了後に実施したX線CT撮影による調査により新たな知見を得ることができた点も判断の材料として加味した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画として立項されている「有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究」に照らし、滞ることなく順調に実施でき、かつX線CT撮影による調査で新たな知見を得たため、所期の目標を達成していると判断した。規模の比較的小さな特集陳列において、記者発表などにより広報活動を行ってはいるが、おもに金銭的な事情から継続的な展開は困難を伴う。こうした点は集客とも結びつくため、情報をどのように発信し続けるかを検討することは今後の課題としてあげられる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク e. 特集陳列「伊藤若冲」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	特集陳列「生誕300年 伊藤若冲」(12月13日～29年1月15日)に関わる調査研究		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 福士雄也
【主な成果】	<p>(1) 当館所蔵品・寄託品に個人所蔵の作品を加え、約50件の作品調査と写真撮影を行った。調査の過程で、従来存在が知られていなかった作品を約10件見出すことができた。</p> <p>(2) 相対的に作例の少ない山水図を2点見出すことができたことは、この領域における研究の深化に繋がる成果と言える。うち1点は「千画絶筆」印を有することにより50歳代と考えられる大作である点貴重であり、またもう1点は傘寿の祝いとして配るために制作されたことを示唆する款記を備える点、その人物像に迫る資料的価値を有する。</p> <p>(3) 初公開となった「六歌仙図押絵貼屏風」(個人蔵)については、最晩年の作例が複数知られる類作との表現上の相違点を指摘し、それらに先行する初発的性格を明らかにした。近年注目が集まる若冲の歌仙絵研究においても意義ある成果と言える。</p> <p>(4) 昭和2年(1927)に当館(恩賜京都博物館)で展示されて以来所在が不明となり、近年再発見された「垣豆群蟲図」(個人蔵)を89年振りにふたたび当館で展示した。同時期の類作である「鶏頭螭螂図」(個人蔵)との比較展示により、晩年期における着色草虫画の特質について知見を深めることができた。</p> <p>(5) 展示は所蔵品・寄託品から選定することとしたが、作品調査を経て上記新発見作品を含む8件の作品を新たに寄託品に加えることができた。その結果、水墨画を中心とした28件の展示ながら、若冲の初期から晩年にいたる各時期の優品を揃えることができ、画風の変遷およびその中での各作品の位置付け等、若冲研究の基礎となる情報を蓄積することができた。</p> <p>(6) 展示に合わせ刊行した図録では、全出品作品をカラー図版で掲載し、個別解説を加えた。新発見作品の図版掲載は、若冲研究における資料の蓄積・共有化という点においても意義のあることといえる。</p> <p>(7) 上記調査研究の成果を観覧者へと還元し、その理解に資するため、特集陳列「与謝蕪村」に引き続き、作品解説の前にリード文を置くことを行った。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査件数 約50件 ・撮影コマ数 約150カット ・講演等 坂本英房「若冲の屏風に登場する動物たち」(1月7日) 福士雄也「若冲のユーモア」(12月17日) ・図録「特集陳列 生誕300年 伊藤若冲」刊行(12月13日) 		



伊藤若冲筆「垣豆群蟲図」


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	生誕300年という節目の年に、京都を代表する画家である伊藤若冲の作品を特集展示し、図録等を通してその魅力をわかりやすく紹介した。その準備段階における調査研究で、山水図および歌仙絵という若冲研究上注目される領域において新知見を得たことは、所期の想定を超える成果と言える。展示・図録にはこうした調査研究の成果が反映されている。また、作品調査は新規寄託品の受け入れにも結び付いており、年度計画に叶う成果が得られている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
A	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施することが中期計画目標として定められている。そのなかで近世絵画分野においては、京都ゆかりの諸画家に関する資料・作品の調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、画家の人物像や希少主題についての研究を進めることができたことは、新規寄託品の受け入れ件数を含め、当初の想定を超える成果であったと言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	a. 近世期に作成された、書画の「極書」に関する基礎的研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1))		
【事業概要】 科学研究費補助金の若手研究（B）による事業。書画に付属する極書のうち、近世期に作成されたものを対象として主に書誌学的観点から形式等の諸データについて分類・整理を行うことで、極書を史料として扱うための基礎的研究とする。作品の伝来・伝承等に関する情報抽出にとどまっていた極書そのものを研究対象とし、将来的には鑑定行為全般の文化史的意義の研究へと発展させることを目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 福士雄也
【主な成果】 28年度は4か年計画のうちの初年度にあたるため、京都国立博物館に収蔵される作品及び京都近郊に所在する作品を中心に極書の調査を行い、基礎データの収集を開始した。 (1) 作品及び極書双方の作者・内容について基本的な情報を整理し、目録化した。30件弱の作品を目録化することができた。 (2) 数値データや文字情報のみならず、極書の詳細な写真撮影を進め、相互の比較考察を可能とする画像データの蓄積を行った。 (3) まだ資料サンプル数は少ないが、同一人物による同一フォーマットの極書であっても、記された文言等に若干の相違のある例が見受けられた。こうした差異は何に由来するのか、捏造の可能性はないのか、今後研究を進めるうえで検討すべき材料を得ることができた。 (4) 捏造とは断定できないものの、少なくともオリジナルではない可能性のある極書も見出された。今後研究を進める中で、こうした史料の位置付けも可能となることが期待される。			
 <p>狩野養信による添状 (一山一寧賛「牛図」の付属資料)</p>			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の1年目 ・目録化した作品：26件 ・撮影カット数：924カット			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の初年度である28年度は、調査した作品・極書の諸データについて目録化を進め、その過程で分類・整理に必要な項目についても随時更新を行った。蓄積されたデータこそまだ多くはないが、史料相互の差異を比較することで分類・整理をよりきめ細やかなものとする見通しが立った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 ・研究は下記のスケジュールで進める計画である。 29年度：京都近郊だけでなく関東方面も含む地域での調査とデータの日録化を進める。 30年度：東海・九州地方でも集中的に調査とデータの日録化を進める。調査データの偏向を確認し、必要なデータの収集に努める。 31年度：引き続き必要なデータの収集に努めるとともに、蓄積されたデータの整理と形式の統一、画像の調整等を行う。展示・報告書等を通じて研究成果を公表する。 28年度の調査作品数は目標の50件を下回り、若干の遅れがある。29年度はさらに多くの作品について日録化を進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b. 東アジアにおける繡仏の基礎的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査に基づいて図像・技法・様式を分析することで、仏教絵画史及び染織史の観点から同時代繡仏を総合的・体系的にとらえることを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 伊藤信二
【主な成果】 (1)27 年度に続き、国内に所在する中世～近世期の作品について実見調査を実施した。主な作品は以下の通りである。 <ul style="list-style-type: none"> ・重要文化財 刺繍阿弥陀三尊来迎図 1 幅 (滋賀・宝厳寺所蔵) ・重要文化財 刺繍普賢十羅刹女図 1 幅 (滋賀・宝厳寺所蔵) ・刺繍阿弥陀三尊来迎図 1 幅 (東京国立博物館所蔵) ・刺繍種子三昧耶幡 2 流 (東京国立博物館所蔵) ・刺繍阿弥陀来迎図 1 幅 (神奈川・清浄光寺所蔵) ・刺繍釈迦涅槃図 1 幅 (岐阜・恵那寺所蔵) (2)チベットのラサ地区を中心に、密教寺院や博物館を訪れ、実見調査を行った。調査寺院や施設は以下の通りである。 <ul style="list-style-type: none"> ・デブン寺・ガンデン寺・セラ寺・葯王山・ポタラ宮・西藏博物館・大昭寺 (ラサ地区) ・タシルンポ寺・シャル寺 (シガツェ地区) ・ミンドウリン寺・サムイェー寺 (ツェタン地区) 			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の4年目			



刺繍涅槃図 恵那寺 刺繍法王像タンカ 西藏博物館

年度計画に対する総合的評価

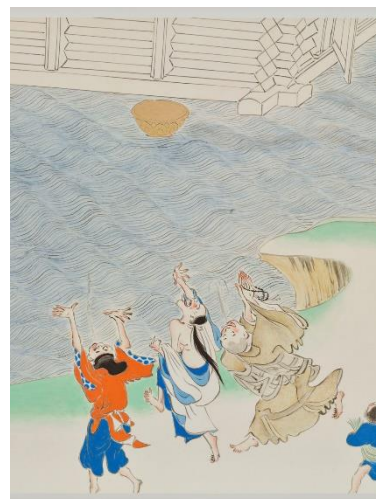
評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の4年目である28年度は、27年度に引き続き日本国内所在の繡仏作品の実見調査を実施するとともに、これまで調査した作品データの整理を実施した。日本中世～近世期の繡仏を中心に、同時期の中国など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の所在を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったこともあり、本研究の意義と成果は大きい。 また本研究の計画の1つであるチベットでの現地調査を実施できたことも大きな成果であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 本研究は刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表現した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国や朝鮮半島など、東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査に基づいて図像・技法・様式を分析し、繡仏を総合的・体系的に捉えることを目的とするものであり、28年度も27年度に引き続いての実見調査と、最終年度であることを踏まえた整理を実施することができた。 繡仏については、研究代表者が平成17年(2005)刊行した書籍『繡仏』以降も未発掘作品が多く発見されている繡仏研究に寄与するものと考えられる。また昭和39年(1964)奈良国立博物館において実施された特別展「繡仏」以降、作品がまとまった形で公開されたことはない。本研究は、今後繡仏作品の大規模展覧会が開催される上で最新の所在情報や成果を提供することに大きく資すると思われる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光X線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する。			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 当館と東京文化財研究所との共同研究による光学的調査の成果データに基づいて実施された国宝信貴山縁起絵巻の復元模写制作の成果について検討を加え、広く公表した。 ・特別展「国宝 信貴山縁起絵巻一朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝」に信貴山縁起絵巻復元模写（文化庁蔵）を出陳し、図録に同模写の高精細デジタル画像を掲載するとともに、模写制作過程で得られた最新の知見を各論として公表した。 (2) 愛知県立芸術大学が進める復元模写制作の基礎資料を提供するために顔料調査を実施した。 ・当館調査室において高精細デジタルカメラ等の光学機器を用いた両頭愛染曼荼羅の顔料調査を実施し、顔料の復元について検討を行った（9月23日）。 ・大仏頂曼荼羅及び重要関連作品である千手観音像（当館蔵）、普賢延命像（当館蔵）について高精細デジタルカメラを用いた顔料調査を実施するとともに、制作途中の大仏頂曼荼羅復元模写を実査し、顔料等の復元について詳細な検討を行った（11月30日）。			
【備考】 調査回数：2回（9月23日両頭愛染曼荼羅調査、11月30日大仏頂曼荼羅調査） 調査作品数：4件（両頭愛染曼荼羅1幅、大仏頂曼荼羅1幅、千手観音像1幅、普賢延命像1幅） 論文発表：1件（『国宝『信貴山縁起絵巻』の復元模写』『国宝 信貴山縁起絵巻一朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝』特別展図録）			



文化庁所蔵信貴山縁起絵巻復元模写（尼公巻）


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	当館と東京文化財研究所が実施した光学的調査の成果に基づいて制作された信貴山縁起絵巻の復元模写を当館特別展「国宝 信貴山縁起絵巻一朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝」において展示公開し、同展図録中に制作過程で得られた知見を各論として公表することができた。以上の成果は、29年度から編集を開始する信貴山縁起絵巻の光学的調査報告書にも掲載する計画である。さらに当館館蔵品である両頭愛染曼荼羅及び大仏頂曼荼羅を愛知県立芸術大学が復元模写制作するにあたり、同大学と共同で各種の光学的調査を実施し、そこで得られた成果に基づいて制作当初の顔料を復元的に考察し、復元模写制作につなげることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	信貴山縁起絵巻、両頭愛染曼荼羅、大仏頂曼荼羅という当館を代表する館蔵・寄託品について復元模写を制作するにあたり、過去に継続的に共同研究を実施してきた東京文化財研究所及び愛知県立芸術大学とともに精度の高い光学的調査を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。29年度以降も、愛知県立芸術大学を始め芸術系大学の復元模写制作に寄与するデータが得られるよう、引き続きこれまでと同様の光学的調査をはじめ各種の調査研究を実施する計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 平安時代の大般若経の総合的調査と、歴史資料としての情報資源化に関する研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 平安時代に日本で書写された『大般若波羅蜜多経』(略して「大般若経」とも)の網羅的な調査を通じて、当該期における写経の形態的特徴を明らかにするとともに、写経遺品から得られる情報を歴史学の研究資料として利用するための基盤を構築しようとするものである。平安時代のなかでも9~11世紀のものは情報の共有が不足しているため、本研究ではその時代に書写された『大般若波羅蜜多経』の基礎データの蓄積に重点を置く。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻 忠
【主な成果】 (1) 「安倍小水麻呂願経」(貞観13年(871)願文)の研究 27年度に引き続き、慈光寺に伝来する『大般若経』(「安倍小水麻呂願経」)を調査し、本経が発願された背景、書写の場(地域)、書写に参加した人々の階層や人数などについて考察を深めた。 12月には、寺外に所在する僚巻が、どのような経緯で流出していったかを調査するため、国立公文書館及び宮内庁書陵部、さらには奈良女子大学で関連資料を閲覧した。 (2) (1)以外の平安時代古写経・大般若経関連遺品の研究 平安時代の古写経では、館蔵の紫紙金字『法華経』を、外部の識者(紙染め研究)を交えて調査、意見交換した(6月10日)。また、同時代の中国写経で、入唐僧円珍が我が国にもたらした『金光明経文句』巻下(園城寺所蔵)の調査を、外部の識者(国語学)を交えて調査した(6月21日、9月6日・15日、10月27日)。 大般若経関連遺品では、奈良時代書写の大般若経、通称「長屋王願経」(瑞光寺所蔵)を調査し(4月25日)、また同じく奈良時代の通称「魚養経」(薬師寺所蔵)を調査した(12月7日)。 (3) 平安時代史料の調査と研究 平安時代の写経を伝えた宗教的環境の研究と仏教関係史料の調査は、東大寺と仁和寺へ赴いて実施した。(4月18日・19日、東大寺貴重書調査)(7月28日・29日、仁和寺聖教調査) (4) 研究に基づく成果 科学研究費助成事業 基盤研究C「平安時代の大般若経の総合的調査と、歴史資料としての情報資源化」(研究代表者:野尻忠)の成果報告書として、『慈光寺所蔵「大般若経(安倍小水麻呂願経)」の調査と研究』を、29年3月22日に刊行した。			
			
図版を多用した研究成果報告書			
【備考】 論文等:「大般若経(安倍小水麻呂願経)」の基礎的研究(上記報告書掲載)他1件 講演会等:4件 調査及び研究の回数:23回			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	28年度は当初の計画どおり研究成果報告書を刊行できた。その内容は、プロジェクト名称に掲げる「歴史資料としての情報資源化」という目的を達成していると評価できる。しかし、27年度までに採取した膨大なデータの整理に時間と労力を要して年度末での刊行となったうえ、調査データを十分に消化して研究を展開できたかは、甚だ心許ない。プロジェクトとしては報告書刊行を以て一区切りとするが、引き続き同テーマの研究に取り組んでいく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本事業は、当館がこれまで実施してきた仏教美術研究の蓄積の上に立ち、直接的には前々回の中期計画期間に実施した奈良時代の『大般若波羅蜜多経』に関する総合的研究やを踏まえて、そのノウハウを生かしつつ平安時代の『大般若波羅蜜多経』を調査し、研究を推進しようとするものであった。当初の計画どおり研究成果報告書を刊行できたが、その内容は個別写経の研究が中心となり、平安時代の写経史全体を見渡す視点が弱い。今後もさらなる調査の蓄積に努め、全体像の構築を目指していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関・社寺等が所蔵する作品に及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館の所在する奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水 健
【主な成果】 (1) 展覧会に関する調査 ・特別展「国宝信貴山縁起絵巻」にて借用中の文化財の調査・写真撮影を実施した。 ・特別展「忍性」の事前調査を実施し、関係する文化財を調査・熟覧した(6月13日)。 ・特別展「忍性」にて借用中の文化財の調査・写真撮影を実施した。 ・特別展「春日大社」(30年度予定)に出陳予定の文化財の、調査・写真撮影を実施した(2月27日、3月10日)。 ・特別展「綴織當麻曼荼羅と繡仏の至宝」(30年度予定)の事前調査を、大和文華館にて行った(3月9日)。 (2) 外部資金による調査 ・科学研究費 基盤研究(A)「春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究」(研究代表者・湯山賢一)による文化財の調査・熟覧を徳川美術館にて実施した(5月11日)。 ・仏教美術協会研究等助成「天台宗の地方展開と鏡像」による文化財調査として、以下の2件を実施した。 ①越前市朽飯八幡神社にて、鏡像を調査・熟覧した(9月3日)。 ②島根県村方地区、及び松江市立鹿島歴史民俗資料館にて、鏡像を調査・熟覧した(3月2日～3日)。 ・メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成「8世紀に制作された鏡の図像の意味—法隆寺献納宝物海磯鏡を中心に」による文化財調査として、以下の3件を実施した。 ①国立台北故宫博物院・国立歴史博物館において、所蔵する唐鏡を観覧・調査した(12月24日～26日)。 ②中国・上海博物館において、同館所蔵の唐鏡を調査・熟覧をした(12月30日)。 ③中国・上海博物館、蘇州博物館、南京博物院、南京市博物館、浙江省博物館にて唐鏡等の文化財を観覧・調査した(12月29日～29年1月2日)。 (3) 経常調査、その他の調査 ・修理寄託中の文化財につき、X線撮影を含む調査・写真撮影を行った(4月19日、29年3月27日)。 ・仏教楽具の調査を唐招提寺にて実施した(9月1日・12月18日)。 ・飛鳥資料館にて、奈良文化財研究所とともに、同館に貸与中の館蔵品の光学調査を実施した(11月28日)。 ・外部の専門家とともに館蔵品の水瓶について総合的な調査及び検討会を実施した(29年2月25日)。 ・収蔵する仏教工芸品について随時調査を実施した。			
【備考】 ・調査 25回(うち客員研究員・調査員による調査6回、海外調査2回)			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表するという、事業概要に従い、当初の計画に基づき、概ね成果を達成している。奈良に所在する博物館として、奈良周辺の文化財の調査・研究を継続的に行っており、展覧会の借用品の調査等を通じて、多くの成果を積み重ねることができた。また仏教美術を専門とする博物館として、全国的に研究の層の薄い仏教工芸の研究について、良質な図版を確保し、基礎情報や光学的な調査に基づく基礎データなど、貴重な情報を得ることができた。さらに、海外調査等を行い、国際的な視野による上代工芸の研究に励むことができた。今後これらの一層の充実に傾注したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	今期は30年度に開催予定の春日大社に関する展覧会、同年度に開催予定の刺繍と織りによる仏画に関する展覧会に関連する調査・研究を重点化するほか、継続して行っている奈良周辺の文化財の調査・研究、仏教工芸に関する調査・研究、上代工芸に関する調査・研究の一層の充実に努めたいと思っている。殊に、光学機器を用いた調査は、成果の待望される分野であり、データの蓄積や分析に力を入れていく必要がある。28年度は初年度として、海外調査や機構内の他の機関との調査協力を達成し、一定の成果を上げることができた。今後は調査回数の増加を図るとともに、対象となる文化財の多角的な調査に励むなど、計画の遂行に一層努力したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 墳墓出土品の調査と研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館蔵の墳墓出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する			
【担当部課】	学芸部列品室	【プロジェクト責任者】	室長 吉澤 悟
【主な成果】 (1) 28年度は当館所蔵の群馬県白山古墳出土品の調査を実施した。白山古墳は北関東の終末期古墳(7世紀築造と推定)で、昭和29年に発掘され、出土品は国有化の後に当館に管理換えされたものである。出土品は蕨手刀や圭頭大刀、鉄鏃等に加え、和同開珎や銅碗(7世紀末～8世紀初頭)など珍しい品も含んでおり、古墳時代から奈良時代へと移り変わる時期の地方首長の威信財の有り様を示す貴重な資料である。 (2) 調査は、奈良文化財研究所都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)と当館考古部門の「連携研究」として実施した。奈良文化財研究所においては主に、刀剣類の破片部材の同定や実測図作成、写真撮影、和同開珎や銅碗等の成分分析と類例比較、写真撮影などを行い、同時に当館においては主に、昭和29年の発掘調査や古墳に関する情報収集や、過去の遺物修理記録の調査などを行った。成果報告は、当館の研究紀要『鹿園雑集』19号(28年度末発行)に掲載した。  群馬県白山古墳出土品			
【備考】 ・成果報告に向けた協議会等実施回数：2回 ・成果報告：1回(諫早直人、金宇大、降幡順子、大江克己、吉澤悟「群馬県白山古墳出土品の自然科学および考古学的研究」『鹿園雑集』19号 奈良国立博物館 29年3月)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	館蔵品の詳細な調査と成果発表を行ったことで、当初計画を着実に遂行したと言える。 特に白山古墳の調査・研究では、奈良国立博物館側が出土品の収蔵経緯や保存状況について報告し、奈良文化財研究所は出土武具の調査や銅製品の成分分析などを行い、それぞれを併せて総合的な報告を作成した。研究機関の効率的な連携研究を実現できたことは、今後の調査研究にとって有益と考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	所蔵品の基礎的で総合的な調査研究を実施するという当初計画を着実に遂行することができた。28年度に報告した白山古墳の調査成果をもとに、29年度はさらに関連遺品との比較検討などを含めた考察を進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 展覧会への借用品及び館蔵・寄託品、また館外の寺社等において所蔵される作品のなかから、南都に伝来したか、あるいは南都と関連の深い古代・中世の彫刻作品につき、調書を作成し、詳細な記録写真を撮影し、データの収集・蓄積に努める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【主な成果】 (1) 館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名については以下のとおり。 (2) いずれの作品についても、調査の結果、学術的に重要な知見が得られた。 (3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、あるいは公開講座での報告、また学術研究誌に掲載した論文等に、新知見を反映させることができた。 (4) また調査を契機に、新たな寄託品として収蔵できた作品もある。 [調査対象作品] 現光寺阿弥陀如来坐像 (5月10日) / 新長谷寺阿弥陀如来立像 (6月2日) / 正智院不動明王立像 (6月10日) / 安居院釈迦如来坐像 (6月16日) / 般若寺文殊菩薩騎獅像 (8月1日) 岡寺伝如意輪観音坐像 (8月22日) / 東大寺双身毘沙門天立像 (8月4日) / 唐招提寺文殊五尊像 (9月5日) / 御所市伏見区阿弥陀如来坐像 (9月9日) / 法隆寺観音菩薩立像 (9月13日) / 常念寺薬師菩薩立像 (9月28日) / 若王寺智証大師坐像 (9月28日) / 禅昌寺十二面観音菩薩坐像 (11月24日) / 當麻寺広目・多聞天立像 (12月2日) / 百済寺観音菩薩立像 (12月12日) / 個人蔵地藏菩薩立像 (29年1月5日) [調査の成果] 法隆寺観音菩薩立像については、蛍光X線分析調査の結果、鉄を多く含む成分比が判明し、白鳳期の銅造彫刻制作工房のグルーピングを考えるに資する成果を得た。安居院釈迦如来坐像については、頭部の別製螺髪が造像当初に近い時期のものであることが初めて判明した。また保存状態に関しても新たな見解が得られた。岡寺伝如意輪観音坐像については、同像に附属する板製光背に描かれた画像につき、近赤外線撮影等の光学的手法による撮影によって、これまで判然としなかった図像に関する新たな情報が得られた。百済寺観音菩薩立像については、これまで未紹介の作品であるが、平安時代中期(10世紀)にさかのぼる新出資料としての位置づけが得られた。			
【備考】 (1) 調査回数 16回 (2) 岩田茂樹「東大寺・双身毘沙門天立像」(東京国立博物館研究誌『MUSEUM』665号、12月12日発行)において東大寺双身毘沙門天像について論じ、鎌倉時代前期の慶派仏師の作であり、戦勝祈願などに際して調伏法本尊となるべき性格の尊像であることを指摘した。 (3) 般若寺文殊騎獅像や唐招提寺文殊五尊像に関する調査成果を、特別展「忍性 救済に捧げた生涯」の図録解説や題箋解説に反映させた。 (4) 現光寺阿弥陀如来坐像、御所市伏見区阿弥陀如来坐像の2件につき、新たな寄託作品とすることができた。 (5) 新長谷寺阿弥陀如来立像の調査の成果は、29年度開催予定の特別展「源信」の図録や題箋に、常念寺薬師菩薩立像や若王寺智証大師坐像の調査の成果は、3年後に開催を計画している「(仮称)木津川流域の仏像」に反映させる。			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	調査回数は27年度のそれを凌駕し、またその成果は28年度の特別展に反映させることができ、29年度以降の展覧会についてもそれが可能である。蛍光X線分析調査によって得られた法隆寺観音菩薩立像に関する知見や、安居院釈迦如来坐像の調査の成果は、彫刻史上において大きな意義を有するものである。また調査が契機となって新たに寄託品が増え、名品展の充実にも資することもできた。改善点は、調査の成果に基づく学術論文の発表数を増やすことが望ましいと考える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	南都に伝来しないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、継続して調書の作成や記録写真の撮影、また光学的手法による調査・撮影を行ったことにより、データの収集・蓄積に十分な成果があった。また調査研究によって重要な知見が得られる等、中期計画の初年度として十分な成果をあげることができた。今後も同様のペースで調査研究を持続したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究（(4)－①－1）		
【事業概要】 東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【主な成果】 <ul style="list-style-type: none"> (1) 当館において国宝聖徳太子及び天台高僧像の光学的調査に関する研究会を実施し、光学調査報告書第2冊「特殊画像編」の編集方針の確認及び追加調査計画を協議した（4月25日）。 (2) 聖徳太子及び天台高僧像の奈良博寄託分7幅について高精細デジタルカメラを用いた透過エックス線画像の追加撮影を実施（6月24日）。 (3) 奈良・朝護孫子寺において東京文化財研究所研究員とともに国宝信貴山縁起絵巻の光学的調査成果報告書刊行に向けて協議し、撮影データの分析等を行った（7月28日）。 (4) 当館において、共同研究で得られた膨大な画像データ共有の方法、過去に成果報告書として刊行された調査データのWEB上での公開方法等について、東京文化財研究所研究員と協議を行った（11月28日）。 <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  <p>『国宝聖徳太子及天台高僧像光学調査報告書 —特殊画像編—』</p> </div>			
【備考】 調査回数 1回(6月24日)、調査作品数 1件（聖徳太子及び天台高僧像7幅） 研究会等開催件数 3件(4月25日、7月28日、11月28日) 刊行物 報告書『聖徳太子及び天台高僧像 第2冊』29年3月31日刊行			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	16年度から継続的に実施してきた東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づき、平安仏画を代表する名品である国宝聖徳太子及び天台高僧像について光学的調査の実施及び成果報告書第2冊の年度内刊行に向けた追加調査、編集作業を計画どおり進め、本年度内に刊行した。また29年度以降に計画されている国宝信貴山縁起絵巻調査成果報告書の刊行に向けて調査データの整理、分析を順調に進めることができた。これら精度の高い調査データは美術史研究や現在計画中の保存修理に際して重要な基礎資料となることが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、28年度は平安仏画を代表する聖徳太子及び天台高僧像の調査報告書第2冊の刊行に向けて追加の光学的調査及び編集作業を着実に進め、本年度内に刊行した。さらに、すでに光学的調査を実施した国宝信貴山縁起絵巻について顕微鏡写真撮影等の追加調査を実施し、29～30年度にかけて各年度に1冊ずつ分冊の形で合計3冊の調査成果報告書を刊行する計画である。また今後は、これまでの個々の作品調査や研究から一歩踏み込んで、彩色の施された文化財に関する総合的な研究と情報の共有という広い枠組みの中で検討を重ねることで、更なる進展を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ a. 特別陳列「お水取り」に関連する調査研究 ((4)－①－1))		
【事業概要】 南都諸社寺等における文化財の調査、宗教文化に関する調査の一環として、奈良において著名な伝統行事の一つである、東大寺二月堂修二会（お水取り・毎年3月に催行）に関する調査・研究を行い、その成果を毎年恒例開催となっている特別陳列「お水取り」に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 岩井共二
【主な成果】 (1) 東大寺ミュージアムにおいて、文化財担当者と出陳候補文化財に関する打ち合わせを行い、また調査を実施した。 (2) 出陳可能な文化財の決定と、その内容の確認を行うことができた。 (3) 特別陳列「お水取り」の展示構成、図録に上記の内容を反映させた。			
【備考】 (3) 文化財担当者との協議の結果、28年度特別陳列「お水取り」の出陳作品として24年度～26年度に修理を実施した東大寺所蔵「重要文化財 銅造舟形光背」を修理後初めて出陳することができた。修理完了によって、これまで見ることが出来なかった裏面の図様が確認出来るようになり、これによって新たに得られた知見を、同特別陳列を通じて広く発信することができた。 同文化財は29年度以降の特別陳列「お水取り」でも重要な構成要素となると考えられることから、引き続き展示を行うことができるよう協議を実施する予定である。			
○調査実施回数 1回 ○展覧会関係講座 1回			
			
重要文化財 銅造舟形光背（身光） トレース図（裏面）			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別陳列「お水取り」の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けをとったものとすべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。28年度は修理後初出陳となる文化財の展示を行うことで、展示の充実を図ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	特別陳列「お水取り」の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究は、奈良の歴史・伝統文化の理解促進に資するものであり、当館の事業の中でも重要性が高いものと言える。28年度の展示では修理によって得られた新たな知見を公開することで、調査研究の成果を広く発信することができた。29年度以降も同特別陳列の開催に向けた調査研究を行う予定であり、これを円滑に遂行し、確実な成果の蓄積を進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ b. 特別陳列「和紙－近代和紙の誕生－」に関連する調査研究 ((4)－①－1))		
【事業概要】 特別陳列「和紙－近代和紙の誕生」に関して、以下の2点について調査研究を行った。 (1) 明治期の製紙改良家である吉井源太の調査 (2) 高知県立紙産業技術センターで行っている紙製文化財の紙質調査			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 現在の和紙は、高知県出身の製紙家吉井源太により明治期に技法や材料の大きな改良が行われている。特別陳列「和紙－近代和紙の誕生」では、吉井源太の日記や製作した紙など彼の業績を中心に展覧会を構成した。吉井源太の出身地である、いの町紙の博物館や高知県立紙産業技術センターで保管されている資料調査を行い、展示に反映した。 (2) 日本の紙文化財は、修理に用いる補修紙を作製するために紙質調査を行っている。本展示では、修理の際に高知県立紙産業技術センターで実施している紙質調査について、当館所蔵の修理作品とともに紹介した。			
【備考】 (1) 吉井源太に関する現地調査回数：3回 (2) 高知県立紙産業技術センターとの検討会：3回 (3) 印刷用の和紙で展覧会チラシを作成し、16ページの展覧会図録を作成した。			
			
和紙展の図録表紙			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	明治期に洋紙が輸入されるのに伴い、和紙制作は大きく変貌したが、これまで一般にはほとんど知られていなかった。日本の手漉き紙が和紙として発展した歴史を、高知県のいの町出身の吉井源太を中心に開催した国立博物館で初めての展覧会となった。本展示により、博物館・美術館関係者のみならず、紙を扱う技術者や和紙製作者などへ和紙の近代化についての調査成果を公開した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	和紙の展示は単年度の計画であるが、今後も国の施設として和紙に関する情報発信が必要である。このため、29年度は東京大学資料編纂所の共同研究員として、いの町紙の博物館所蔵『吉井源太翁遺文』のデジタルデータ化及び調査研究を行い、近代製紙技術の変遷の解明、江戸期以前の和紙文化財に使用された料紙に関する理解を深化させ、展示等を通じて成果を公開する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ c. 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 春日大社若宮社の祭礼、おん祭の歴史と、春日信仰の美術を紹介する展示。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室員 齋木涼子
【主な成果】 (1) 京都大学附属図書館所蔵「奈良与力橋本家律令雑記」における、おん祭関係史料及び「春日若宮文書」の調査 奈良奉行与力を務めた橋本家の記録、「奈良与力橋本家律令雑記」に含まれるおん祭関係史料は、部分的に論文等で言及されることはあったものの、本格的に紹介されたことはなかった。 また「春日若宮文書」については、国書総目録に見えるものの、実態については不明であった。そこで、両者の概要の調査を行った。 その結果、特に前者については、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示内容に相応しい史料であることが確認された。 (2) 個人蔵「御役所絵図」(奈良奉行所平面図)の調査 個人蔵になる「御役所絵図」は、論文等で言及されたことがあるものの、展示等において紹介されたことはなかった。そこでその概要の調査を行った。 その結果、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示内容に相応しい史料であることが確認された。 (3) 以上の(1)(2)の調査成果を受け、28年度特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の特集テーマを「奈良奉行所のかかわり」に決定した。またこれにともない、「御役所絵図」と「奈良与力橋本家律令雑記」から4点を選び、展示・紹介することができた。			
		「奈良与力橋本家律令雑記」のうち春日若宮祭礼書類 (左)、春日若宮祭礼手控 (右)	
【備考】 ・調査：京都大学附属図書館 2回 (40点) 個人所蔵品 1回 (1点) ・齋木涼子 「おん祭と春日信仰の美術—特集 奈良奉行所のかかわり—」(特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』図録 展示概説、12月) ・特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』(12月10日～29年1月15日、奈良国立博物館東新館)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	「春日若宮おん祭」について、従来注目されることの少なかった江戸時代の史料群の調査を行い、その存在を評価し、展示を通じて広く公表することができた。また例年、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」については、主に美術作品や芸能関係資料の調査・研究が続いていたが、今年度は歴史史料の調査を重点的に行い、その結果、今までにない近世の奈良奉行所と奈良の祭事という新しい観点から展覧会を構成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
A	平安時代以来の長い歴史を持ち、重要無形文化財である「春日若宮おん祭」の歴史、また春日社に対する信仰について、例年新たな切り口を見出し、展覧会を通じてその多様な魅力、歴史・文化における重要性を紹介することができている。特に、今回の成果である未紹介の史料の調査・展示は、新聞等でも取り上げられており、地域における文化財への関心を高めるとともに、美術史・歴史研究の発展にも寄与するものと考えられる。今後も、祭礼や信仰の様々な側面に関する研究を行い、新たな知見を提示していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	キ d. 春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))
【事業概要】 当館はこれまでに「春日社」や「春日信仰」をテーマにした数々の展覧会を開催してきたが、春日大社の式年造替(平成27～28年)及び春日大社創建1250年(平成30年)を目前に控えたこの時期に、改めてこれを総合的に研究する事業である。各分野の研究者がそれぞれの専門的立場からプロジェクトに参画し、展示に向けた個別遺品の調査に留まらず、類似の遺品全体を系統的に調べ上げ、丹念に情報収集する形で研究を進める。本研究による成果は、近年当館で毎年開催している特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」や、平成30年に予定している特別展「創建1250年記念 春日大社展(仮)」に反映する計画である。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 内藤 栄
【主な成果】28年度は、以下に掲げるいくつかのテーマから春日信仰にアプローチした。その成果の一部は、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術—特集 奈良奉行所のかかわり—」(12月10日～29年1月15日)や各研究者が関わった刊行物、口頭発表等に反映された。また、3年間の研究の集大成として、研究成果報告書を刊行した。 (1) 春日曼荼羅等の絵画資料に関する研究 ・5月11日 徳川美術館が所蔵する春日南円堂曼荼羅、鹿島立神影図を調査した。 ・5月28日 静嘉堂文庫美術館が所蔵する春日本迹曼荼羅、春日鹿曼荼羅等の仏教絵画を調査した。 ・5月29日 根津美術館が所蔵する春日宮曼荼羅、春日補陀落山曼荼羅等を調査した。 ・8月29日 米国ニューヨークのブルックリン美術館が所蔵する春日鹿曼荼羅や両界曼荼羅等を調査した。 ・8月30日 米国ニューヨークのメトロポリタン美術館が所蔵する春日宮曼荼羅、春日鹿曼荼羅等を調査した。 ・8月31日から3日間、米国オハイオ州のクリーブランド美術館が所蔵する春日宮曼荼羅・北塔九曜図等を調査した。 (2) 春日若宮祭(おん祭)の歴史に関する研究 ・4月11日と9月9日の2回にわたって京都大学附属図書館へ赴き、春日若宮祭関係の資料を調査した。これは、江戸時代に奈良奉行所の与力を務めた橋本家に伝来した史料で、以前から存在は知られていたが、本格的な調査は今回が初めてとなる。調査と研究の成果は、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示内容に反映された。 (3) 春日本地仏に関する研究 ・8月29日 米国ニューヨークにおいて、ブルックリン美術館所蔵の神将形頭部等、アジアソサエティ所蔵の地藏菩薩立像等を調査した。 ・8月30日 米国ニューヨークのメトロポリタン美術館が所蔵する如来坐像等を調査した。 ・9月1日 米国オハイオ州のクリーブランド美術館が所蔵する菩薩半跏蔵等を調査した。 (4) 春日塔跡出土品の整理 ・昭和40年代の発掘調査で当館敷地内の春日塔跡から出土した品を順次、整理し、写真撮影した(年間を通じて)。	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 刊行物：『春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究』(当館編集・発行、29年3月31日) 論文等：5件 研究発表等：2件 調査及び研究の回数：8回	



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である28年度は、27年度までに実現できなかった米国各所での春日信仰遺品の調査を実施したこと、京都大学の春日若宮文書を本格的に紹介した点が評価される。28年度の実績としては達成しているが、助成申請時に掲げた「遺品全体を系統的に調べ上げる」という計画に対する達成度は低い。そのため左の評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費の助成を受けた3年間で、春日曼荼羅の調査と研究、春日塔跡出土品の整理などにおいて十分な実績があった。その一部は刊行した報告書に盛り込んだほか、毎年冬に開催している特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示内容にも反映された。また、平成30年に予定する特別展「春日大社」に向けても、有用な成果を上げることができた。しかし、当館のこれまで研究が「個別遺品の調査」に留まっていたことへの反省から、「類似の遺品全体を系統的に調べ上げ、丹念に情報収集する形で研究を進める」とした当初の目標からすると、不足の感が否めない。助成期間は終わるが、引き続き日本仏教美術研究の拠点であるとの自負のもとに、春日信仰あるいは広く南都の宗教信仰に関わる文化財の調査、情報収集に努めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査		
プロジェクト名称	キ e. 真言密教聖教の歴史史料としての調査・研究と活用（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）		
【事業概要】 寺院や公的機関が所蔵する密教聖教について、歴史史料としての側面に着目して調査・研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室員 齋木涼子
【主な成果】			
<p>(1) 称名寺所蔵聖教（神奈川県立金沢文庫管理）について、目録をもとに金沢文庫において写真帳の閲覧を行った。その後、重要史料と思われるものについては、複写（紙焼きコピー）を申請し、入手した。</p> <p>(2) 国立公文書館所蔵の『三僧記類聚』について、紙焼き写真をもとに、内容調査を行い、仁和寺本『三僧記類聚』との比較などを行った。</p> <p>(3) 現在修理中の当館所蔵「神泉苑請雨経法道場図」（重要文化財）について、解体修理の各過程を確認し、その際に密教の修法図面である道場図の制作方法、使用顔料などについて、新たな知見を得た。</p> <p>(4) 27年度及び28年度の調査によって得られた史料や情報について、整理・検討を行った。</p>			
			
「神泉苑請雨経法道場図」紙背からの状態確認		「神泉苑請雨経法道場図」細部	
【備考】			
科学研究費助成事業の2年計画の2年目			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査：神奈川県立金沢文庫（称名寺所蔵聖教写真帳調査） 1回（30点） <li style="padding-left: 20px;">当館文化財修理所（「神泉苑請雨経法道場図」調査） 3回（1点） 			
<ul style="list-style-type: none"> ・齋木涼子「忍性と祈雨」『忍性—救済に捧げた生涯—』特別展図録（コラム） 奈良国立博物館 7月 ・齋木涼子「内侍所神鏡をめぐる儀礼」第18回洛北史学会大会「儀礼研究の可能性—王権・宗教・外交—」（研究報告）於京都府立大学会館 6月4日 ・齋木涼子「平安時代の宮中仏事」（サンデートーク） 於当館講堂 11月20日 			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>科学研究費助成事業2年計画の2年目である28年度は、27年度の調査の遅れを取り戻しながら、新たな調査を進めた。新たに入手した図書・資料等により、講演・講座の内容をより正確かつ充実したものにすることができ、それらの図書・資料により、今後の新たな検討素材などを得ることができた。</p> <p>また、2年間の調査成果を検討し、未紹介史料の内容確認や聖教における平面図の作成手順など、様々な知見を得ることができた。今後、得られた情報や知見を、順次論文や報告で発表していく予定である。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>中期計画に沿って調査研究を実施した。</p> <p>27年度より始まった2年計画の1年目・2年目ともに予定していた調査を終える事ができた。また2年間の調査成果を検討し、様々な知見を得ることができた。今後、得られた情報や知見を、順次論文や報告で発表していく予定である。</p> <p>さらに、今回の研究テーマを発展させる内容で、29年度に科学研究費を申請しており、28年度新たに見出した研究課題を継続的に研究していく予定である。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析に関する調査研究 (4)－①－1))		
【事業概要】 X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長 木川りか
【主な成果】 X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析をするためには元となるCTデータがどれだけ物質の特徴を捉えているかを検証することが必要である。28年度は漆工芸品と铸造品についてCTデータの見え方の検証を行った。			
<p>(1) 漆工品木地構造調査のための解析研究 漆工芸品の木地構造の特徴を検証するため、X線の出力を225kVとし、X線管に装着するフィルターによる見え方の検証を行った。その結果、木地構造がより鮮明になるなど成果が得られた。この成果はサントリー美術館所蔵の漆工芸品や徳川美術館所蔵の「初音の調度」の共同研究に応用し成果を得ている。現在、報告書作成に向けてデータ整理等を行っており、29年度には学会発表を予定している。</p>			
			
<p>図1 フィルターによるコントラストの違いの検討例</p>			
<p>(2) 铸造品の製作技法解明のための解析研究 铸造品はその鬆(す)の入り方の見極めが重要であり、製作技法の解明にもつながる。铸造品などの金属を解析するためにX線の出力を320kVとし、積分撮影時間とフィルターによる見え方の検証を行った。図1は銅鐸の断面X線画像である。同一条件でもフィルターの違いによって矢印部のコントラストの違いが顕著であることがわかった。これらの検証結果は金属製の考古遺物の撮影に応用することができる。調査結果については学会や論文等で公開予定である。</p>			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査件数：4件・調査回数108回 ・赤田昌倫，他4人： 			
X線CTスキャナを用いた国宝「初音の調度」見台の構造調査 日本文化財科学会第33回大会 2016年			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数は108回に上り、年間を通して調査研究を実施することができた。 ・CTデータのノイズが軽減されたことで観察の精度が上がり、各種調査の進展につながった。 ・特に28年度の成果から漆工品や铸造品の構造調査が進展し、報告書や学会発表で明らかにすることができた。 ・29年度も研究を継続させ、材質にあった調査方法の確立を目指す。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・X線CTの撮影方法の改善による鮮明なCTデータの取得については常時検討しており、中期計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に調査研究を遂行できた。29年度も継続して実施する予定である。 ・改善されたCTデータから構造に直結するデータ解析の方法についても検証し、漆工品であれば木地構造の解析を、铸造品であれば湯の流れの解析を行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 日本中近世の工芸、特に茶道具に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 美術史的・文化史的視点に立脚して、中世から近世に日本で誕生し発展した工芸品、特に茶道具に関する継続的な調査研究である。当館にとって重要なテーマの一つである茶の湯に関する展示・収集等に研究成果を反映することを目標とする。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 酒井田千明
【主な成果】 (1) 蒔蒔絵螺鈿茶箱（サントリー美術館所蔵）の調査を行い、トピック展示「きらめきで飾る－螺鈿の美をあつめて」（会期：11月15日（火）～12月23日（金））の展示および展覧会図録に活用した。 (2) 南蛮砂張棒之先水差（五島美術館所蔵）の調査を行い、特別展「タイー仏の国の輝きー」（会期：29年4月11日（火）～6月4日（日））の展示および展覧会図録に活用する予定である。 (3) 主に文化交流展示における茶の湯に関する展示で活用予定の、福岡市美術館および田中丸コレクション所蔵の茶道具（28年度から30年度にかけて当館で預かり）の調査を実施した。 (4) 29年度の特別展「新・桃山展ー大航海時代の日本美術」および文化交流展示における茶の湯に関する展示につなげるべく、主に国内の博物館・美術館所蔵の茶道具について情報収集を行った。 訪問した主な所蔵先は、東京国立博物館、京都国立博物館、三井記念美術館、野村美術館、五島美術館、彦根城博物館、本間美術館、味楽窯美術館、個人宅（東京）等。			
			
「肩衝茶入 銘 松永」（福岡市美術館所蔵）		「絵唐津菖蒲文茶碗」（田中丸コレクション所蔵）	
【備考】			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	28年度に計画していた研究や課題について予定どおり実施することができた。調査研究成果を次年度以降の特別展および文化交流展示や、作品収集へとつなげることが課題である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	当初目標は達している。29年度の特別展「新・桃山展ー大航海時代の日本美術」および文化交流展示の茶の湯に関する展示において、これまでの研究成果を活用する予定である。今後も継続的な調査を実施するだけでなく、さらに調査対象を広げ、分野を横断した情報共有・整理を行うことが課題である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 近世キリスト教に関する研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 キリスト教の日本伝来と禁教に関わる作品展示は、文化交流展の重要なテーマとして、20年度より、毎年度実施してきた(リニューアルのため一時中断した27年度は除く)。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」(28年9月に名称を「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」から変更)が世界遺産登録を目指す動きがあるなか、近世日本におけるキリスト教の歴史や信仰に関する研究を進めるとともに、展覧事業等を通じて、研究成果を一般により広く発信する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 松浦晃佑
【主な成果】 (1)「キリスト教の伝来と禁教」というテーマのもと、キリスト教が日本に伝来した頃から、明治時代に至るまでの近世の作品を中心に、日本のキリスト教の歴史を追えるように作品展示を行った(9月14日から29年3月31日まで)。また、9月14日に、観覧者に向けて作品解説を行い、展示内容を深く理解してもらうよう努めた。さらに、26年度まで実施していた展示内容の刷新を目的に、平戸市生月町博物館島の館において、「かくれキリシタン」に関する調査研究を行うとともに、同館より作品の展示に関する協力・助言を得た。  (2) 当館研究紀要『東風西声』第12号(29年3月刊行)に、『南蛮通詞』試論』を掲載した。28年度以前より国内外の機関で史料収集を進めてきた成果を公表した。この論考で、キリスト教が禁止された近世日本において、キリスト教宣教師や信者の一部が、通訳として日本と海外との間で行われたコミュニケーションの一端を担っていたことを紹介した。			
【備考】 松浦晃佑 『南蛮通詞』試論『東風西声』第12号(29年3月刊行)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	キリスト教に関する遺産を世界遺産に登録しようとする動きがあるなか、文化的に、また政治的にも、日本社会に多大な影響を与えたキリスト教に関する調査研究は、その歴史や信仰のあり方をより深く理解する上で重要である。28年度は、刊行物を通じて、調査研究の成果を発信することができた。また、展覧事業に関しては、近世の作品を中心に、キリスト教の伝来から禁教、禁止解除までの歴史をたどる作品展示を行うことができた。他館との連携も深めることができ、28年度に得た成果を、29年度以降の展覧事業で活用したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした調査研究を行う中期計画の下、ヨーロッパから、アジアを経由して伝えられたキリスト教の歴史を、近世の作品を中心に、展覧事業を通じて広く紹介することができた。また、調査研究の成果を刊行物で公開し、日本とアジア、ヨーロッパとのコミュニケーションを担うキリスト教宣教師や信者たちがいたことを紹介し、近世日本における交流の様相を明らかにした。29年度以降は、他館の協力を得ながら、28年度の成果を生かしていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 高等学校が所蔵する考古資料に関する研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 全国の高等学校には現在、校内遺跡出土品、歴史系部活動による発掘調査出土品等、様々な来歴の考古資料が保管されている。高等学校所蔵考古資料の実態把握は、考古学研究上の重要性に加え、社会史的、教育史的意義を有する。しかしながら、考古学的知識を有する教職員の不足から、十分な管理、活用が行われているとはいえない状況にある。本研究は、高等学校所蔵考古資料の更なる活用にむけて、全国的な調査を実施し、その成果を展示等の博物館活動を通じて広く公開するものである。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室主任研究員 今井涼子
【主な成果】 (1) 高校所蔵考古資料の調査 ・28年度は、29年度以降の資料調査のための情報収集を行った。福島県、島根県、沖縄県について資料調査の候補となる高等学校の情報を得ることができた。 ・京都府京都文化博物館「京都府内の学校所蔵考古・歴史資料展」・博学社連携シンポジウム「学校の‘たからもの’を発掘しよう！学校所蔵考古・歴史資料のこれから」、和歌山県立紀伊風土記の丘「学校にあるたからもの」を調査した。関係者と情報交換を行うとともに、各府県内の考古資料所蔵高等学校について概要調査を行った。 (2) トピック展示の実施 ・27年度に実施した調査の成果を、真夏のトピック展示「全国高等学校考古名品展2016」（会期：7月20日～9月25日）で紹介した。 ・企画課と連携してトピック展示会場内に「考古学研究部部室コーナー」を設け、展示している考古資料と高校生部の活動の関連性を示すとともに、考古学という学問を身近に感じられるよう演出した。 ・企画課、博物館科学課と連携して、「瞳のある土偶」（松商学園高所蔵）のX線CT画像とレプリカを活用した体験コーナーを設けた。考古資料の科学的データを用いた体験事業や展示の方法等について情報収集できた。 (3) 体験事業の実施 ・交流課と連携して「なりきり考古学者体験スペシャルバージョン」（8月27日、9月17日）をトピック展示会場内で実施した。考古資料担当研究員の指導のもと、ハンズオン用の土器を使用した。展示室内で実施したため、観覧者も間接的に体験することができた。 (4) 「全国高等学校考古学フォーラム」の実施 ・26年度、27年度に引き続き、「全国高等学校考古学フォーラム」（8月6日）を実施した。高校生による研究発表に加え、きゅーはく女子考古部の協力によるワークショップも行い、フォーラムの構成に変化をもたせた。 ・博物館実習生にスタッフとして役割をもたせ、効果的な実習とすることができた。			
【備考】 調査回数：2回 X線CT分析：6件 3次元計測：1件 新聞取材：6件（朝日、毎日、西日本他） 論文等：今井涼子「高校考古―ある博物館の取組み」『歴史地理教育』29年2月号 赤田昌倫、今井涼子、西島亜木子、田中麻美、鮫島由佳、平山絵理子「真夏のトピック展示「全国高等学校考古名品展2016」における考古資料の3次元データの公開活用について」『東風西声』第12号 刊行物：真夏のトピック展示図録『全国高等学校 考古名品展 2016』			



なりきり考古学者体験の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	資料調査とトピック展示の実施が、高校所蔵考古資料の認知と再評価、高校と地元資料館等との連携事業実施の契機になった。こうした外部からの働きかけが高校自身による資料の再発見、再認識へとつながり、考古資料の新たな活用が始まっている。 わかりやすさと専門性のバランスに配慮し、考古資料と考古学に親しめる体験メニューを開発した。更に工夫を重ねることで、博物館での実施に留まらず、高校での考古資料の有効活用につなげることが可能である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	資料調査とトピック展示の実施が、高校内外での新たな活動の契機となった。この動きは始まったばかりであり、高校所蔵考古資料の基礎的情報の蓄積と公開を継続していくことが必要である。体験事業等を通じて高校との連携を継続、強化し、博学連携事業として発展させていくことも可能である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 水中遺跡の保存活用に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 日本国内における水中遺跡保護の体制の確立を目的とし、国内外の水中遺跡の保存と活用に関する取組を調査した。特に以下の4点の課題項目を設定した。①国内における水中遺跡保護に関する詳細調査。②国内の水中遺跡の探査・保存・活用の手法に関する調査研究。③諸外国における水中遺跡の探査・保存・活用に関する取り組み状況調査。④最終報告に向けたこれまでの調査研究のとりまとめ。これらの成果はシンポジウム等での発表を行い、また、事業成果報告書を作成した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 小泉恵英
【主な成果】 ①国内における水中遺跡保護に関する詳細調査 モデルケースとして4県(新潟県、滋賀県、福岡県、長崎県)について、周知の遺跡の詳細と現状把握、文献に掲載された沈没船・漂着物等に関する情報、また、それぞれの県内の水中文化財保護に対する体制についても情報の収集を実施した。また、日本各地の県史及び市町村史に残された漂着や沈没の記録の収集を実施しており、29年度にこれに基づいたデータベースを作成する予定である。 ②国内の水中遺跡の探査・保存・活用の手法に関する調査研究 福岡県及び宗像市の協力のもと、遺跡探査技術の理解を深めるため、福岡県沖ノ島周辺にて海底探査を実施した。また、地方自治体が主体となって実施した遺跡調査事業(福岡県新宮町及び沖縄県多良間村)においては、水中での記録作業や活用方法などの技術協力を行った。保存手法と活用・展示方法の研究として、長崎県松浦市の鷹島海底遺跡・新宮町相島海底遺跡の出土遺物のX線CTスキャンによる調査を実施した。 ③諸外国における水中遺跡の探査・保存・活用に関する取り組み状況調査 水中で現位置のまま保存された遺跡の活用方法について、海底ミュージアムの先進的な事例として知られるイタリアのバイア海底公園にて現地調査を実施した。また、中国の南海1号船の引き上げプロジェクトと保存処理の手法について現地の海のシルクロード博物館(広東海上糸絹之路博物館)にて調査を実施した。イタリア・中国における水中文化遺産の保護体制について現地にて専門職員と協議を行ない、関連法案や遺跡保護への取り組みについて理解を深めた。 ④最終報告に向けたこれまでの調査研究のとりまとめ 25年度から実施している諸外国の調査の中から、オーストラリア及びオランダについて保護管理体制やキャパシティビルディングについて再考察を実施した。また、国内の実践的な探査方法や活用について、琵琶湖の湖底遺跡の活用について調査を実施した。			
【備考】 文化庁の取組：水中遺跡調査検討委員会(2回)、文化財担当員協力者会議(2回)、研究会(2回) 調査件数：計8回(海外調査2回、国内水中遺跡調査3回、出土遺物調査3回) 発表件数：計7回 世界考古学会議(3件)、新安沈船40周年記念シンポジウム(韓国)、他 報告件数：1件『水中遺跡の保存活用に関する調査研究4』(文化庁報告書) 取材：新聞(読売、朝日、西日本、宮古毎日新聞 他)、テレビ(NHK、韓国MBC 他)			



中国現地視察の様子(南海1号沈没船)


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	28年度に予定していた4項目について、予定通りに実施した。特にイタリア・中国の現地調査では、具体的な活用や展示の事例について学ぶことができた。国内の遺跡調査研究では、今後の調査に関して期待が持てる成果を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	28年度の事業は、文化庁事業として5ヵ年計画の内の4年目に該当し、最終報告に向けて日本における水中遺跡保護の体制に関して、その方向性を打ち出すことを主眼とした。29年度では、28年度の事業のうち、特に①国内における水中遺跡保護に関する調査で得られた結果をもとに、さらに詳細な調査を実施し、また、調査エリアを拡大する。最終年度として、これまでの調査の総まとめを行い、特に活用に重点を置いた事業を展開する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ タイの歴史・美術に関する研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 九州国立博物館とタイ王国文化省芸術局における学術文化交流			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長 原田あゆみ
【主な成果】 本事業は、25年度にタイ王国文化省芸術局と締結された学術交流協定のもとに継続されている事業で、日タイ両国における共同調査を基本とする。28年度の研究成果は以下の通りである。 (1) 交易品、美術工芸品、伝統及び文化交流等に関する共同研究として、タイとは古くから交流の歴史をもつ琉球の調査研究を行った。沖縄県立博物館・美術館、沖縄県立埋蔵文化財センター、首里城公園美術館、今帰仁城にて琉球とタイの交易資料の調査を行った。また、那覇市歴史博物館、那覇市壺屋焼物博物館、浦添市美術館、名護市博物館にて琉球文化の調査を行った。タイ側に新たな資料を提供できたのみならず、沖縄県側にもタイ側の資料情報を提供することができた。 (2) 地域に開かれた市民参加型の博物館づくり及び広報活動に関する共同研究として、国立民族学博物館、大阪市歴史博物館、東京国立博物館、江戸東京博物館で調査を行った。本調査はタイ王国芸術局の要望により実施されたもので、タイにおける博物館活動の推進に寄与するためのものである。 (3) 博物館事業に係る共同事業及び学芸員、研究員等の人材交流として、当館の教育普及、ボランティア活動担当者および学芸員による視察および意見交換会をタイにおいて行った。 (4) タイの歴史・文化を博物館来館者に興味をもって理解してもらうために、両国の教育普及担当者が共同調査を行い、教育普及コンテンツについて研究した。			
			
バンコク国立博物館での教育普及調査の様子			
【備考】 上記の調査研究の実施、参加者数は以下のとおり。 (1) 交易品、美術工芸品、伝統及び文化交流等に関する共同研究：8月27日～9月2日 (タイ側参加者6名、日本側参加者3名) (2) 地域に開かれた市民参加型の博物館づくり及び広報活動に関する共同研究：8月29日～9月3日 (タイ側参加者5名、日本側参加者3名) (3) 博物館事業、特に教育普及に係る共同事業及び学芸員、研究員等の人材交流：29年1月14日～1月20日 (タイ側参加者7名、日本側参加者3名)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	本研究は、学術交流協定のもとに計画的に進められている。28年度は学術交流締結から4年目にあたり、計画されている共同研究テーマを具体的に実施することができた。5年目となる29年度は共同セミナーを開催することになっているため、具体的な日程、プログラムを日タイ双方で早めに確認する必要がある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	計画にある有形文化財の収集に関しては、28年度については具体的に実施しなかったが、学術交流協定の計画の大綱に沿って、年度毎に課題を選んで共同研究を実施している。29年度に実施を予定している共同セミナー、報告書作成においては展覧事業・教育普及活動以外にも、作品収集・保管等に関する報告を行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ a. トピック展示「火縄銃の世界」に関連する調査研究 ((4) -①-1))		
【事業概要】 火縄銃の歴史的展開について、九州を中心とした調査および展示を行い解明する。地域・時代ごとの形式上の差異などに注目し、展覧会事業等を通じてその成果を広く発信する。また、調査で得られた知見を踏まえて、新たな資料の掘り起こしを行う。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室研究員 望月規史
【主な成果】 (1) 九州を中心として国内 11 機関で調査を行い、トピック展示「火縄銃の世界」(7月12日～9月4日)の展示及び展覧会リーフレットに活用した。 (2) 8月17日に堺市博物館からの依頼により、トピック展示「火縄銃の世界」を案内・解説し、火縄銃資料の展示方法などについて指導を行った。 (3) 12月19日に、甘木歴史資料館からの依頼により、火縄銃(6挺)の調査および展示指導を行った。 (4) 29年度の特別展「新・桃山展―大航海時代の日本美術」および文化交流展示における武器・武具に関する展示に活用するため、国内の博物館所蔵の火縄銃および関係資料について各種の情報収集を行った。			
			
「火縄銃の世界」会場写真			
【備考】 制作物：トピック展示用リーフレット 調査地：計 11 機関 靖國神社遊就館 (5月19日)、都城島津邸 (5月29日)、静岡市文化財資料館 (6月4日)、国立歴史民俗博物館 (6月15日)、平戸市生月町博物館・島の館 (6月24日)、大分県立枚増文化財センター (7月4日) 佐伯市歴史資料館 (7月4日)、長浜城歴史博物館 (9月10日)、種子島開発総合センター鉄砲館 (9月23日)、堺市博物館 (10月29日)、甘木歴史資料館 (12月19日)			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	展示品と類品及び関連作品を比較しながら多くの資料を調査することができた。また、CT調査の結果から、非接触・非破壊で火縄銃の構造などを観察でき、大きな成果を得た。その成果を28年度最初のトピック展示に反映し、当初計画通り遂行することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に調査研究を遂行できた。日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした調査研究を行う中期計画のもと、29年度の特別展「新・桃山展―大航海時代の日本美術」および文化交流展示の武器・武具に関する展示において、これまでの研究成果を活用する予定である。今後も継続的な調査を実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ b. トピック展示「きらめきで飾る-螺鈿の美をあつめて-」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本プロジェクトは、螺鈿をテーマとしたトピック展示の作品選定、図録執筆を前提に、国内に所蔵される螺鈿器の調査研究を行ったものである。その成果はトピック展示の展示及び図録において公表した。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 川畑憲子
【主な成果】 本トピック展は、国内に所蔵される中国、朝鮮半島、日本、琉球、タイ、ベトナム、インド製の螺鈿器を通じて、アジアに広がる螺鈿の文様や技法の歴史的な変遷を紹介することを目的とした。 本トピック展を準備するにあたり、以下の美術館・博物館の協力のもと、約60件の作品を実見、調査を行い、各機関の研究者とも意見を交換した。 本トピック展(11月15日～12月23日開催)は、沖縄の浦添市美術館との共催で実施し(浦添市美術館は29年1月14日～2月19日開催)、全体の構成や作品選定については、浦添市美術館と綿密に連絡を取り、相互に連携協力した。また、琉球螺鈿の調査研究については、浦添市美術館の大きな協力を得た。 トピック展示(総出陳件数88件)では、制作地別の解説パネルや作品紹介キャプションを設置して、観覧者の理解を助けるよう努めたほか、作品写真および各個解説、展示概説「きらめきを愛でる、アジアの螺鈿」を掲載した図録を刊行した。			
			
出陳作品のうち「花鳥螺鈿合子」 (福岡市美術館)			
【備考】 調査実績：国内15か所 東京国立博物館、根津美術館、五島美術館、サントリー美術館、鎌倉国宝館、徳川美術館、大和文華館、奈良国立博物館、京都国立博物館、京都(個人)、白鶴美術館、福岡市美術館など。 調査作品点数：63件 川畑憲子 トピック展図録「きらめきで飾る-螺鈿の美をあつめて-」 概説「きらめきを愛でる、アジアの螺鈿」			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	浦添市美術館を中心に国内の博物館、美術館と緊密に連携をとり、アジアに広がる螺鈿の文様や技法の歴史的な変遷について調査研究を進めた。その成果をトピック展示に反映し、広く一般に発信することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画「(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究」に基づき、螺鈿に関する調査研究を進めて、その成果をトピック展示に反映し、広く一般に発信することができた。 今回の調査研究において得られた知見を今後の展覧事業・教育普及活動に反映させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ c. 日タイ間の文化交流に関する資料集成と統合的研究(科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 これまで知られてきた日タイ交流史料を新出の交易・文化交流資料から見直し、日本とタイの文化交流の実相を再構築することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長 原田あゆみ
【主な成果】 日タイ合同の研究会を開催し、統合的に研究を進めている。タイ現地調査は研究協力機関であるタイ王国文化省芸術局の研究者も参加・補佐し、情報を共有している。 (1) タイにおいては、交易ルート、具体的な交易品、出土・伝来資料、また交流に係る記録資料の調査を行った。交易ルートは、古代のマレー半島とタイ湾をめぐる交易路についてタイの研究者を交えて現地調査を行い、主要な港市の立地、社会的背景を確認した。出土・伝来資料としてはアユタヤーの仏塔に納められた金製品ほか、他国からもたらされた品物を具体的に示した。交流に係る記録としては、タイ近代資料（公文書館資料や王族の日記）に記された日本に関する記録を収集した。 (2) 日本においては、日本への伝来資料、記録資料の調査を行った。具体的にはタイ関係資料のうち日本国内で茶道具として使用されてきたもの、仏教僧の交流により日本に贈られたものなどである。 (3) 日本とタイに伝わる更紗の研究として、明治初期にタイから日本にもたらされた貝葉写本と包裂、江戸時代に日本に伝わった更紗裂帳、タイに伝わる更紗を比較調査した。この成果は、本科研のデータベースに反映されるだけでなく、大谷大学真宗総合研究所の調査研究事業にも有効に活用されている。			
			
大谷大学における 貝葉写本包裂の調査			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 発表等：原田あゆみ「日本に伝わるパリー語貝葉写本と包裂について」 日タイ間の文化交流に関する資料集成と統合的研究第3回研究会（10月29日 堺市博物館）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、収集してきたデータの整理と平行して、国内外の調査を進めた。本研究はタイ芸術局との信頼関係の下に進められ、情報公開や意見交換を行うなど相互補完的に研究成果を蓄積することができた。しかし、タイ以外で予定していた海外調査を実施することができなかった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。29年度が最終年度となるため、調査成果の整理を進めていく時期に来ているが、一部予定していた海外調査が実施できていない。29年度は年度前半に調査を終了させ、後半は報告書を作成予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ d. 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究 (科学研究費助成事業) ((4) -①-1))		
【事業概要】 これまで日本からの調査の手が十分に及んでいない在欧博物館等を中心に、日本仏教美術作品の悉皆調査を推進し、並行して新たな仏教美術作品の発掘も図る。調査で得た画像と情報をデジタル化し共有することによって、欧州における日本仏教美術研究の進展に寄与することも目指す。			
【担当部課】	九州国立博物館	【プロジェクト責任者】	館長 島谷弘幸
【主な成果】 (1) 下記の調査を行った。 <ul style="list-style-type: none"> 5月5日～8日、ギリシャ国立博物館にて、日本仏教美術作品（彫刻、工芸など）の調査及び撮影を行った。 7月6日～9日、フィンランド・ヘルシンキ国立博物館にて、館藏品データや今後の調査方法について担当学芸員と面談調査を行った。また、同じくフィンランド・ヨーエンスー芸術博物館にて、日本仏教美術関係作品（仏像、絵画など）の悉皆調査及び撮影を行うとともに、今後の調査方法について協議した。 11月17日～22日、ドイツ・DKM博物館、フォルクワング美術館、ハンブルク美術工芸博物館にて日本彫刻の調査及び撮影を行い、館長及び担当学芸員と今後の調査方法について協議をした。ユネスコ世界文化遺産フェルクリンガー・ヒュッテ製鉄所展覧会「大仏陀展」を視察し、一部について作品調査も行った。 29年3月6日～12日、ドイツ・ケルン東洋美術館及びスイス・ジュネーブ民俗学博物館にて日本美術作品（絵画、書跡など）の調査及び撮影を行った。 (2) 各機関での調査に際しては現地の学芸員と面談調査を行い、今後の調査研究にとって有意義な情報と人脈を得ることができた。また資料や図録等の収集なども積極的に行い、29年度以降の調査を円滑に進めるための準備を進めることができた。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目 現地調査回数 4回 調査作品件数 80件			



DKM美術館での調査（神像）

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の初年度である28年度は、これまで継続して行ってきた調査で、調査対象となっていた美術館・博物館ではほぼ予定通りに調査及び資料の収集を行うことができた。調査対象に含まれていなかった美術館・博物館でも、今後の調査実施に向けて情報収集及び交渉を行った。データベースの充実に向けて、各機関との協力関係を築き、ネットワークの形成を強固なものとしたことは意義深い。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> 29年度も調査対象とある日本仏教美術作品を所蔵する機関での調査を実施するとともにデータの蓄積をし、最終年度となる3年目には調査成果をデータベース化し公開することと報告書の作成を目指す。28年度は29年度以降の下地を作るべく情報収集を積極的に行うとともに、調査も順調に進展した。 各国の博物館・美術館との協力体制が構築できたが、調査受け入れ先である博物館・美術館の要望に合わせた研究分担者、研究協力者の日程調整が難しい点は課題である。各機関との交渉及び協議を重ね、より円滑な調査活動を行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ e. 極薄青銅器と響銅を対象にした製作技術の比較 ―東アジア金属工芸史の再構築― (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 戦国時代(紀元前5世紀)以降の中国で急速に普及していった、厚さ1mmに満たない青銅製容器「極薄青銅器」の製作技術について、3Dスキャン、蛍光X線元素分析装置など光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明する。また、南北朝時代(5世紀)以降に流行した轆轤挽きによる薄作りの青銅器「響銅」の製作技術との比較を通して、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を行う。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 川村佳男
【主な成果】 東京国立博物館、和泉市久保惣記念美術館や中国陝西省、江西省、広西壮族自治区などの博物館が所蔵する極薄青銅器および響銅の熟覧調査を行った。熟覧の結果、中国の唐時代に製作されたと考えられてきた響銅のなかに、日本の奈良時代製のものが含まれている可能性を認識することができた。東京国立博物館では熟覧調査のほか、元素別デジタルマッピング機能をもつ蛍光X線分析装置による計測も実施した。計測の結果、地金が青銅ではなく、銅であるものや、器物表面で検出された元素の一部が地金から析出した鏝ではなく、人為的に塗布された漆や顔料に由来する可能性をもつものが見出された。これらの結果は、国内外の学会やシンポジウムで発表した。 科学研究費の分担研究者の所属する東京藝術大学では、Cu(銅)・Si(錫)の比率を少しずつ変えながら铸造した各種サンプルに銚鏝による成形で響銅の一種・銅羅の製作実験を行い、どの比率で铸造したものが響銅に適しているのか検証した。			
 <p>中国で開催された国際シンポジウムでの発表</p>			
【備考】 科学研究費助成事業3年計画の1年目 調査回数：10回(うち海外での調査3回) 作品調査件数：約70件 学会発表回数：4回(うち2回は海外での発表) 撮影点数：約600カット			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である28年度は、国内外の多くの博物館などで予定していた極薄青銅器と響銅の幅広い調査を実施し、地域や時代を超えた共通要素がある一方、時代や地域による違いについても大まかな見通しを得ることができた。また、学会発表も所期していた回数で行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、28年度は熟覧を主体とする調査によって、極薄青銅器及び響銅の共通要素と時代差・地域差に関する初歩的な見通しを得ることができた。29年度以降は光学機器による解析や製作実験などによって、よりキメの細かい調査を実施し、これまでに得られた見通しの内容を検証する。最終的に、響銅が5・6世紀の中国ひいては東アジアに広く、且つ、迅速に普及したのは、戦国時代の紀元前5世紀以降につづいた極薄青銅器の製作技術に、響銅を受容する基盤としての役割が備わっていたからであることを明らかにしたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ f. 出土・在銘遺品を中心とした調査による明代彫漆器の基礎的研究（科学研究費助成事業）（(4)－①－1）		
【事業概要】 本研究は、世界各地に伝存する中国・明時代の彫漆器のうち、特に在銘・出土遺品の調査を通じてその様式や特質を明らかにし、いまだ判別の難しい明代彫漆器の制作地や編年を正しく捉えることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 川畑憲子
【主な成果】 28年度は、計画していた調査を進めて調査データを整理し、29年度の総括に向けて新たな検討課題について考察を進めることに努めた。 具体的には、27年度に続き、国内外に所蔵される明代彫漆器及び関連作品について、さらに広範囲に、作品調査を行った。 28年度、調査に訪れたおもな所蔵先は、東京国立博物館、静嘉堂文庫美術館、個人宅（東京）、個人宅（京都）などである。調査では、明代彫漆器を中心に文様技法や銘文に関する詳細な観察、記録、撮影を行ったが、明代のみならず、宋代、元代などの彫漆器も合わせて調査することができ、当初の計画よりも多くの貴重な作例データを集積することができた。さらには、調査データをもとに国内外の研究者と議論を交わし、研究を深めることができた。 また、文献資料をあらためて博捜し、他の遺物や他の出土事例とも合わせて検討し、彫漆器の制作地及び制作年代について、これまでの定説を再検討することができた。			
			
鳳鶴堆朱食籠（東京国立博物館）			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 調査回数：国内7ヶ所 収集資料数：漆器ほか約40点			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、計画通りに研究を進めることができ、29年度にあたる最終年度の総括に向けて、調査データを整理し、新たな検討課題について考察を進めることができた。具体的な成果としては、さまざまな官製銘を収集し、より詳細な編年の手がかりを得ることができたほか、日本で入れたと思われる作者銘や、評価に関する銘文も収集し、日本人が明代彫漆器の作者や制作地をいかに捉えていたか、具体的に知ることができたことは大きな成果であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究において掲げられた目的を達成することができた。 最終年度の29年度は総括に向けて、作品調査の成果を整理、検討をすすめ論文や発表などで成果を公表していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ g. 近世西南日本の地域産業と対外交流の研究(科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】	本研究は、「鎖国」制下における対外貿易と国内産業との関係について、その産業と貿易活動の関連が、産業が立地する地域に与えた社会・経済的影響について解明することを目的とする。		
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室研究員 一瀬 智
【主な成果】	<p>28年度は、計画していた基礎的な調査と史料収集を進めることができたほか、当館のトピック展示及び図録において、成果の一部を公開することができた。</p> <p>(1) 訪問した主な調査先は、国立公文書館、東京国立博物館、長崎歴史文化博物館、出島阿蘭陀商館跡、上ノ国館調査整備センター、松前町郷土資料館などである。調査では、肥前地域や天草地方における陶磁器・陶石生産や流通を研究する上で重要な情報を持つ歴史資料、江戸時代に実際に流通して各地にもたらされた陶磁器の伝世資料・出土資料について、29年度以降の研究に向けた基礎的なデータを収集することができた。</p> <p>(2) 9月14日～11月6日に開催したトピック展示「有田焼創業400年記念 古伊万里 旧家の暮らしを彩った器」では、展示及び図録において、江戸時代における伊万里焼の流通について紹介した。その展示構成や論考の組み立てにあたり、本研究を念頭に、輸入原料を用いるなど、対外交流と深く関わって生産された伊万里焼が、どのように日本列島各地に流通したのか、という観点から、それを物語る歴史資料を用いた展示を行った。</p>		
	 <p>調査風景 (上ノ国館調査センター)</p>  <p>トピック展示での展示風景</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の3年計画の1年目 調査回数：国内3ヵ所（東京・長崎・北海道） 調査点数：歴史資料・出土資料等 約30点 論文等：一瀬 智「江戸時代の海運と伊万里焼の流通」（トピック展示図録『有田焼創業400年記念 古伊万里 旧家の暮らしを彩った器』、9月14日） 展覧会への反映：1回（トピック展示「有田焼創業400年記念 古伊万里 旧家の暮らしを彩った器」）</p>		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である28年度は、概ね計画していた基礎的調査や史料収集を進めて、29年度以降の研究に向けたデータを収集できたほか、展覧会および図録において、研究成果の一部を公開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	28年度には肥前地域や天草地域における陶磁器・陶石生産と長崎貿易、またその国内流通について基礎データを収集できた。29年度には、幕府領天草の支配関係史料を中心に調査・収集を実施する。最終年度の30年度には、調査・収集・整理した史料から本研究の結論発表を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別展「平安の秘仏—滋賀・櫛野寺の大観音とみほとけたち」に関する調査研究 (4)－①－2))		
【事業概要】 特別展「平安の秘仏—滋賀・櫛野寺の大観音とみほとけたち」開催に向け、調査研究を行い、成果を展示に反映する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 丸山士郎
【主な成果】 (1) 調査概要 東京国立博物館で開催した特別展「平安の秘仏—滋賀・櫛野寺の大観音とみほとけたち」出品作品の美術史的、科学的（像の樹種調査、納入品のCT調査）調査を実施。 調査期間：4月13日～4月14日、6月6日～6月8日（於櫛野寺）、9月13日～29年1月9日（於東京国立博物館） (2) 調査の結果得られた知見・成果 櫛野寺本尊の十一面観音菩薩坐像は延暦11年(792)に最澄が延暦寺の建立に際して良材を求めて当地を訪れ、櫛の霊木を刻んで造られたと伝承されている。樹種調査によってヒノキ材であることが判明した。櫛野寺の仏像の多くはヒノキ材で、一部カヤ材であることも判明した。また本像の像内には木箱が収められているが、CT調査を実施し、中に靫と卷子が収められていることが分かった。その後、開封して納入物を確認した。			
			
【備考】 調査内容：美術史的調査、樹種調査20体、CT調査1件 論文：論文1、作品解説20、コラム3			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	未撮影作品の写真撮影や作品調査を実施し、その成果は図録や会場解説、講演会などに生かすことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	必ずしも著名とはいえない寺院であるが、計画を上回る来館者があった。また、そこに伝わる仏像の魅力をも十分に伝えることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b. 特別展「春日大社 千年の至宝」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「春日大社 千年の至宝」に関する調査研究			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 調査日・調査先：本展開催のため、下記の事前調査などを行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・5月11日 徳川美術館で出品予定の絵画、工芸作品の調査（土屋） ・5月26日 春日大社で出品予定の書跡、舞楽関係作品の調査（土屋、竹内、小山） ・5月29日 根津美術館で出品予定の絵画作品の調査（土屋） ・6月15日 京都国立博物館で出品予定の絵画作品の調査（土屋） ・6月16日 春日大社で出品予定の絵画、書跡作品の調査（土屋） ・7月19、20日 春日大社で出品予定の工芸作品の調査（猪熊） ・7月27日 大阪市立美術館で出品予定の絵画作品の調査（土屋） ・7月28日 春日大社で出品予定の絵画、書跡作品の調査（土屋） ・7月28日 名古屋市蓬左文庫で出品予定の書跡作品の調査（恵美） ・8月26日 陽明文庫で出品予定の絵画、書跡作品の調査（土屋、恵美） ・9月8、9日 春日大社で出品予定の刀剣、武器・武具作品の調査（酒井） ・10月4日 宮内庁書陵部で出品予定の書跡作品の調査（恵美） ・11月24日 春日大社及びその周辺で春日宮曼荼羅に描かれた景観に関するフィールド調査（土屋） (2) 調査の成果：上記の事前調査に基づき、下記の成果をあげることができた。 <ul style="list-style-type: none"> ・脆弱な材質でできている出品候補作品の安全な輸送、及び事前の採寸等による展示具の作成に関して、入念な準備をすることができた。 ・出品作品の細部表現などについて知見を深め、展覧会の図録解説等に反映することができた。 			
【備考】 28年度は13回の調査を行った。 これらの成果は文化財の安全な輸送、展示計画及び図録解説等に反映した。 <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトメンバー 竹内奈美子（登録室長）、恵美千鶴子（東京国立博物館百五十年史編纂室主任研究員）、酒井元樹（工芸室主任研究員）、小山弓弦葉（工芸室長）、猪熊兼樹（出版企画室主任研究員） 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	調査を行うことにより、出品候補作品に関する知見を深めることができた。その結果、脆弱な材質でできている出品候補作品の安全な輸送を実現することができた。また、採寸等により実際の展示に用いる展示具の事前準備を行うことができ、展示の際の効率化を図ることができた。また、画像等では確認できない細部の表現や箱書などを調査することで、色調・技法の詳細を確認できたことはもとより、作品解説の執筆に役立てることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	本展は春日大社所蔵品を核とした展覧会であるが、一方で春日信仰に関わる文化財は春日大社のみならず、全国の社寺、博物館、美術館に所蔵されている。これらを調査することで、春日に関わる広範な美術工芸品の出品がかなったことは特筆される。出品交渉、安全な輸送、展示によって培った所蔵者との信頼関係は、今後の特別展を含む当館事業の円滑な推進に利するものである。また、調査研究の成果は今後の総合文化展での展示解説等にも発展的に反映することができるものと考えられる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c. 特別展「茶の湯」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「茶の湯」に関する調査研究			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室主任研究員 三笠景子
【主な成果】 (1) 調査概要 日本国内収蔵の茶湯道具の名品について体系的、網羅的に調査した。調査先は下記の通り。 出光美術館、永青文庫、五島美術館、宮内庁三の丸尚蔵館、静嘉堂文庫美術館、泉屋博古館分館、常盤山文庫、根津美術館、前田育徳会、三井記念美術館（都内） 致道博物館（山形県）、鑿阿寺（栃木県）、MOA美術館（静岡県）、徳川美術館（愛知県）、岐阜県現代陶芸美術館（岐阜県）、 聖衆来迎寺（滋賀県）、北村美術館、京都国立博物館、茶道資料館、野村美術館（京都府）、和泉市久保惣記念美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、正木美術館、湯木美術館（大阪府）、 潁川美術館（兵庫県） 福岡市美術館、九州国立博物館（福岡県）、松井文庫（熊本県） 表千家不審菴、裏千家今日庵、武者小路千家官休庵 東京都内、愛知県内、岐阜市内、大阪市内、京都市内の個人宅 (2) 調査の結果得られた知見 調査作品のなかで、かつて昭和55年（1980）に東京国立博物館で開催された「茶の美術」展以降、所蔵先が変わるなどして行方のわからなくなった作品があることがわかった。その一方で、これまで展覧会では紹介されていない作品の存在も明らかになった。 (3) 調査研究の成果 作品の調査を通じ、絵画、墨跡、金工、陶磁、漆工の各分野の研究史をたどり、近年の研究成果を反映したうえで、展覧会の構成に取り組むことができた。			
【備考】 調査先 20か所、作品調査件数 約50件			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	およそ40年ぶりとなる特別展「茶の湯」について、全国の美術館、博物館及び個人所蔵者に協力を仰ぎ、およそ目標となる作品数の出品を承諾いただくに至った。個人所蔵作品には調査ができなかったものもあったが、実見できた作品については付属する資料や箱書きなど解説に反映し、これまで知られていなかった情報を展覧会図録にとり入れることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	日本文化の象徴としての茶の湯を通史で概観するための展覧会として、過去の展覧会や所蔵者からの情報を得て網羅的な調査を行い、それらの成果を展覧会図録に公開することができた。展覧会構成上、展示空間の制限上、網羅的に紹介できない部分については、展覧会会期中及び会期後に研究成果として具体的に取り上げ、今後論文や学会発表等で公開したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア d. 日タイ修好 130 周年記念特別展「タイ～仏の国の輝き～」に関する調査研究 ((4)－①－2))		
【事業概要】 29 年度に東京国立博物館及び九州国立博物館で開催する特別展「タイ ～仏の国の輝き～」の展示を充実するために関係機関・施設・遺跡等において調査を行い、出品作品の選定及び交渉を行った。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課出版企画室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 タイ国及び国内に所在するタイ美術作品の実見調査を実施した。調査地は下記のとおり。 タイ国 バンコク：バンコク国立博物館、王室御座船博物館、ナショナルギャラリー アユタヤ：チャオ・サン・プラヤ国立博物館、ラチャプラナ寺、マハタート寺、プラ・シー・サンペット寺、日本人町跡、ポルトガル人町跡、ロカヤスタ寺、王宮遺跡 国内 京都市：京都国立博物館、萬福寺、南禅寺金地院、妙法院 名古屋市：日泰寺 横浜市：三会寺 (2) 調査の結果得られた知見 日本とタイに存在する美術品の調査を行い、タイ族前史の古代国家、タイ国黎明期のスコータイ朝、国際貿易都市として栄えたアユタヤ朝、現王朝ラタナコーシン朝の仏教美術の優品を選定することができた。 (3) 調査研究の成果 日タイ修好 130 周年記念展に出陳する文化財を選定し、展示構成を作成した。 タイ国の歴史と各時代の特徴の理解を促す作品を選定することができた。			
			
バンコク国立博物館での調査			
【備考】 展覧会概要 会場会期 九州国立博物館：29 年 4 月 11 日（火）～6 月 4 日（日） 東京国立博物館：29 年 7 月 4 日（火）～8 月 27 日（日） 主催 九州国立博物館・福岡県、東京国立博物館、タイ王国文化省芸術局、日本経済新聞社、西日本新聞社、TVQ 九州放送			

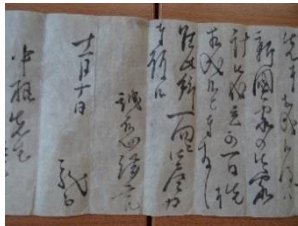
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	29年の日タイ修好130周年を念頭において、両国の文化財関係者の交流を活かした特別展を開催する準備に努めた。 ・タイ国から借用する作品については、タイ国の関係機関の協力を得て、タイ国各地の国立博物館や王室コレクションを中心とする名品を選定することができ、展示構成を充実する準備ができた。 ・国内機関が所蔵する日タイ交流史を示しうる作品や資料を、特別展に出品するための調査や交渉を行い、展示構成を充実する準備ができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	・日本とタイの文化財関係者の交流関係を活かし、29年の日タイ修好130周年を念頭においた特別展の準備ができた。29年度は同展の開催年に当たるので、これまでの準備を実現する努力を行う。 ・日本とタイの文化財関係者の交流関係を活かし、特別展「タイ ～仏の国の輝き～」の開催に合わせて、タイ文化や日タイ関係史を主題とする国際シンポジウムなどを開催する準備を行った。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別展覧会「没後 150 年 坂本龍馬」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 京都国立博物館の収蔵資料のうち注目度の高い坂本龍馬関係資料を中核にした特別展覧会「没後 150 年 坂本龍馬」(10月15日～11月27日)の開催準備のため、27年度に引き続いて坂本龍馬資料及びそれに関連する幕末維新資料の調査研究を行い、その成果を展覧会に反映させた。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室 宮川禎一
【主な成果】 (1) 27年度調査した高知県所在の坂本龍馬の北辰一刀流長刀兵法目録の比較資料として山形県庄内町の清河八郎記念館が所蔵する清河八郎宛の北辰一刀流兵法目録の実物調査を行い、その類似性から龍馬の免状の意義を確かめた。全国的に見て龍馬の目録の希少性が明らかとなったことは重要であり、江戸修行時代の龍馬の活動の実態を明らかにすることが出来た。 (2) 高知県立坂本龍馬記念館所蔵の「土佐藩京都藩邸資料」の一部を実際に調査して、池田屋騒動に巻き込まれた土佐藩足軽の野老山吾吉の供述調書が池田屋騒動の実態をよく示す貴重な資料であることを確認した。また同時に慶応二年正月の伏見奉行所が坂本龍馬を取り逃がした際に京都所司代にその様子を報告する書状二通の写しも調査し、坂本龍馬の伏見寺田屋での遭難事件を奉行所側からの視点で記した貴重な資料であることを確かめた。この二件を含む土佐藩邸資料についてはその一部を特別展覧会「没後 150 年 坂本龍馬」に出品することとした。 (3) 大阪府在住の個人所蔵品のうち幕末維新史に関わる瓦版錦絵等の絵画資料約 50 件の寄託を受けてその内容を調査した。それらはペリー来航から戊辰戦争までの内容を含み、幕末維新史を通観できる資料であることを確認して特別展覧会に出品することとした。 (4) 京都市東山区の霊明神社の調査中にパークス襲撃事件の際に林田貞堅が攻撃に使用した刃毀れの顕著な日本刀(銘兼元)を発見した。京都国立博物館には事件の際に応戦した中井弘の日本刀が収蔵されており、その作品と対比できる貴重な作品の発見となった。 (5) 坂本龍馬新出の書簡(慶応三年十一月十日付 中根雪江宛)の調査と内容の検討を行った(右の写真)。29年1月13日に高知県主催の記者発表においてその調査成果が公表されて大きな反響があった。			
			
坂本龍馬新出の書簡(部分)			
【備考】 ・5月に東京の江戸東京博物館において10月からの特別展覧会「没後 150 年 坂本龍馬」の記者発表を行った。特に27年度検討した刀銘吉行の調査成果が大きく取り上げられて全国的な話題になった。 ・(4)のパークス事件に関わった林田貞堅の刀と中井弘の刀については9月9日に京都国立博物館で記者発表を行い大きなニュースとして報道された。 ・特別展覧会「没後 150 年 坂本龍馬」(10月15日～11月27日)を読売新聞社と共催し、これまでの調査研究の成果を展示に反映させた。 ・特別展覧会「没後 150 年 坂本龍馬」図録を刊行(10月15日)し、調査研究の成果を公表した。			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	これまでの高知県所在の坂本龍馬の北辰一刀流長刀兵法目録の比較資料として山形県庄内町の清河八郎記念館が所蔵する清河八郎宛の北辰一刀流兵法目録の実物調査を行い、その類似性から龍馬の免状の意義を確かめた。全国的に見て龍馬の目録の希少性が明らかとなったことは重要であり、江戸修行時代の龍馬の活動の実態を明らかにすることが出来た。最新の龍馬研究・維新史研究の貴重な資料の掘り出しと検討が進んだ結果として特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」の展示内容や件数を充実させることができたこと、またこの期間に98,500人もの来館者を集めた。さらに来館者の満足度も高かった。展示期間中には天皇皇后両陛下の行幸啓があり、展示を親しく御覧いただいた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	中期計画における「京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究」を順調に達成した。高知県立坂本龍馬記念館所蔵の「土佐藩京都藩邸資料」の一部を実際に調査して、池田屋騒動に巻き込まれた土佐藩足軽の野老山吾吉の供述調書が池田屋騒動の実態をよく示す貴重な資料であることを確認し、また同時に慶応二年正月の伏見奉行所が坂本龍馬を取り逃がした際に京都所司代にその様子を報告する書状二通の写しも調査し、坂本龍馬の伏見寺田屋での遭難事件を奉行所側からの視点で記した貴重な資料であることを確かめた研究結果は特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」において充分反映されている。京都国立博物館の幕末史研究の意義が評価されていると考えられる。特別展覧会の開催で一応の終了を見るが、平成29年度においても京都市の要望で「大政奉還150年記念事業」の一環として幕末・維新史に関する小規模な展示を計画している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b. 特別展覧会「海北友松」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展覧会「海北友松」(29年4月11日～5月21日開催予定)に関する調査研究 平成29年4月11日～5月21日の開催予定である特別展覧会「海北友松」に関して、展覧会出陳予定作品の調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 山本英男
【主な成果】			
<p>(1) 関東・東北・近畿・中国地方の博物館・美術館及び社寺や個人が所蔵する「海北友松」展出陳作品の調査を行った(障壁画・屏風・掛幅・画卷その他)結果、展示作品リストについても確定させることができた。</p> <p>(2) アメリカ合衆国の美術館が所蔵する友松作品の調査を行い(サンフランシスコ・アジア美術館及びカンサスシティ・ネルソンアトキンズ美術館)、出品の許可を得た。前者の作品はこれまで友松筆としての認知を受けてこなかった初期作、後者は60年ぶりの初の里帰りとなる。</p> <p>(3) これまで未紹介の作品の発見「屏風画料請取状」等他4点ほどあり、出陳予定作品の中に加えることが出来た。その中には大作の屏風絵や、極めて希少な屏風絵の画料受取状なども含まれている。画料受取状については、妙心寺山内の文書調査課程で、妙心寺(京都)に宛てた友松自筆の書状「屏風画料請取状」が再発見された。この書状は、重要文化財に指定され、友松の最晩年の傑作として名高い三双の金碧屏風「花卉図屏風」「寒山拾得・三酔図屏風」「琴棋書画図屏風(妙心寺所蔵)」に関わる画料の請取状(受領書)である。寺社の日誌などには、当時の絵師が行った仕事への対価が記載されていることもあるが、この書状のように、落款印章を伴う絵師の自筆になるものは極めて少なく、同時代で現在するものはなく、絵師と寺の生々しいやりとりを示す貴重な資料である。</p>			
			
禅宗祖師図押絵貼屏風 調査風景			
【備考】 「海北友松」展図録にその成果を反映させる予定である。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	展覧会場のスペースを考慮した上で調査を開始したため、短い期間内に上質な作品から効率的な調査が出来た。画風比較や落款印章の検証などによって、基準となる作品を選択できた。基準となる作品の画風的な目安が出来たため、今後、作品の発見が期待される。友松については過去4度の回顧展が行われているが、調査の成果による作品の発見を反映して、代表作はもとより、希少な初期作や新発見の作品などを多数網羅した史上最大規模の回顧展を企画することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
A	中期計画に沿った調査研究を実施することができ、予定していた作品の出陳が叶った。加えて、新発見の作品が5点もあり、極めて充実した内容となった。作品のバリエーションも多彩であり、墨の気魄を漂わせる壮大なスケールの障壁画をはじめ、やまとえを思わせる金地濃彩の屏風絵、瀟洒な雰囲気をもつ水墨画なども含まれている。当館では、桃山時代の絵師の展覧会を19年以来行っており、展覧会によって画家の知名度が上がるため、今後、当館で友松作品を展示した場合、入館者の増加が期待される。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 生誕800年記念特別展「忍性―救済に捧げた生涯―」に関する調査研究 ((4)―①―2))		
【事業概要】 忍性展に関連する調査・研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長 吉澤 悟
【主な成果】			
<p>(1) 特別展「忍性」の準備において、忍性の活動に関わる遺品の所在調査を行った。忍性が前半生を過ごした奈良と、後半生の活躍舞台となった常陸および鎌倉において、それぞれ彫刻作品や文書資料、あるいは出土品などをリスト化し、それを元に特別展出陳作品を選定していった。結果、これまであまり知られていない文化財を多く展覧会で紹介することができた。</p> <p>さらに、この特別展に出陳した仏像等の新規撮影を行い、資料蓄積を推進した。同時に、特別展図録には、主要作品は多方向ないし新規カットの写真を掲載し、新たな作品評価につながる情報提示を行った。</p> <p>(2) 忍性の骨蔵器に関しては、X線撮影、蛍光X線分析等による調査を行い、さらに実測図作成、銘文判読等の基礎情報を獲得している。さらに調査を継続し、29年度以降に忍性墓関連資料の調査報告を作成する予定である。</p>			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> 調査・研究の成果を反映させた刊行物 吉澤悟「総論 生誕800年記念特別展『忍性―救済に捧げた生涯―』概観」(生誕800年記念特別展『忍性―救済に捧げた生涯―』総論、7月22日) 山口隆介「極楽寺忍性像及び叡尊像の造立背景に関する試論―忍性像の寿像の可能性をめぐって―」(生誕800年記念特別展『忍性―救済に捧げた生涯―』各論、7月22日) 伊藤久美「忍性の肖像画について」(生誕800年記念特別展『忍性―救済に捧げた生涯―』各論、7月22日) 谷口耕生「極楽寺忍性による東征伝絵巻の施入をめぐって」(生誕800年記念特別展『忍性―救済に捧げた生涯―』各論、7月22日) 調査・研究の成果を反映させた講演会、講座等 夏季講座(於:奈良県文化会館 国際ホール、8月17日～19日) 公開講座(於:奈良国立博物館講堂、8月6日、8月27日、9月10日) 本特別展の準備と併行して、奈良教育大学および奈良市教育委員会と連携して、小学校4、5年生を対象にした授業(郷土の偉人に関する学習)の教材開発の援助を行った。奈良市内の小学校教諭に対して忍性の事績や関連文化財を紹介する講座を行い、さらに展覧会用に作成した忍性の生涯を描いたアニメーションDVDを学校現場でも活用できるよう配布した。 			
			
忍性のアニメーション画像			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	特別展に関連して忍性や律宗ゆかりの仏像(大和郡山市西町自治会の文殊像、茨城県観音寺の如意輪観音像、鎌倉極楽寺の諸尊像など)や忍性骨蔵器(唐招提寺蔵、文化庁蔵、鎌倉極楽寺蔵)などの資料調査を実施し、その成果を展示や図録に反映することができた。また教育事業においても、奈良市内の小学校で忍性を授業教材に採り上げるなど、展覧会と学校教育の現場との有機的な繋がりを作ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	展覧会に関する調査研究を通じて、仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究を実施することができた。また教育事業においても、奈良市内の小学校で忍性を授業教材に採り上げるなど、展覧会と学校教育の現場との有機的な繋がりを作ることができたことは、今後の連携事業での波及的効果が期待される。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b. 特別展「第68回正倉院展」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「第68回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物についての調査・研究、展示環境についての研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の適切な輸送方法輸送など、多角的に研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水 健
【主な成果】 (1) 宝物についての調査・研究 ・展覧会の開催に先立ち、宮内庁正倉院事務所の協力により、宝物に関する正確かつ最新の情報を、宝物の閲覧（一部のみ）、宝物調書の閲覧、宝物の詳細な写真の提供などによって入手し、展覧会図録や会場の題箋、パネル等に反映させた。 ・正倉院、正倉院宝物についての研究成果を、展覧会図録所収の解説、小論文（「宝物寸描」）、3回の公開講座、及び学術シンポジウム等を通じて公表した。また新聞紙面等を通じて、研究員の日頃の研究成果を反映した最新の知見等をコラム、コメントのかたちで披瀝した。 ・研究員全員による宝物についての研究会を実施した。 ・作業の合間等に、宝物の実見に努めた。 (2) 展示環境についての調査・研究 ・文化財の適切な展示環境を考究するため、展覧会の会期中及び前後の詳細な温湿度データ、塵埃のデータを収集し、分析した。 ・文化財の展示環境についての検討会を、事前に宮内庁正倉院事務所とともに行い、また事後に実際の計測データの検証会を行った。 (3) 観覧環境についての調査・研究 ・観覧者の多数集まる展覧会における適切な観覧者への情報提供について考究するため、題箋やパネルの大きさ、設置位置、言語、情報の内容等について検討し、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。 ・作品の照明について外部専門家と意見を交換して、効果的な照明を会場にて試み、有識者の意見や、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。 ・観覧者の多数集まる展覧会における適切な動線の設定について考究するため、展示品やパネル等の配置、展示品への誘導方法について検討し、有識者の意見や、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。 ・文化財の安全かつ魅力的な展示についての検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。 (4) その他 ・文化財の安全な梱包・輸送のための検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。			
【備考】 ・宝物に関する事前調査 5回 ・内部研究会 2回 ・公開講座 3回 清水 健「正倉院の荘厳具——大幡に寄せて——」（11月5日）ほか ・正倉院学術シンポジウム 1回 ・出前授業（京都美術工芸大学） 1回 ・新聞連載（宝物紹介・読売新聞） 5回 ・『平成28年 正倉院展目録』（日・英） 奈良国立博物館 10月21日 日本語篇所収／内藤栄「聖武天皇の興—葬儀と一周忌齋会をめぐって—」、清水健「正倉院の大幡」ほか			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	正倉院展の開催を円滑かつ安全に遂行し、最新の成果を広く国民に周知するという事業計画に基づき、概ね順調に成果を上げている。従来の研究を踏まえ、最新の知見を加味した高度な内容の作品解説を、学芸部全体での検討を経て展覧会図録に掲載し、成果として公表した。また、小論文や講座、シンポジウムを通じて、最新の研究成果を公表した。一方、27年度より始まった宮内庁正倉院事務所との文化財の安全な梱包・輸送のための検討会、及び文化財の安全かつ魅力的な展示についての検討会は、一定の成果を収めており、今後一層の充実が望まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	今期については、主に宝物についての調査・研究、観覧環境についても調査・研究を重点項目とし、充実を図っていきたいと考えている。宝物に関する調査・研究は、日々更新される成果を踏まえて着実に前進しており、多くの画像やメディアを活用して、最新の成果を広く一般に伝えることが概ね達成された。また宝物の観覧環境等に関する研究も進展しており、以前のような観覧者の不満は年を追って低減している。今後は一層のデータ・情報の収集に努めるとともに、質の高い学術情報の普及を行っていききたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c. 特別展「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 29年開催の特別展「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」(会期:4月8日～6月4日)に出陳を予定している文化財、及び未出陳快慶作品について、基礎的な調査とともに高精細カラー画像及び赤外線透過画像の撮影を実施し、その成果を展示会場及び展覧会図録に反映すべく準備を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室員 山口隆介
【主な成果】			
<p>(1) 彫刻部門を中心に、奈良・東大寺、同・西方寺、京都・醍醐寺、同・清水寺、同・遣迎院、同・大報恩寺、同・松尾寺、同・金剛院、同・如意寺、京都国立博物館、滋賀・圓常寺、岡山・東壽院、栃木・真教寺にそれぞれ所蔵ないし寄託される快慶及び快慶派作品の調査撮影を実施した。</p> <p>(2) 彫刻部門を中心に、奈良・安倍文殊院、京都・大行寺、兵庫・浄土寺にそれぞれ所蔵される未出陳快慶作品の調査撮影を実施した。</p> <p>(3) 上記の彫刻作品の調査撮影を通じて、快慶作品の造形的特色や、截金・彩色文様のパターン及び技法に関する知見を得ることができた。</p> <p>(4) 書跡部門を中心に、神奈川県立金沢文庫、宮内庁書陵部、国立公文書館、長谷寺、前田育徳会尊経閣文庫において出陳予定の文書・聖教調査を実施した。</p> <p>(5) 快慶に関する基礎的データ(作品一覧・銘記・文献一覧・年表等)を展覧会図録に資料集として盛り込むべく、データの収集と整理を行った。</p>		 <p>展覧会にかかる事前調査と写真撮影 (29年1月17日 於 奈良・安倍文殊院)</p>	
【備考】 「快慶」展に出陳予定の文化財、及び未出陳快慶作品の基礎的調査及び写真撮影(20回実施) 特別展図録『快慶 日本人を魅了した仏のかたち』(29年4月8日刊行)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	特別展「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」に出陳予定の文化財の基礎的調査及び写真撮影を実施することができた。また、未出陳快慶作品についても可能な限り調査撮影を実施し、造形的な特徴や表面仕上げなど、快慶作品をめぐるさまざまな情報を蓄積することに努めた。これらを踏まえて、展示会場及び展覧会図録の充実を図るなど、展覧会開催に向けて着実に準備を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	特別展「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」の企画立案から実施に至るまでの過程における調査は、着実に調査研究を積み重ねている。とくに出陳を予定している文化財、及び未出陳快慶作品について、あらためて実査と高精細カラー画像の撮影を行ったことで、快慶作品の基礎的データの充実を図るとともに、今後の研究に有用な新しい知見を得ることができた。これらの成果を展示会場及び展覧会図録に反映させる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」に関する調査研究 ((4) -①-2))		
【事業概要】 沖ノ島出土金製指輪の技術的系譜の検証とその成果の公開事業			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	情報サービス室研究員 小嶋 篤
【主な成果】 4月17日～21日にかけて韓国・国立中央博物館、国立公州博物館、国立扶余博物館、国立全州博物館、国立慶州博物館にて資料調査を実施した。宗像・沖ノ島出土の金製指輪は国内に類例がなく、対岸の新羅を中心とした朝鮮半島南部の出土品との類似性が指摘されてきた。その一方で、古代の指輪に関する専論は少なく、東アジアを対象とした研究は皆無の状況にあった。このような研究状況をふまえ、本調査研究では朝鮮半島と日本列島の金属製指輪について網羅的に調査を実施した。28年度の成果について、展覧会図録『宗像・沖ノ島と大和朝廷』（共著）として上梓し、また同題の展覧会を開催した。			
			
韓国・国立公州博物館での調査風景		韓国・金鶴洞古墳群出土の銀製指輪	
【備考】 論文等：小嶋 篤 解説「古代の指輪」 図録『特別展 宗像・沖ノ島と大和朝廷』			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	古代東アジア諸国のうち、日本（倭国）と関係の深い百済と新羅の金属製指輪について、その地域性と技術的系譜を出土資料で示すことができた。また、その成果を展覧会および図録によって、広く公開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画における「有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究」に沿った調査を行うことができた。 日本と韓国の文化財所蔵機関の協力を経て、学術的な調査研究成果を「教科書よりもわかりやく」という視点から、特別展の展示内容や図録に反映することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b. 特別展「タイ～仏の国の輝き～」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 29年4月11日から開催予定の日タイ修好130周年特別展「タイ～仏の国の輝き～」の開催に向けた調査研究			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長 原田あゆみ
【主な成果】 特別展開催前年の28年度は、タイ王国芸術局の協力を得ながら、各地で作品調査を実施し、展示作品の選定、借用交渉を行い、ほぼ内諾を得ることができた。 主な成果としては以下のとおり。 (1) 王室第一級寺院ワット・スタットの大扉調査 26年度から住友財団の支援を受けて続けてきた大扉の修理が28年度に終了し、特別展出陳のための撮影、調査を行った。扉表には彫刻、裏には絵画がほどこされている。焼損以来57年間、保管状況の問題から絵画面は調査されることがなかったが、本展覧会への出陳が決まり、初めて調査が行われた。 (2) 大谷大学貝葉写本と包裂調査 展覧会のために大谷大学に伝わるパーリ語写本とその包裂を調査した。写本の筆写年代と包裂の時代はほぼ同時期であることが明らかになった。 (3) 作品撮影、輸送、展示のための調査 展覧会にかかる印刷物のための撮影、作品輸送のための調査を行った。タイ芸術局、タイ現地輸送業者、日本側輸送業者、日本側展示デザイナーと合同で調査を行い、撮影、輸送、展示方法について確認を行った。 (4) 教育普及活動にかかる調査 展覧会会場において、タイ文化をわかりやすく説明するために、教育普及活動を取り入れる工夫を行った。特にタイにおける仏教を理解していただくために、タイ芸術局の協力を得てタイ人の生活と仏教に関する取材調査を行った。			
【備考】28年度の調査：22回（海外5回、国内17回） （海外） 4月28日～5月8日：タイ・バンコク、南タイ調査 9月9日～9月12日：タイ・バンコク、スコタイ、ウートン、ナコーンパトム 11月13日～11月22日：タイ・バンコク、パトムターニー 12月20日～23日：バンコク、ウートン 29年1月14日～20日：バンコク、サムットプラカーン、プラチュアアップキリーカーン （国内） 6月7日：萬福寺 6月17日：横浜・三會寺 6月28日：相国寺承天閣美術館 7月26日：沖縄県立博物館・美術館 7月28日：古河市歴史博物館 8月30日：国立歴史民俗博物館 9月28日：京都国立博物館 9月29日：大谷大学 10月9日：静岡・浅間神社 10月29日、30日：堺市博物館 11月17日：林原美術館 11月18日：五島美術館 11月25日：杭全神社、堺市文化財調査事務所 12月7日：京都国立博物館 12月8日：大谷大学、平戸・松浦史料博物館			



バンコク国立博物館における作品撮影

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> 特別展開催のための調査は、バンコク国立博物館が収蔵する仏教美術や工芸品などを中心に、日タイ交流に関連した作品を予定通り行うことができた。本研究成果は特別展図録、展示、講演会にて公開を予定している。 本展覧会は日タイ修好130周年記念事業として開催されるもので、ほかの記念事業との連携が期待できる。そのための準備として、事業情報を積極的に関係諸機関へ発信した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に対する進捗状況はほぼ順調である。ただし、特別展開催が29年度はじめ（4月11日）であるため、直前の準備が年度末、年度初めとなるため、他事業との調整が必要となる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c. 特別展「世界遺産ラスコー展」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】	29年7月11日から開催予定の特別展「世界遺産ラスコー展」の開催に向けた調査研究		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長兼文化交流展室長 河野一隆
【主な成果】	<p>29年度夏季に当館で開催予定の特別展「世界遺産 ラスコー展」の準備のための調査研究として、インドネシア先史文化の原始絵画の現地調査と、28年にスタートした東京会場の視察を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア先史文化調査は、スマトラ島の南部にあるパセマ高原一帯に分布する装飾古墳と石造記念物を対象に行った。当地の先史時代の芸術は、世界的に見てもほとんど知られていない。しかしインドネシアでは、クロマニヨン人の描いたとされる旧石器時代最古期の洞窟壁画なども見つかっている。このため原始絵画の人類史的位置を探るうえで、最も注目される地域とされている。そこでラスコー洞窟との比較対象をする上で欠かせない地域と考え、科研費等を活用して現地調査を行った。また、当地は石人が装飾古墳と共に分布する点でも、九州に展開する石の文化を考える上で非常に重要な地域である。これらの成果は、「世界遺産 ラスコー展」のカタログに掲載した解説コラムや館内定例の研究会議、当館の研究紀要『東風西声』（29年3月発行）などを中心に公表した。 ・28年に東京・国立科学博物館で公開が始まった「世界遺産 ラスコー展」は、準備時と開会後に会場を視察し、準備における課題や造作の配列、観客動線の動き等について確認した。 ・また同展については、特別展「宗像・沖ノ島と大和朝廷」に来場する考古学ファン層への認知を高めるべく、共催メディアと共に先行ちらしを作成し、早い段階での周知につとめた。 		
			
	九州会場先行ちらし		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア・スマトラ島の装飾古墳については、世界的にもほとんど知られていない原始絵画を対象とした先駆的な調査・研究であり、先史時代の芸術の展開と人類史的な評価の上で欠くことのできない成果が得られた。調査地は南スマトラ・パセマ高原の、タンジュンアロ、レンバク、タラン・ティンギ、テグルワンギ、ティンギ・ハリ、ブルマイの6箇所で、期間は1週間であった。 ・東京会場の視察では、クレートの保管状況や搬入時の問題点を確認、プロジェクト推進上の問題点をデザイナーとも確認し、九州での円滑な準備ができるよう検討した。 ・河野一隆「インドネシア・南スマトラのパセマ高原における装飾古墳―登場と展開についての素描―」（『東風西声』第12号、29年3月） 		


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	開催年度の前年として、原始絵画の調査研究や巡回展の準備に大きな成果を挙げることができた。これにもとづいて、円滑に推進するための検討が始められたので、先行ちらしのリリースに繋がった。29年度以降も、28年度の成果を踏まえて、順調な事業推進につなげることが課題である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画のとおり、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を行った。内容が充実し、かつ魅力的な特別展を開催するための準備として、順調に推移している。29年度以降も、魅力的な展示を作り上げるために、調査研究と展示とを両立させつつ、開催に向けて準備を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア d. 特別展「新・桃山展－大航海時代の日本美術」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「新・桃山展－大航海時代の日本美術」に関する調査研究。 日本が初めて本格的にヨーロッパの文化に接触した、鉄砲伝来から鎖国の完成までの安土桃山時代を中心とする約一世紀を取り上げ、この時期の日本美術を文化交流の様相に注目した新視点から紹介することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 鷲頭 桂
【主な成果】 ・出陳交渉を進めるとともに、各所蔵者の協力を得ながら展示予定作品の現地調査を実施し、輸送計画及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。 ・計 37 機関で工芸（漆工・金工・染織・陶磁）、絵画、歴史資料の調査を行った。 ・各作品の状態・法量を把握し、主題や形状構造、材質や制作技法、文字情報などについて知見を得た。 ・本調査研究の成果は、展示、作品解説、カタログなどに反映させる計画である。 ・ポルトガル国内の 31 機関で工芸（陶磁・漆工・染織）、絵画の調査ならびに担当者の取材を行った。そのうちの 1 機関である東方基金（FUNDAÇÃO ORIENTE）からは本展に所蔵品の出陳の許可をいただき、協約書に関する協議を行った。			
			
調査作品の1つ 聖フランシスコ・ザビエル像（神戸市立博物館）			
【備考】 国内調査（17 機関） ・絵画調査：神戸市立博物館（4月11日）、東京・個人（4月20日）、聚光院（5月23日）、西涼寺（6月29日）、高知県立図書館（7月20日）、岡山県立博物館（7月21日）、岡山県立美術館（7月21日）、国立西洋美術館（7月22日）、日光東照宮（11月15日）、本妙寺（29年1月19日） ・工芸調査：京都国立博物館（6月28日）、壬生町立歴史民俗資料館（5月20日）、福岡市美術館（9月15日・11月9日） ・歴史資料調査：山口大学総合図書館（5月18日）、大分県立先哲史料館（5月20日）、大分市歴史資料館（5月31日）、熊本市立熊本博物館（29年1月13日） 海外調査（31 機関） ・総合調査：ポルトガル（10月11日～11月9日）東方基金、リスボン国立古美術美術館ほか			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	作品の調査により、出陳作品の精査及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。準備作業も予定通り進んでおり、29年度の作業計画策定に向けての準備も順調である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画にもとづき本調査研究を遂行した。その知見を展示に反映できるよう作品調査を精力的に行い、その成果を輸送・展示作業の安全性を高めることにも活かしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館環境デザインに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・正門プラザのチケットカウンターを刷新、より機能的な什器を新規購入・設置するとともに、「すべてのお客様への顔である」べき正門プラザの整備及び清掃等整美のあり方について、関係部署と検討・調整を行った。 ・法隆寺宝物館のサイン、什器等について、設計者である谷口建築設計研究所と協議の上、整備を行った。また、法隆寺宝物館におけるサイン・備品の仕様を、他の館内サイン(本館・平成館・東洋館など)とも整合するよう検討を進めている。 ・館内に乱立している内作立て看板に関して、環境整備委員会等での指摘等を受け、デザイン室においてテンプレートを作成・標準化を進めている。 ・館内サインの多言語化(日英中韓)を推進した。(画像は黒門の解説サイン) 			
			
刷新したチケットカウンター	立て看板のデザイン標準化	黒門の解説サイン多言語対応	
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例・環境デザインを調査し、特に28年度においては正門プラザ・本館・平成館エントランスホールの改修のための参考とした。 ・調査先／台湾：国立故宮博物院南部院区・国立臺灣文學館・奇美美術館・高雄市立博物館、国内：国宝 迎賓館・根津美術館・南相馬市博物館・いいたてミュージアム・武蔵野美術大学美術館・平等院ミュージアム鳳翔館(宇治)・那覇市立壺屋焼物博物館・トヨタ博物館・森美術館、春日大社国宝殿、東大寺ミュージアム等 			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	所期の目標を達成している。サインの最新事例を調査し、好例をサイン・環境デザイン、情報提供・サインデザインの改修の参考とした。また、関連各部署との連携で館内表示の標準化を進めている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	所期の目標を達成している。引き続き29年度計画への反映し、国際化対応への推進が期待される。中期計画初年度は、お客様への効率のかつより意味の伝わる情報提供のあり方(サイン、サイネージ)について、公共空間・商業空間についての最新事例を行うとともに、来る本館リニューアルへ向けた、デザインシステムの具体的な方法論を検討・実験を行った。次年度は初年度の検討結果に基づき、より実践的なサイン・プランニングを進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館教育に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論と実践に関する調査研究を、教育普及事業の実践、参加者に対するアンケート、学校教員との研究会を通して行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 小林牧
【主な成果】 1) 本館地下、19室「みどりのライオン」及び東洋館2室、6室「オアシス」におけるアクティビティやワークショップ、並びにスクールプログラムの運営を通して、さまざまな来館者のニーズに沿ったプログラムの開発とより効果的な運営に関する研究を行い、多様なユーザーに向けたプログラムを開発、展開することができた。また、それらの運営とアンケート調査によって、さらに知見と考察が深まった。 2) 他館との連携による教育プログラムの調査・研究を継続して行い、上野動物園、国立科学博物館との連携事業「トラめぐり」並びに関連展示、親と子のギャラリー「あつまれ！トラのなかまたち」を実施した。 3) 触れる展示、ハンズオン企画の調査・研究を行い、考古展示室における土偶、銅鐸、埴輪、古銭のハンズオン展示を継続して行い、親と子のギャラリー「美術のうら側探検隊」においてハンドライト等のツールを用いた鑑賞の提案を行い、土偶に関しては新たにみみずく形土偶のレプリカを制作し運用を開始した。 4) 全国高等学校美術工芸教育研究会の教員を対象とした研修において、博物館における鑑賞教育のあり方について意見交換を行った。 5) 小・中・高等学校の教員を対象とした研修において、博物館における教育プログラムを立案する研究会を実施し、意見と情報の交換を行った。 6) 障がい者に向けたプログラムの開発を目指した調査・研究を継続して行い、特に聴覚障がい者に向けてのヒアリンググループや、UDトーク（音声認識ソフトによるコミュニケーション支援・会話の見える化アプリ）の設備設置を行った。 7) ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行った。			
【備考】 調査：ワークショップ等における参加者アンケート調査、教員研修会 アンケート調査 3回 成果物：考古展示室ハンズオン展示 みみずく形土偶（29年3月に制作）			



みみずく土偶のハンズオン

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>レクチャーから体験型プログラムまで、幅広い教育事業の実践や、ボランティア組織の運営を通じて、博物館教育についての研究を行うことができた。その結果、「トーハクキッズデー」、ワークショップ「篆刻体験 自分だけの印をつくろう！」など新規のものを含めた多様なプログラムの開発と運用を行うことができた。</p> <p>また、より幅広い来館者の支援を目指して、聴覚障がい者の教育プログラムへのアクセスを可能にするための機器についての調査を行い、29年3月には講演会やギャラリートーク会場への機器の設置ができた。29年度はこれらの機器の運用を開始したい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>中期計画期間では、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援についての取り組みを目指している。28年度はキッズデーにおける未就学児を対象とした施策や、聴覚障がい者を対象とした施策など、新たな取り組みができた。次年度以降はこの方向を継続しつつ、訪日外国人をその対象として位置付けるなど、各プログラムの充実と一層の拡充に向けての調査・研究を継続したい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 凸版印刷と共同で実施する、ミュージアムシアターでの公開に向けた調査研究 ((4)－①－3))		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 井上洋一
【主な成果】 28年度は既制作の素材を活用して、当館研究員の監修により「安土城から檜図、そして二条城へ」「江戸城の天守」の二つのコンテンツを作成、公開した。 (1) 調査概要 凸版印刷が作成した2つのコンテンツ案について、当館研究員が内容の正確性や、映像表現の当否について確認を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 既存の安土城の映像表現の根拠となる史料は、必ずしも十分な信頼性があるものではないため、当館公開に際しては、映像表現を修正した。 (3) 調査研究の成果 下記2件のコンテンツを当館ミュージアムシアターで公開した。 9月28日～12月23日「安土城から檜図、そして二条城へ」 29年1月4日～3月31日「江戸城の天守」			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
C	28年度は、作品の管理、利用状況と研究員のスケジュールとの調整が困難であったため、新規のデータ取得に至らなかった。29年度以降、ミュージアムシアターの事業展開と併せて、研究方針、対象作品等の見直しを行う。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
C	情報技術の進歩、対象作品の選択の難度などの条件により、既存の枠組みでの調査研究は見直しが必要であり、提携先の凸版印刷、館内担当部署と協議を行い、29年度に方向性の成案を得る。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英2ヶ国語による鑑賞支援アプリケーション「トーハクナビ」のユーザー動向解析を用いたより豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究、児童生徒のための鑑賞支援アプリケーション「学校版 トーハクナビ」の活用・改善に関わる調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 小林牧
【主な成果】 1) スマートフォンによる公式ガイドアプリ「トーハクナビ」(日英2ヶ国語対応)を継続して配信した。 2) 27年4月より継続して「トーハクナビ」のユーザーログを集積・解析し、来館者の鑑賞体験を深めるための情報と発信方法、的確なシステムのあり方について、調査・研究を行い、報告書を作成した。 3) 29年1月より来館者のアクセスの可能性を広げるために、「トーハクナビ」をインストールした端末の貸し出しサービスを開始した。 4) 学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として、タブレット端末によるスマートフォンアプリ「学校版トーハクナビ」(中学生・高校生対象)の運用を6月から開始した。運用開始に際して、生徒・教員向けの体験会と観察調査、ユーザーログの集積、アンケートの実施など、生徒の鑑賞体験を深めるためのよりよいプログラム開発に向けた調査を行った。 5) 29年3月11日、12日に、博物館における鑑賞体験を深めるためのICTを利用したプログラム開発に向けて、新しい視座とアイデアの創出を目的とした「トーハク×アイデアソン」を「訪日外国人の記憶に残る日本文化体験とは」をテーマに開催した。			
			
		アイデアソン開催風景 左：グループワーク 右：審査員による講評とトークショー	
【備考】 1) 「トーハクナビ」ユーザーログの集積 27年4月～ 継続中 2) 「学校版トーハクナビ」ユーザーログの集積 6月～ 継続中 3) 報告書「「トーハクナビ」利用者の動向」29年3月作成 4月にインターネットで公開予定 4) 報告書「トーハク×アイデアソン」(29年3月11日、12日開催) 4月にインターネットで公開予定			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	アプリ「トーハクナビ」によるサービスを提供しつつ、ユーザーの動向についてのデータを集積することができた。また、アイデアソンにおける企画募集や討論を通じて、外国人来館者のニーズやを探り、ICTのトレンドを探ること、新しい視座を提供することもできた。 「学校版トーハクナビ」では運用を開始することができた。それに伴い、生徒たちの使用状況の観察やログの集積により、よりよいプログラムに向けての情報収集と改善を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	31年度に予定されている本館リニューアルを目的に、またオリンピック開催にむけて、主に訪日外国人を対象とした鑑賞支援プログラムの充実を目指しているが、今年度はそのための情報集積と、課題の掘り起こしができた。また、学校教育の現場でICT利用への関心が高まるなか、ICTによる鑑賞支援プログラムの提供をいち早く実践することができた。次年度はプログラムの運用を通して、よりよいプログラムへと発展させるための検討を具体的に進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	a. ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究；新来館者の定着に向けた実証的調査分析（科学研究費助成事業）（(4)－①－3）		
【事業概要】 本研究は、ミュージアムにおける「鑑賞者開発（Audience Development）」の実証的な研究である。鑑賞者開発は、芸術団体と人々の関係強化を目指した考え方で、英国を中心に研究・導入されているが、ミュージアムにおける実証研究はまだまだ発展途上にある。そこでプロジェクト責任者は、インターネットやモニタリング調査、海外比較等をもとに我が国ミュージアムにおける鑑賞者開発のモデルを構築し、それを実際のミュージアム事業と連動させることにより、ミュージアムにおける鑑賞者開発の先駆的な実証研究になりうると考え、本研究を計画した。研究を通して我が国ミュージアムに最適な鑑賞者開発の在り方を明らかにし、将来的にはミュージアムへの多様化するニーズを満たし、ミュージアムの社会的価値を増進することにつなげていきたい。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	総務部総務課渉外開発担当係長 関谷 泰弘
【主な成果】 (1) インターネット調査の実施 (2) 来館者調査の実施 (3) 鑑賞者開発イベントと調査の実施 (4) 27年度調査結果をもとに論文発表 (5) 国際学会における口頭発表			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の最終年度 (1) 1都3県の828人にインターネット調査を実施（12月13日）。ミュージアムとの関係性から5分類した人々の、ミュージアムへの参加動機、意識、日常の行動等を調査した。結果は(2)とあわせて、29年度以降に学会等で発表予定。 (2) 一般の東京国立博物館への来館者調査を実施し、180人から回答を得た（2月1,5日実施）。この結果を(1)インターネット調査及び、(3)「博物館で野外シネマ」参加者データと比較分析し、29年度以降に学会等で発表する予定。 (3) 「博物館で野外シネマ」への参加者202人にアンケート調査を実施（10月14,15日）。 (4) 英米との比較による我が国ミュージアムにおける来館者開発の導入に向けた基礎研究，関谷泰弘，日本ミュージアム・マネジメント学会紀要，21号（ページ未定），2017年（査読済）. (5) How can local cultural institutions be united? A case study on the Ueno Passport as a tool for local cultural connection, Yasuhiro Sekiya, ICOM-MPR 2016, Milano Conference, 2016.（7月5日）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の最終年度である28年度は、当初予定通り、インターネット調査と東京国立博物館における来館者調査を実施し、さらに27年度に実施した調査に基づいた研究発表を行った。また、26年度、27年度に引き続き、研究に関する事業の国際学会における口頭発表も行い、継続的な国際発信も続けている。27年度は調査分析が予定通り進まなかったためC判定としたが、28年度で遅れた分を取り戻し、当初予定通り事業を実施できたため、B判定とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。1年目に鑑賞者開発プログラムの企画・実施及びその実証調査を実施、2年目にその結果の発表及び英米におけるインタビュー調査を実施。最終年度である28年度には、27年度の調査結果を論文の形でまとめるとともに、インターネット調査及び来館者調査を実施し、今後の分析につなげている。当初の研究計画通り研究を終了できたため、B判定とした。今後は、29年度から科学研究費助成事業による海外共同研究の実施が決定したため、この研究結果を発表するとともに、海外の事例を調査研究し、日本との比較を踏まえて、実際のミュージアムにおける事業の実施から、さらなる研究に結び付けていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b. 藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-3)(研究代表者: 奈良県立橿原考古学研究所 今尾文昭)		
【事業概要】 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する藤ノ木古墳出土品をはじめ11件(3,000点以上)の国宝等指定文化財を対象に、照度・大気・振動・温湿度等の展示・収蔵環境の調査と非接触高精度三次元形状計測及び透過X線撮影検査による微細物理的検査との相関性について研究し、適正保管・管理・公開を促進するための計画の指針(試案)を検討する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室主任研究員 品川欣也
【主な成果】 (1) 調査 東京国立博物館にて縄文土器、経筒などの三次元形状計測やX線CT撮影を行った。三次元計測を行ったデータの解析処理を行い、また新たな公開方法について検討を行った。 (2) 調査の結果得られた知見・発見など 作品の高精度な三次元計測データが得られ、今後の適正保管・管理・公開を促進するための基礎データとすることができた。 (3) 調査・研究の成果 29年度の図版目録「東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇(西日本)」などに計測データを解析して得られた画像データを使用予定。			
			
三次元計測機を用いた計測風景			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の4年目 ・三次元計測作業9日間、X線CT撮影作業3日間(計8件、国宝2件、重要文化財2件を含む) ・調査回数2回			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の最終年度である28年度も、引き続き本研究課題の対象資料(藤ノ木古墳出土品)の比較検討資料として、基礎的なデータの集積を行い、年度計画における文化財を活用した効果的な展示に関する調査を、達成することが出来た。この成果として、計測データを解析して得られた画像データを、図版目録「東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇(西日本)」に掲載予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施することができた。とくに本研究課題は新しい計測機器及び方法(非接触高精度三次元形状計測及び透過X線撮影検査)を用い、文化財の適正保管・管理・公開を促進するための基礎資料が構築できた。 本研究で得られた知見は、共同研究(三次元計測並びにX線CT計測データを活用した考古資料の新たな展示方法の開発 十日町市博物館、大塚オーミ陶業)の開始につながった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア ボランティアによる、ハンズオン教材等を活用した展示作品理解のための事業に関する調査研究(科学研究費助成事業)((4)-①-3))		
【事業概要】 本研究では、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行う。具体的には、京都国立博物館において26年9月にスタートした「京博ナビゲーター」の活動を対象とする。ミュージアム・カートやワークショップにおいて、来館者の主体的な興味・関心を引き出すためには、どのような手法や教材がもっとも有用かを検討、実践し、最終的にはその成果を普遍化して他の教育普及活動にも応用できるようにすることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員 水谷亜希
【主な成果】			
<p>(1) 27年から継続して151人が京博ナビゲーターとして登録、それぞれ月に1回以上来館し、館内で活動を行った。通常時の活動では、ナビゲーターはミュージアム・カートに設置されたハンズ・オン教材を用いて来館者と交流した。</p> <p>(2) 「三角縁神獣鏡(復元 casting)」と「玉眼模型(如来)」の2件を新たな教材としてミュージアム・カートに追加し、ナビゲーターへの研修を4回行った。</p> <p>(3) 特別展に関連したワークショップ、「くじ」で出会う禅の言葉」と「龍馬さんからお手紙です!」を開館日の毎日実施した。関連して研修会を4回行った。</p> <p>(4) ナビゲーター同士がウェブ上で交流できるポータルサイトの運用を開始した。</p> <p>(5) ミュージアム・カートやワークショップは、子どもだけでなく、大人や近年増加している海外の旅行者にも好評である。</p> <p>(6) ミュージアム・カートや京博ナビゲーターを含む教育普及活動について、海外からの視察があった(国立扶餘博物館(韓国)、国立中央博物館(韓国)、サンフランシスコ・アジア美術館(アメリカ))</p> <p>(7) 活動中の見守りは教育室スタッフが中心となって行っているが、土日祝日は目が届きにくく、ボランティアとの意思疎通に影響が出ているため、限られた人員でどのように運営を継続するかが27年度からの課題となっている。</p> <p>(8) 他館への調査(琵琶湖博物館ほか)、研究会への参加(全国美術館会議 教育普及研究部会ほか)を8件行った</p>			
 <p style="text-align: center;">禅の言葉</p>			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の1年目 ・ナビゲーター登録: 151人 ・ミュージアム・カート活動日数: 197日 ・カートに設置したハンズ・オン教材: 16件(うち新規2件) ・ワークショップ「くじ」で出会う禅の言葉: 36日 11,547人 ・ワークショップ「龍馬さんからお手紙です!»: 38日 8,725人 ・ナビゲーターに向けた研修会: 14回 ・感謝会: 1回 ・外部視察受け入れ: 3件 ・他館調査8件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の初年度である28年度は、27年度までの事業を継続しつつ、教材2件の追加と研修、特別展に関連したワークショップの実施と研修、ポータルサイトの運用開始など、新しい活動に取り組んだ。また他館の活動調査や研究会等に参加し、自館の活動を客観的に分析するための地盤作りを行った。さらに、29年度のナビゲーター2期生募集に備え、これまでの活動の振り返りと改善点の洗い出しを行った。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。科学研究費助成事業4年計画では、現状の分析や実践方法の改良を行い、最終的には口頭発表や論文等で成果を広く公表することを目指している。28年度は、新たな取り組みや、分析のための地盤作りを行うことができた。29年度はナビゲーター2期生の募集・活動開始の年にあたるため、メンバーの入れ替わりに伴う影響も考慮した上で、活動の継続と分析・改良を行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 本事業は、高精細デジタル複製を学校に持ち込んで訪問授業を行い、子ども達が文化財に親しむきっかけを作る活動である。京都国立博物館は21年に訪問授業を開始し、26年にはNPO法人京都文化協会・京都市教育委員会と共に「文化財に親しむ授業実行委員会」を立ちあげた。訪問授業で講師をつとめるのは大学生ボランティアの「文化財ソムリエ」であり、子ども達が学ぶだけでなく、実践を通じた大学生の学びの場としても機能している。本事業は、複製を軸として博物館、教員、大学生が交流することで互いに学び合い、新たな活動領域や価値観を獲得する試みである。その成果は訪問授業や教員への情報提供に反映するほか、論文、研究発表等で公開することを目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員 水谷亜希
【主な成果】 (1)文化財ソムリエ7期生7名を新たに採用し、計17名が活動した。28年度は20回のスクーリングを博物館にて実施、絵画担当の研究員が勉強会を行ったほか、教育室研究員の助言のもと、文化財ソムリエが授業の進め方、内容を検討した。8月には学校教員との交流会を行い意見交換を行うとともに、過去の授業例の紹介や複製の取り扱いレクチャーを行った。以上の訪問授業に関わる活動のほか、こどもひかりプロジェクトが主催する東北地方での活動に参加、11月には京都にこどもひかりユース(大学生ボランティア)を招き、互いの活動紹介や意見交換を行った。 (2)スクーリングでは、文化財ソムリエが主体的に考え、行動できるよう議論を促した。また絵画担当研究員が作品解説を行うことで、専門性の高い内容を学んだ上で、授業内容を検討することができた。28年度は、26年度に作成した雪舟筆「天橋立図」の複製を用いたプログラムを新たに開発した。教員との交流会では、学校教育と博物館教育の違いを再認識するとともに、互いのスキルを活かす方法について有意義な意見交換を行うことができた。また、こどもひかりプロジェクトへの参加は、他地域の大学生や他分野の博物館職員との交流の場となり、文化財ソムリエのモチベーションを大いに高める効果があった。 (3)スクーリングでの準備に基づき、京都市内への訪問授業7回を行った。また、交流会に出席した教員や他館職員による複製を活用した授業が6回実施された(京都市内3件、大阪府泉南市1件、京都府福知山市1件、三重県四日市市1件)。若冲生誕300年を記念して京都市で行われた「第32回京都市中学校総合文化祭 若冲創造展」の会場では、文化財ソムリエによる「おしゃべり鑑賞会」を実施した。 (4)複製を使った活動や鑑賞教育に関して、他館の調査3件(醍醐寺宝物館と醍醐中学校の連携授業)を行った。さらに、これまでの成果をふまえて論文1件を執筆した。			
【備考】 ・文化財ソムリエ：17人 ・スクーリング：20回 ・教員との交流会：1回24人 ・こどもひかりユースとの交流会：1回22人 ・訪問授業：7回931人(小学校2回、中学校5回) ・教員・他館職員による授業6回486人 ・おしゃべり鑑賞会：1回58人 ・こどもひかりプロジェクトの体験イベント：4回925人 ・新聞取材：「サミットを想像し鑑賞 四日市高生 光琳の複製屏風」(中日新聞12月23日) ・他館調査：3件 ・助成金：平成28年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業 3,810,000円 ・論文：「文化財複製を活用した大学生による訪問授業の実践 京都国立博物館 文化財ソムリエ」『学叢』38号、京都国立博物館、5月			

文化財ソムリエによる
訪問授業

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本活動はノウハウの蓄積や文化財ソムリエの成長に伴い、年々内容が深まっている。28年度はあらたな複製(天橋立図)を用いたプログラムも開発することができた。また交流会をもとに教員や他館職員による授業・プログラムが実施されたことで、訪問授業に加えて486人もの生徒に学習の機会を提供することができた。28年度は京都市内だけでなく、近隣他府県でも活動を展開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	21年度より開始した高精細複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究は、これまでの活動の蓄積を生かし、年々内容を深めると共に活動も多様になっており、外部との協力・交流も広がりを見せている。28年度はその内容の更新・拡大と現中期期間において、調査研究の成果を生かした新たな取り組みを実行することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 3Dプリンター等を用いた教育プログラムに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 京都国立博物館で所有するCTスキャナ、3Dデジタイザ、3Dプリンタ等の科学調査機器を活用し、展覧事業・教育普及活動等を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 宮川禎一 教育室長 山川暁
【主な成果】			
<p>(1)「根来塗と鎌倉彫」(名品ギャラリー,6月14日-7月24日)の展示にあわせ、鎌倉彫風の外観を持つ「屈輪文堆彩漆大香合」(当館寄託)のX線CT調査を行った。調査結果、本資料の屈輪文様は、木を彫り出して造形する鎌倉彫ではなく、木胎に別の素材で屈輪文様を造形したものであることが判明した。展示室では実資料と並べて、調査の結果をA3パネルで掲示し、漆工芸の材料や技法の理解に役立てることができた。</p>		 <p>屈輪文堆彩漆大香合の X線CT画像(部分)</p>	
<p>(2)27年度作成した「三角縁神獸鏡(復元鑄造)」を館内の「ミュージアム・カート」に設置し、京博ナビゲーター(ボランティア)と対話しながら、来館者が自由にさわれるようにした。復元鑄造は、制作された当時の色や輝き、重さを体験できるため来館者に大変好評だった。この復元鑄造は、3Dデジタイザで計測したデータを元に3Dプリンタで樹脂複製を作成、その樹脂複製から型取りを行い、原本と同じ原料で鑄造したものである。原本は「三角縁複波文帯三神三獸鏡」(重要文化財、愛知県犬山市 東之宮古墳出土、京都国立博物館蔵)、復元鑄造は芦屋釜の里(福岡県)八木孝弘氏に依頼した。3Dデジタイザと3Dプリンタを利用することで、原本を安全な状態に保ったまま復元鑄造を制作することができた。</p>		 <p>三角縁神獸鏡 (復元鑄造)</p>	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学調査機器を活用して三角縁神獸鏡の複製を作成してハンズオン教材として活用したり、漆工作品についての調査結果を紹介するパネルを展示室に掲示することで、現物の展示だけでは分からない文化財の側面について、来館者に伝えることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画期間に、館で所有する科学調査機器を活用し、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施することを目標とする。本年度は、複製の制作やパネルによる研究成果の紹介だけでなく、他館からの見学も受け入れ、今後の活用・展開について意見を交わすことができた。今後は本年度の成果をふまえ、このほかの文化財に関する調査と成果の発表、他機関との協力を行っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 4月29日のなら仏像館リニューアルオープンに合わせて世界遺産学習の実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大し、なら仏像館(当館旧本館)が奈良の文化財の保存・公開に果たしてきた歴史的役割を積極的に伝える方向でプログラムの内容を一新した。 (2) 奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESDコンソーシアム文化遺産教育ワーキンググループを立ち上げ、博物館施設を活用して地域社会への関心を高めるための方策について協議を重ねた。 (3) 同ワーキングで提言された展示と密接に関連するクラフト教材活用及びワークショップの実践として、信貴山縁起絵巻展関連の親子イベント「空とぶ鉢のおはなし絵巻をつくろう！」(4月30日)、忍性展関連の親子イベント「きく！みる！ふれる！東征伝絵巻」(7月31日)を開催し、合計163名の小学生の親子が塗り絵巻の製作や複製絵巻に直に触れるという体験を通じて、絵巻物の仕組みへの理解を深めた。			
			
「空とぶ鉢のおはなし絵巻をつくろう！」実施風景			
【備考】 ・「世界遺産学習」等に来校した学校団体49校(奈良市世界遺産学習25校、学校プログラム24校)			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	「世界遺産学習」を中心とした子供向けの「語りかけ」を検討・実践することで、他の観光案内にはない博物館のオリジナリティを持たせることが出来た。さらに「世界遺産学習」を中心とした子供向けの教育・普及活動の充実により、ボランティアガイドの育成・充実にも貢献し、来館者向け解説サービスの向上にも繋がっている。「世界遺産学習」は、内容を随時検証し、より正確で分かりやすい内容を継続的に検討していくことによって、その継続性と質の確保に努めている。学芸部職員による研修や勉強会を通じて、内容の修正を行い、正確性を確保した。なら仏像館リニューアルオープンに合わせて「世界遺産学習」の実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大し、ESD(持続的開発のため教育)ワーキングあるいは職員とボランティアの間で情報の検討を通じてプログラムの見直しを行った結果、「世界遺産学習」の精度が向上し、来校する学数も所期の目標に達している。この数値を維持するためにも今後とも検討を重ねていく必要があり、それらの成果来館者サービスの向上につながるものとする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	歴史、伝統文化の教育事業として継続的に行ってきた「世界遺産学習」は一定の成果を上げている。29年度は、「世界遺産学習」をユネスコが提唱するESD(持続的開発のため教育)一環としての位置づけをより明確にするための方法論確立に向けて協議を進めるとともに、教育機関との連携により親子プログラムを充実させるなどより一層の質的向上を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア NHKと共同で実施する高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターでの映像公開に向けた調査研究(4)①-3)		
【事業概要】 テレビの世界ではフルハイジョンが主流だが、その4倍の画素数の4Kテレビという高画質が近年シェアを伸ばしている。当館では開館以来、この4Kのさらに4倍の密度を有する8Kというスーパーハイビジョンシステムによる映像を、世界で唯一の常設設備として公開してきた。このスーパーハイビジョンの質感と臨場感あふれる優れた特性を、文化財の保存と活用のための魅力的なコンテンツ制作に生かす。同時にコストも考慮した新しいシステムの調査研究を推進する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室研究員 森實久美子
【主な成果】 27年度末に開催された放送文化基金シンポジウム「8Kから∞へ～超高精細映像のゆくえ～」において、当館のスーパーハイビジョンシアターの運用の課題として多言語化の問題を提起した。この中では、スーパーハイビジョンを博物館で導入した事例が少なく、内外の関心も高いことから多言語化が喫緊の課題であることが指摘された。これを受けて、28年度はスーパーハイビジョンを運営するNHKエンジニアリングと共同で多言語化対応のための方法と経費についてさまざまな検討を行った。 多言語化の方向性には2つあり、①映像にナレーションである日本語以外の3ヵ国(英・中・韓)語のテロップを入れる方法、②映像と同期させて多言語のナレーションを、チャンネルを変えて個別にイヤホンで聞く方法である。①の方法では単一の映像コンテンツに3ヶ国語のテロップを入れることはデザイン上できないため、個別にコンテンツを作成しなければならない。また映像再生のための収録パックも増設しなければならないため、映像投影施設側のコストが膨らむ。一方、②の方法では映像機器に対する投資は①の方法よりも安価であるが、座席ごとに音声を聞き取るイヤホンを装着せねばならない。また運営のためにはイヤホンのクリーニングまたは、使い捨てイヤホンの配布などランニングコストが高くなることとなる。いずれも一長一短でいずれが最適かの結論は出せないが、導入にむけての課題が浮かび上がった。また、参考見積でも、いずれの方式であっても1千万円を超えることが明らかとなり、長期的なビジョンでの予算確保の必要性が明らかとなった。 以上、開館以来の課題であった、スーパーハイビジョンシアターの多言語化について、関係部署と協議しながら具体的かつ実践的な検討を進めることができた。			
 <p>受け継がれるおもい、小さな島の教会群</p> <p>長崎の教会群の映像番組</p>		 <p>神やどる島、宗像・沖ノ島</p> <p>宗像・沖ノ島の映像番組</p>	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	開館以来、十分に検討されてこなかったスーパーハイビジョンの多言語化について、具体的かつ実践的な検討が進められたことは大きい。今後は、諸方面と連絡調整をしつつ、予算面も含めた裏づけが必要である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画の達成にむけて、順調に推移している。新コンテンツの作成との両輪で、本プロジェクトを推進していきたい。スーパーハイビジョンの多言語化は、海外からのインバウンド需要の恩恵を受けている当地にとっても必須の問題であり、今後、「神宿る島 宗像・沖ノ島」や「長崎の教会群」の世界文化遺産登録を控え、ますます緊急度の高い課題となることが予測される。そこで、関係各所と連携しつつ、実現にむけて推進していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 特別展をより楽しくわかりやすくするための教育普及プログラムを実施する。28年度は「始皇帝と大兵馬俑」展、「京都 高山寺と明恵上人」展、「宗像・沖ノ島と大和朝廷」展の3つの特別展において、教育普及プログラムを実施した。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 西島亜木子
【主な成果】 他館ではあまり例をみない特別展での教育普及活動について、これまで実施した活動における来館者の反応や要望に基づき、効果的な教育普及事業について実践的な調査研究を行った。 特別展のテーマや来館者層、来館状況に応じた教育普及活動を事前に担当者と協議し、実施内容を検討した。その結果、展示室内での体験コーナー、解説パネルの設置、展示室外でのワークショップを実施した。また、展示理解促進のための冊子を製作した。体験者へのアンケートでは、約8割が「楽しかった」と回答し、高評価を得た。 (1)「始皇帝と大兵馬俑」展では、始皇帝が行った単位の統一を体感してもらう企画「秦の単位で身体測定」を実施。秦の単位を目盛りをつけた身長計と体重計を会場内に設置し、来館者に身長、体重を計測してもらった。小中学生向けのジュニアガイド「めざせ！始皇帝博士」を6万5千部作成し、事前配布及び会場配布を行った。また、5月5日の子どもの日企画として、兵馬俑の髪型と冠をペーパークラフトで作るワークショップ「紙で工作！兵馬俑に変身！」をエントランスホールで実施し、167名が参加した。 (2)「京都 高山寺と明恵上人」展では、入場のための長い待ち時間が予想されたことから、明恵上人を紹介する冊子「レジェンド・オブ・明恵」を8万部製作し、エントランスホールで配布した。(当初の印刷部数は5万部であったが、好評であったため3万部増刷した) 行列の間に冊子を手に取り、読んでいる姿が多数見られ、展覧会への事前理解が深まった。また、冊子の内容をパネルにし、会場内にも設置した。冊子はホームページでもダウンロードできるようにした。(ダウンロード数1,331件) (3)「宗像・沖ノ島と大和朝廷」展では、会場内に体験コーナーを設け、3Dプリンタで出力した貝輪のレプリカ及び貝製品の素材であるイモガイの現生品を触れるようにした。また、わかりやすい解説として、沖ノ島に住む鳥をキャラクター化した、オオミズナギドリドリが展示に関する豆知識を紹介する題箋サイズのパネルを設置した。さらに、古代に親しむ企画として、会場外に写真撮影及び古代服「貫頭衣」試着コーナーを設けた。			
【備考】			

これはお墓から見つかったサザエ⁵⁵
なんだドリ。貝の蓋と一緒に発見
されたことから、貝の中身が
入ったまま供えられたと考えら
れているよ。



「宗像・沖ノ島と大和朝廷」展解説



(参考) ドリが解説したサザエ
(福岡市埋蔵文化財センター所蔵)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	「博物館は敷居が高い」と考えている人が多いことから、当館のわかりやすく楽しい教育普及プログラムは来館者から期待が寄せられている。その期待に応えるため、幅広い世代を対象にしたプログラムを実施し、高評価を得た。当館では、3D計測した展示資料を3Dプリンタで出力し、実物の近くに設置して触れるコーナーを設置したり、展覧会のテーマとなっている時代の服装を再現し、試着できるコーナーを設置するなどオリジナルの教育普及プログラムを開発しており、他館でも活用できるなど発展性がある内容であった。効率性、継続性については担当者の能力に依存する面もあり、今後改善が必要である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	教育普及プログラムの調査研究は、来館者が期待する知識・体験の提供を充分調査して実施しており、アンケートで約8割が「楽しかった」と回答していることからわかるとおり、高い評価を得ている。年代も若い世代から高齢者まで安定して満足度、期待度が高い。それにより、中期計画における「教育普及活動等に関する調査研究」のうちの教育普及事業については十分に達成できたと考える。29年度以降も、それぞれの展覧会に合った来館者のニーズを調査研究し、来館者の要望に合わせた多様なプログラムについて調査研究していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 学校教育現場との連携を図って作り上げる学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・開発 ((4)-①-3))		
【事業概要】 現在、13種類の「きゅうぱっく」を準備し(各2セット、計26セット)、学校や社会教育団体等への貸出を行っている。今後、新規ぱっく開発を見据えて、現在ある「きゅうぱっく」の有効な活用法に関する実践事例を収集するとともに、貸し出しや出前授業を通して博物館の活用や「きゅうぱっく」に関する情報を発信し、利用の普及を図る。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	教育普及室主任研究員 久保田和之
【主な成果】 ・「きゅうぱっく」を活用した実践事例や博物館を活用した授業作りに関する指導案や学習プリントなどを収集し、今後の新規ぱっく開発の方向性について、更なる検討を進めた。 ・学校現場や子ども達のニーズを踏まえ、アジア各地の代表的な楽器の音色・演奏及び解説を聴くことができるCDと、トランクに収納可能なサイズの楽器を集めた新規ぱっく『あじっば・どこでも音楽室(仮称)』の開発に向けて検討を開始した。			
【備考】 ・「きゅうぱっく」利用報告書や聞き取りを元に、アクティブラーニングへの移行が進む学校現場において、教員が「きゅうぱっく」に何を期待し、何を求め、どのように活用しているか、調査を進めた。 ・多くの先生方に「きゅうぱっく」を知っていただけるように、28年度も春日市立須玖小学校、那珂川町立岩戸小学校、佐賀市立新栄小学校、太宰府市立太宰府中学校など、積極的な出前授業をおこない、児童生徒の反応を検証した。 ・従来、きゅうぱっく「稲づくりから国づくりへ」及びきゅうぱっく Lite「青銅器のいろいろ」では、3Dプリンタで再現した銅戈を提供してきたが、28年度からは、青銅で再現したより本物に近い銅戈をパックした。これによりリアルな青銅器体験を提供できるようになり、生徒達の反応も格段に良くなり、理解も進んだ。今後も現状の経年劣化したアイテムを更新し、利用者の期待に応えられるように努めたい。 ・事前に依頼があった複数の特別支援学校や視覚障がい者の団体に対して、当館研修室及び和室において「きゅうぱっく」を体験してもらい、理解を深めるように工夫するとともに、その反応を検証した。			



「きゅうぱっく」を利用した授業


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	「きゅうぱっく」の貸出件数は、47件・87パック(セット)であり、27年度と比較すると件数はほぼ横ばいであるが、貸出パック数は10パック以上増加している。理由としては、教員の「きゅうぱっく」活用の幅が広がり、同時に複数パックを借りるケースが増えていること、出前授業での活用や校長会での広報など情報発信に努めたことにより、「きゅうぱっく」が使いやすくまた効果的な学習教材であると認知されつつあることなどが挙げられる。今後も広報活動を積極的に展開していく必要がある。 また、今後は、収集した多くの実践事例を精査し、学校等での利用促進を図るとともに、「きゅうぱっく」の内容をさらに充実させたいと考えている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画における「有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究」の達成に向かっていく。カリキュラムに「きゅうぱっく」の活用や、来館時の「きゅうぱっくを活用した体験活動」が位置づけられている学校があるなど、学校教育との連携が深化している。学校の要望に応えるために、的確な時期の情報発信や教員研修の充実、積極的な受け入れを進めるとともに、内容の充実・新規ぱっくの開発・作成が求められている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 文化交流展示室に関して現在の展示施設、展示環境や展示方法の調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 27年度に実施した文化交流展示室リニューアル後の観覧者動向を分析し、よりいっそうの充実と改善に努める。また、開館以来映像展示を行ってきた第7室の改修および展示のリニューアルを実施する。さらに、文化交流展示室内における新しい解説システムの検討に着手する。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 楠井隆志
【主な成果】			
(1) 文化交流展示室の充実と改善			
<ul style="list-style-type: none"> ・トピック展開催中は観覧者の動向を観察し、より多くの来室につながるようデジタルサイネージ案内や会場案内表示板の設置、開催情報の細やかな提供に努めた。 ・お客様からの指摘や意見を参考にしながら、キャプションやグラフィックパネルの柔軟な修正対応・改善・工夫に努めた。 			
(2) 第7室の改修及び展示リニューアル			
<ul style="list-style-type: none"> ・第7室は、開館以来「すず♪かね♪たいこ」のテーマのもと、中国・ベトナム・インドネシアの祭りで奏でられた青銅楽器の世界を、6面マルチスクリーン映像を上映しながら実物資料の展示をおこなってきた。開館10年が経過し、映像機器の老朽化と部品供給の終了を受けて映像展示継続が困難になった。そのため、9月の1カ月間閉室して通常展示室への改修を実施した。 ・新しい展示室は、アジアの国や地域、時代にとらわれない、親しみやすいテーマを毎回設定し、これまで基本展示でなかなか活用する機会が少なかった収蔵品をベースとする展示を展開することにした。第一弾として、10月4日より12月23日まで、アジアの屋根を彩った瓦や装飾を紹介する「アジアの葺」を開催した。 			
			
		「アジアの葺」(10月4日～12月23日) 展示風景	
(3) 新しい解説システムの検討にむけての情報収集			
<ul style="list-style-type: none"> ・現行の音声ガイドシステム(英・中・韓)は開館以来のシステム・内容であるため、当館の特徴である頻繁な展示替になかなか対応できないという欠点がある。また日本語解説への強い要望も寄せられており、新しい手法による解説システムの検討・導入が急務といえる。 ・近い将来の新システム導入にむけて、さまざまな業者へのヒアリングをおこなうとともに、近年新しいシステムを導入した先行施設への見学やヒアリングを実施した。 			
【備考】 新解説システムに関する業者へのヒアリング：4社 先行施設への見学：5施設			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	作品キャプションやグラフィックパネルの内容については、事前の調整はもちろん、展示後も内容の工夫や表記の修正など、柔軟な対応を心がけ、分かり易い展示サービスの提供と満足度の向上に努めることができた。新しい解説システム検討にむけての先行施設の視察や情報収集も着実に進めることができた。次年度は、文化交流展の多言語化対応の観点からも当館にふさわしい、時代の先端をゆく新解説システムの検討にむけて具体的な計画を策定に取り組む計画である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	解説システムについては、当館にはどのようなシステムが相応しいか内部検討を進めており、中期計画の初年度として、計画は概ね順調に遂行することができた。現行システムが開館以来のものであることから、早急な新システムへの移行が望まれる。29年度はシステムの設計要件をまとめ、30年度には導入が完了できるよう、検討作業を進めてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	a. 潜在的利用者をつくる新しい博物館の活動「きゅーはく女子考古部」についての調査研究 (4)－①－3))		
【事業概要】 新たな来館者層開拓及び考古学の魅力を伝えることを目的とした「きゅーはく女子考古部」の活動を実施する。本事業は博物館が提供するプログラムを来館者が実施する従来のプログラムと違い、参加者自らが活動内容を決める新たな方法を採用する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 西島亜木子
【主な成果】 5月から29年3月まで毎月1回の活動を通して参加者が考古学の魅力を発見するとともに、参加者自らがSNS等で活動内容を発信した。また当館ウェブサイト内のブログでも活動の様子を掲載した。取材依頼も多数あり、当館の活動や考古学の魅力を充分発信することができた。5月から8月は当館が提供したプログラムを実施、9月から29年1月までは部員の自主的な活動を行った。 これまで少なかった20代～30代女性の来館者層をターゲットとするため、部員募集チラシのデザインを若者向けにしたり、応募方法をメールのみにしたりすることで、若い女性の応募を促すことができた。活動の前半は当館が企画したプログラムを実施した。当館研究員が近隣の史跡の魅力や考古展示の見方を伝えたり、古代の衣装を部員にデザインさせたりすることで、それまで興味が薄かった古代のさまざまな分野に興味を持ってもらい、考古学に関する知識を増やすことができた。また、活動後半は、部員の自主企画とすることで、従来の博物館のワークショップ等で実施されないような独創的なプログラムが実施でき、一般の若い考古ファンがどのようなことに興味を持つかを知る調査の一助となった。部員への教育活動という点においては、自主企画を担当する班の部員が、土器作りや楽器作り、古代料理などの事前調査をし、それを活動日に他の部員と共有することで、通常のワークショップや教育講座よりも深い学習・体験が可能となった。また、応募条件に「活動内容をSNS等で発信できる方」という条件をつけたことで、部員自らが博物館の活動や考古学の魅力について発信し、新たな来館者層発掘のための博物館の広報にも役立った。			
【備考】 取材：30件（うち新聞7件、テレビ6件、情報誌2件、ウェブ14件、ラジオ1件）			



部員の企画による「古代食作り」の様子


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	27年度に引き続き2年目の実施であったが、27年度の活動とは違う独創的な内容の活動を積極的に行うことができた。同様の興味をもつ仲間が欲しいという要望があり、本活動によってその要望にそった活動ができた。また、応募条件に「活動内容をSNS等で発信できる方」という条件をつけたことで、部員自らが博物館の活動や考古学の魅力について発信し、博物館の広報にも役立った。参加者が自ら内容を考える独創性がある活動を実施できた。また、他館から同様の事業を実施したいとの声が多数あり、発展性も見込まれる。27年度の意見をふまえ、今回は活動回数を増やしたため、活動内容について充分話し合う時間を設けることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	少人数での活動ではあるが、27年度とは違うメンバーでの実施であることや、部員自らが当館の活動をSNSで発信することで新たな来館者層へ当館及び考古学の魅力を発信できた。また、参加者自らが考えるという新たな試みも27年度の活動とは違う独自の企画を実施することができた。29年度も新たな部員を募集して実施を継続したい。 なお、活動日以外に行われた考古学のイベントにおいて1期生と2期生の合同でワークショップを行ったり、他自治体依頼による考古遺跡を巡るモニターツアーに参加したりすることで、1期生と2期生のつながりもできている。1期生、2期生への聞き取りやアンケート調査、3月に実施した一般向けのアンケート結果によると、活動日以外に遺跡を訪れたり当館や他の考古系博物館を訪れたりした部員がほとんどで、考古学および博物館の魅力が十分伝わったと言える。今後も引き続き参加者の声やアンケートを検証し、29年度以降の活動に生かしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b. 松菊里型竪穴住居をモデルとした「組み立て式竪穴住居」の調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 展示理解補助ツールとして、来館者が組み立てることができる竪穴住居を製作し、活用する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 西島亜木子
【主な成果】 展示だけではわからない古代の住居の様子が理解できる組み立て式竪穴住居を製作した。 (1) 製作 ・事前に実際の竪穴住居を復元した近隣の施設を視察し、構造や問題点、活用方法を調査し、製作する竪穴住居の構造の参考にした。 ・竪穴住居の構造は、松菊里型と呼ばれる弥生時代が始まったころの住居をモデルにした。松菊里型住居は平面プランが円形で、中央に穴があり、その両脇に2本の柱があるのが特徴である。韓国の代表的な集落住居である松菊里遺跡で多く見つかったもので、稲作を始めとした多くの文化とともに日本に伝えられたとされ、対外交流をテーマとする当館が製作する竪穴住居にふさわしいものである。 ・当館はIPM活動を活発に行っていることから、館内に保管した際に文化財害虫を寄せ付けない材質（FRP、スチロール、プラスチック等）を使用した。 (2) 活用 ・「きゅーはく女子考古部」での活動において、部員が竪穴住居を組み立ててお披露目会を行った。また、組み立ての様子を当館ウェブサイトのブログにアップした。 ・12月17日～29年1月9日まで、エントランスに展示し、自由に写真を撮ったり、竪穴住居内に入ったりすることができるようにした。 ・29年3月4日に実施した考古学のワークショップ等を行うイベント「きゅーはく女子考古部の宴」では竪穴住居を公開で組み立て、イベント来場者にも竪穴住居に入ってもらい古代の住居について学ぶ機会を提供した。			
			
【備考】 西島亜木子、他「松菊里型住居をモデルとした「組み立て式竪穴住居」の製作と活用」 『東風西声』第12号（29年3月31日）			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	展示だけでは不十分な古代の住居の構造を、竪穴住居の実物を再現する方法ではなく、当館独自の設計で製作することができた。また、博物館の環境に配慮することで、館内での活用を可能にすることができた。常設ではなく、必要に応じて組み立てることができる構造であり、館内での活用のほか、アウトリーチ活動や他施設への貸し出しも可能で、発展性もある。29年度以降は、さまざまな活用方法を構築しながら積極的に活用していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	考古学系の展示や特別展、イベント等、幅広く活用できるように、場所に限定されない竪穴住居を製作することができた。また、博物館の環境に配慮した材質で製作することにより、天候に左右されないイベントを実施できた。これにより中期計画における「教育活動における調査・研究」を行い、目標を達成することができた。29年度もさまざまな教育普及活動で活用したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館の環境保存に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の活用に関連する保存環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 高橋 裕次
【主な成果】 (1) 調査概要 28年度は文化財の輸送環境に関する調査研究として、国内輸送に用いられるトラック、船舶に関しての輸送環境を把握、評価することを目的として、文化財の輸送に用いられる輸送機関上で発生する加速度の計測を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 トラックおよび船舶上で発生する加速度値から振動周波数毎のパワースペクトル密度：PSD(power spectral density)を求め、ターゲットとする振動周波数範囲を絞り込んだ結果、輸送環境計測におけるプロトコルとして、最大 550Hz 程度までを計測できるものが適正であるという結論が得られた。また、トラックと比較して船舶(R0-R0船の場合)上で発生するピーク加速度が非常に低いレベルであることが分かった。ただし、船舶上で発生するローリング等の動揺に関しては、より低周波範囲を正確に捉える必要がある。 (3) 調査研究の成果 輸送環境計測のプロトコルが定まったことによって今後のデータ収集を効率良く進められるようになった。また、船舶による文化財の輸送環境はこれまでほとんど情報が無く、データを収集し解析できた成果は大きいと考えている。			
			
トラック(美術品輸送専用車両)荷台における輸送環境調査			
【備考】 学会発表 ・日本文化財科学会第33回大会「美術品輸送車両上で発生する振動周波数の解析」(6月4-5日)。 ・文化財保存修復学会第38回大会「首都高速道路走行時に美術品輸送車両上で発生する加速度の評価」(6月25日)。 ・日本包装学会第25回年次大会「美術品輸送用トラックの荷台で計測された加速度の評価」(7月7日)。 ・第54回全日本包装技術研究大会「中国における美術品長距離輸送時の環境調査」(11月29日)。 ・International Safe Transit Association European Packaging Symposium「The Investigation of Shock and Vibration of Tracks During Transport for Museum Objects」(29年3月9日)。 論文 ・『日本文化財科学会誌』第71号「遺物の保存環境」(8月1日)。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	東京国立博物館における文化財の活用に関連する輸送環境について、国内輸送に用いられるトラック、船舶に関しての輸送環境を調査研究した。その結果、輸送環境計測のプロトコルが定まったことによって今後のデータ収集を効率良く進められるようになった。また、情報が極めて少なかった船舶による輸送環境について調査することができた。これらの成果は、今後の輸送環境の向上に結びつける上で重要なものとして位置付けられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	文化財の輸送環境については、輸送機関上における環境の把握、その環境下における梱包資材の応答、そして、輸送機関および梱包資材からの影響で文化財にどのような変化をもたらすのかを総合的に研究することで、その向上が見込まれるものとする。上記実績はその第1段階に該当するものである。残りの中期計画期間中に、梱包資材と文化財に関する調査を実施することで最終段階を完了できる見通しである。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	a. 美術品・輸送機関・梱包資材の振動特性情報を集積した安全輸送のためのシステム構築 (科学研究費助成事業) ((4)-②-1))		
【事業概要】 輸送機関、梱包資材、文化財が輸送中に発生する振動に対してどのような応答を示すのかを調査し、科学的根拠に基づく梱包設計を行うシステムを構築する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・東京-上海間の輸送において計測を実施した。梱包箱内の1データを得た。特に海外(中国)における陸上輸送中に大きな衝撃加速度が発生することが判明した。この成果は海外輸送時における加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(4月20日)。 ・京都-東京間の輸送において計測を実施した。トラック荷台上の1データを得た。このデータは国内輸送に用いられる美術品専用車両上における輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(5月23日)。 ・日本文化財科学会第33回大会において「美術品輸送車両上で発生する振動周波数の解析」と題して研究成果を発表した(6月4-5日)。 ・金沢-東京間の輸送において計測を実施した。トラック荷台上の3データを得た。このデータは国内輸送に用いられる美術品専用車両上における輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(6月8日)。 ・文化財保存修復学会第38回大会において「首都高速道路走行時に美術品輸送車両上で発生する加速度の評価」と題して研究成果を発表した(6月25日)。 ・文化財保存修復学会より「第10回文化財保存修復学会業績賞」を受賞した(6月26日)。 ・台車を用いた館内輸送時において計測を実施した。このデータは館内輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(7月1日)。 ・日本包装学会第25回年次大会において「美術品輸送用トラックの荷台で計測された加速度の評価」と題して研究成果を発表した(7月7日)。 ・上海-西安間の輸送において計測を実施した。トラック荷台上の4データを得た。このデータは海外(中国)の陸上輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(7月15-17日)。 ・『日本文化財科学会誌』、第71号に論文「遺物の保存環境」と題して研究成果を発表した(8月1日)。 ・キトラ古墳壁画の輸送において計測を実施した。梱包箱内の3データ、トラック荷台上の3データを得た。国内輸送に用いられる美術品輸送専用車両が超低速走行した場合にどのような輸送環境を示すのかを初めて現象的にとらえることに成功した(8月25-26日)。 ・東京-大阪間の輸送において計測を実施した。トラック荷台上の4データを得た。このデータは国内輸送に用いられる美術品専用車両上における輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(9月14-15日)。 ・上海-西安間の輸送において計測を実施した。トラック荷台上の4データを得た。このデータは海外(中国)の陸上輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった(10月14-16日)。 ・苫小牧-東京間の輸送において計測を実施した。トラック荷台上の3データ、梱包箱内の1データを得た。このデータは国内輸送に用いられる美術品専用車両上における輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報となった。また、これまで船舶を用いた輸送環境についてはこれまで具体的な情報が乏しかったところ、今回の計測によって客観的な評価につながるデータの取得に成功した(11月6-8日)。 ・第54回全日本包装技術研究大会において「中国における美術品長距離輸送時の環境調査」と題して研究成果を発表した(11月29日)。 ・美術品輸送専用車両を用いた走行実験を実施した。トラック荷台上の4データを得た。美術品輸送専用車両が急発進、急停止、段差乗り上げ等した場合にどのような輸送環境となるのかについてのデータ取得に成功した(12月6日)。 ・キトラ古墳壁画の輸送において計測を実施した。梱包箱内の3データ、トラック荷台上の2データを得た。国内輸送に用いられる美術品輸送専用車両が超低速走行した場合の輸送環境に関して、他の高速輸送との比較によりその安全性を相対評価することに成功した(12月7日)。 ・文化庁主催「古墳壁画の保存活用に関する検討会第21回」において研究成果を発表した(12月19日)。 ・美術品輸送専用車両を用いた走行実験を実施した。トラック荷台上の4データを得た。美術品輸送専用車両の荷台上で走行中に発生する振動周波数範囲について絞り込むことができ、今後の加速度データロガーの計測設定条件 			
			
			トラック荷台上での振動計測

を確定することができた(12月21日)。

- ・International Safe Transit Association European Packaging Symposiumにおいて「The Investigation of Shock and Vibration of Tracks During Transport for Museum Objects」と題して研究成果を発表した(29年3月9日)。

【備考】

- ・科学研究費助成事業の4年計画の1年目
- ・輸送環境計測実施回数(国外)：3回、輸送環境計測実施回数(国内)：9回、取得輸送データ数：40データ、成果発表回数(国内)：6回、成果発表回数(国外)：1回、受賞：1回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<p>科学研究費助成事業4年計画の1年目である28年度は、文化財輸送に用いられる輸送機関上で発生する振動データの収集を、特に集中的に実施した。国外における計測を3回、国内における計測を9回実施することができ、その結果振動に関しては40データを取得することができた。その成果としては具体的に、海外における陸上輸送中に大きな衝撃加速度が発生することを明らかにしたこと、海外輸送時における加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報が得られたこと、国内輸送に用いられる美術品専用車両上における輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報が得られたこと、館内輸送環境の計測において、加速度データロガーの記録条件をどのように設定するかにおいて参考となる情報が得られたこと、これまで船舶を用いた輸送環境についてはこれまで具体的な情報が乏しかったところ、今回の計測によって客観的な評価につながるデータの取得に成功したこと、美術品輸送専用車両が急発進、急停止、段差乗り上げ等した場合にどのような輸送環境となるのかについてのデータ取得に成功したこと、国内輸送に用いられる美術品輸送専用車両が超低速走行した場合にどのような輸送環境を示すのかを初めて現象的にとらえることに成功したこと、美術品輸送専用車両の荷台上で走行中に発生する振動周波数範囲について絞り込むことができ、今後の加速度データロガーの計測設定条件を確定することができたこと等である。また、これらの調査結果から得られた知見をまとめ、国内外で成果発表を計7回行った。一方、査読付き海外学術雑誌への英文による論文発表が実現しておらず研究成果の国際的な発信力にやや劣る点が認められるため、左記評価に値するものと考えた。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<p>全体の研究計画は、輸送機関上で発生する振動、梱包資材の振動応答、文化財(素材、模造品など)の振動応答をそれぞれ調査し、最終的にそれらの情報を集積した科学的な梱包設計システムの基礎を構築するものである。28年度は輸送機関上で発生する振動データについて相当数を収集することができた。29年度以降は、輸送機関上で発生する振動調査を引き続き行い、梱包資材の振動応答についても調査を実施する予定である。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b. 三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獸鏡の総合的研究(科学研究費助成事業)((4)-②-1)(研究代表者:奈良県立橿原考古学研究所 水野敏典)		
【事業概要】 古墳時代前期を代表する遺物である「三角縁神獸鏡とは何か」について三次元計測技術を応用して製作技法から考えることを目的とする。舶載三角縁神獸鏡と仿製三角縁神獸鏡の対比を中心に、それを取りまく倭鏡・中国鏡・銅鐸の同一文様をもつ青銅器を分析対象として、量産技法から相互関係を分析する。そのための手段として精密三次元計測データによる客観的で詳細な分析を用いる。そして、肉眼観察では扱うことが不可能であった青銅器表面の微細な鑄型の傷や、面的な変形、収縮についての新しい情報を得ることで、これまでにない製作技法の解明を進める。さらに、青銅器製作技術から「舶載」と「仿製」三角縁神獸鏡の技術的系譜を明らかにすることも目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【主な成果】 1 既存データを用いた研究成果を発表・公開した。 2 今後の活用に向けて、X線CT画像データ等の利用方法等を検討した。 ① 実施概要 1) 東京国立博物館所蔵資料の既存調査データ・写真の整理・分析、およびデータ利用方法の開発を検討した。 2) 新規に、古代出雲歴史博物館・京都府大山崎町・大阪大学考古学研究室所蔵資料の三次元計測を行った。 ② 成果・知見等 : 既存データ(東京国立博物館所蔵主要古墳出土銅鏡:科学研究費補助金基盤研究(A)課題番号25284161・平成14年度～平成16年度、基盤研究(A)課題番号25284161・平成18年度～平成21年度)のデータ・写真の整理・分析を検討し、今後の研究資料の整備を図った。 ② 成果の公開等 : 早稲田大学総合人文科学研究センターで、三次元計測の応用における研究成果を発表した。			
			
○三次元計測データ画像分析 [左:三角縁神獸鏡(部分・拡大)、右:正射投影図作成用画像(正面及び右側面部分・上面)]			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の4年目 ○調査・研究会回数(日数):3回(3日間) ・主な調査・分析資料 : 三角縁神獸鏡・日本列島製漢式鏡、銅鐸(東京国立博物館蔵) ○研究会回数(日数) : 1回(1日間) ○論文等公開 : 水野敏典「製作技法からみた三角縁神獸鏡」『纏向発見と邪馬台国の全貌—卑弥呼と三角縁神獸鏡』(発見・検証 日本の古代I)角川書店、7月29日 ○主な学会等発表等 : 水野敏典「鏡」『3D 考古学の挑戦考古遺物・遺構の三次元計測における研究の現状と課題・研究 発表要旨』早稲田大学総合人文科学研究センター、10月16日			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
C	科学研究費助成事業4年計画の最終年度の28年度は、継続性・正確性および発展性・独創性は変更の必要がない。しかし、達成度は館の業務方針により下半期に東京国立博物館における資料(データ)整理等を中断したため、資料(データ)整理等が不十分に終わった。代替成果として、一部既存データの解析・開発を行ったが研究目標の達成は十分とはいえず、予算運用の効率性・適時性や研究精度・分析視角の発展性・独創性、及び調査・分析手法の開発・確立は不十分であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
C	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を計画した。①の学術的評価に関して、考古学的情報の整理・資料化及び研究会等を通じた活動・研究はある程度目標を達成した。しかし、当館文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、列品データの整理・分析は不十分で、中期計画における「4-1)所蔵品・寄託品及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究」に沿った調査研究としても、十分な成果を挙げることができなかった。改善点は、研究年度内に挙げた既存データ解析等の成果を整理・分析し、研究期間終了後ではあるがより高度な効率性・適時性および発展性・独創性に資するようにデータ整備を図ることを目標として、29年度成果に反映させる所存である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	c. 被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究（科学研究費助成事業）（(4)－②－1）（研究代表者：筑波大学准教授 松井敏也）		
【事業概要】 大規模災害における文化財等の被災状況の調査及び情報収集、博物館施設等における空気汚染物質調査、博物館施設等における資料保存環境管理の実態調査を行う。それらの調査結果を基にして、被災博物館施設等における空気汚染環境を改善し、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【主な成果】 <ul style="list-style-type: none"> ・文化財保存修復学会第38回大会において「津波被災ミュージアム施設「鯨と海の科学館」（岩手県山田町）と仮設収蔵施設の空気質」と題して研究成果を発表した(6月26日)。 ・『日本文化財科学会誌』、第71号に論文「遺物の保存環境」と題して研究成果を発表した(8月1日)。 ・北海道・東北保存科学研究会との共同シンポジウム(後援：公益社団法人空気調和・衛生工学会北海道支部)を開催した。本プロジェクトによる研究成果を発表し、同時に北海道・東北地域における文化財保存の担当者との情報共有を行った(8月10・11日)。 ・台北國立故宮博物院主催の「第三屆博物館保存修復工作坊－文物保存與永續發展」(第3回博物館保存修復ワークショップ－文化財保存と永遠の発展)への招聘を受け、「文物保存環境温湿度規範」(文化財保存環境の温湿度基準について)及び「展櫃微環境設計與微氣候控制」(展示ケース内微小環境の設計と微小空間環境の制御について)に関して研究成果に基づく講演を行った(11月4日)。 ・福岡市民防災センターにおいて地域災害及び防災に関する調査を行った(12月14日)。 ・京都市市民防災センターにおいて地域災害及び防災に関する調査を行った(12月15日)。 ・第1回スマートビルディング EXPO(東京ビッグサイト)において、断熱材の開発担当者と協議を行い、室内環境制御についての知見を得た(12月16日)。 ・熊本ピーエスオランジュリ(熊本市)において、エネルギー効率の高い持続可能な空調設備に関する調査を行った(29年1月13日)。 			
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の3年目			



北海道・東北保存科学研究会との共同シンポジウムの様子

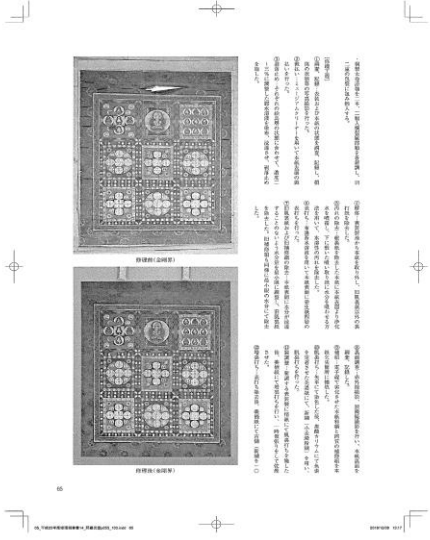
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業5年計画の3年目である28年度は、博物館施設等における空気汚染物質調査の成果として文化財保存修復学会における成果発表を、また、資料保存環境管理の実態を調査し、『日本文化財科学会誌』及び「第三屆博物館保存修復工作坊－文物保存與永續發展」において成果発表を行うことができた。また、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査として、熊本ピーエスオランジュリの施設調査及び各地の防災センターにおける情報収集を実施した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	全体の研究計画は、大規模災害における被災状況の調査、博物館施設等における空気汚染物質調査、資料保存環境管理の実態調査を行い、被災博物館施設等における空気汚染環境を改善し、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査研究を実施するものである。28年度は大規模災害における被災状況の調査、博物館施設等における空気汚染物質調査、資料保存環境管理の実態調査を重点的に行った。29年度以降は、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査研究を重点的に実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((4)-②-1)		
【事業概要】 文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊
【主な成果】			
<p>(1) 情報の収集と調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 28年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、148件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 京都国立博物館研究員により10回行った修理工房の巡回のほか、適宜、修理技術者とともに実施した調査を通じ、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中のみ得られる情報を収集、分析した。 <p>(2) 情報の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> 27年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、1,960件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 <p>(3) 情報の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> 25年度に修理が完成した文化財84件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第14号(29年3月31日発行)に掲載した。 修理時の調査により発見された銘文22件を「銘文集成」として同書に報告した。 			
 <p>『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第14号 修理概要（部分）</p>			
【備考】			
<p>(1) データ収集件数 148件 巡回回数 10回</p> <p>(2) データベースの追加更新件数 1,960件</p> <p>(3) 報告書 1冊（修理報告84件、銘文報告22件を含む）</p>			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	文化財保存修理所で行われる修復文化財情報の収集・整理については、データのデジタル化処理方法等、将来的な情報の応用に対する発展性を見据えて継続的に実施してきた事業であり、効率性・正確性を担保しつつ順調に実施されている。『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第14号は、29年3月に刊行し、諸研究機関に送付を済ませている。29年度計画も28年度に準じて実施するが、得られた知見を元にした研究の活性化が望まれる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本事業は、法人化以前から継続してきた事業であり、中期計画でもその重要性に鑑みて継続性を重視している。文化財保存修理所に搬入される修復文化財の多寡は他律的条件であるため定量的評価になじまないものであるが、ほぼ安定した件数で推移しており、有形文化財に関連する調査研究は順調に達成している。今後の最大の改善点としては、一時期停頓していた『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』の刊行速度を速め、修復次年度に報告刊行という速やかな情報公開を実現することにある。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財の保存・修復に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 修理を実施している文化財について、その保存修復に関する調査研究を修理事業者と協力して行い、また、復元模写事業を行うことで文化財の保全と公開に役立てる。あわせて、調査研究の過程で得ることのできた貴重な情報を蓄積し、学術的な利用のみならず、最適な修理方針の策定など、今後の保存修復事業にも活用する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊
【主な成果】 <p>(1) 28年度、所蔵者の協力を得て修理所内工房と実施したX線科学分析調査はソフテックスによる蛍光X線分析調査11件である。</p> <p>(2) 博物館と模写修理事業者（六法美術）とによって、当館館蔵扇面貼交屏風のうち「柳桜図」「枇杷に小禽図」の復元模写を実施し、紙質調査と技法調査を行った。</p> <p>(3) 国宝「釈迦金棺出現図」について、博物館と模写修理事業者（六法美術）に京都工芸繊維大学佐々木良子当館調査員を加えて、27年度に行った蛍光X線分析装置と分光分析装置による調査成果を、『学叢』38号（5月27日発行）に掲載した。</p>			
			
修理事業者による「柳桜図」の復元模写			
【備考】 <ul style="list-style-type: none"> ・調査報告「釈迦金棺出現図 科学分析調査報告及び復元模写事業概要」、『学叢』38号、京都国立博物館、5月 ・外部資金の導入 「柳桜図」「枇杷に小禽図」復元模写…清風会研究支援経費 			

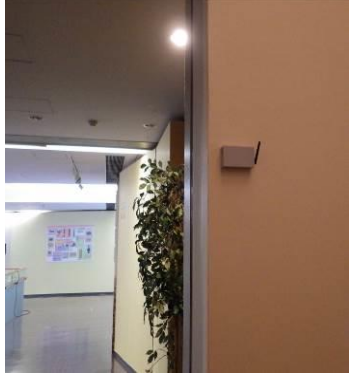
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	28年度事業は、屏風に貼り込まれた扇面画の復元模写事業を27年度に引き続き行った。また、27年に行った「釈迦金棺出現図」の科学分析調査成果を公刊した。また、ソフテックスによる蛍光X線分析調査も修理過程において工房と所蔵者の協力の下に行い、修理方針の策定などに役立てた。今後も継続を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、有形文化財に関連する調査研究について順調に成果を上げている。27年に始めた復元模写事業は研究や一般啓蒙上の効果が高いため継続事業化を進めており、29年度以降の計画も策定を済ませており、当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の一部の復元模写を予定している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図った。 (1) 温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査 (2) 展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察） (3) 文化財害虫トラップの設置及び回収			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 展示室・展示ケース各所に温湿度センサー（無線機能付き）を設置し、24時間のリアルタイムモニタリングを実施した。温湿度データの蓄積を進めると共に、展覧会ごとに情報を整理している。収蔵庫は、温湿度データロガーやデジタル温湿度計を用いて、定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行った。これらの調査から得たデータを分析し、展示や保管時の文化財環境の改善につなげている。 (2) 正倉院展の後、展示ケース内の塵埃を電子顕微鏡にて観察した。観察結果を踏まえて、単位面積当たりの塵埃量を測定し各ケース内の気密性に関する調査を実施している。調査結果を踏まえ、気密性向上のためのメンテナンスを実施した。 (3) 文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置した。2ヵ月に1回の交換を行い、調査結果の蓄積並びに分析を行うことでIPMを推進している。また、文化財害虫の生息が確認された展示室等に防虫シートを設置し被害の防止を図るとともに、施設の周囲に害虫忌避剤の散布を行った。掃除と防塵マット交換を定期的に行い、収蔵庫周辺や調査室内等の衛生環境保持に努めた。			
			
温湿度センサーの設置状況			
【備考】 ・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に1回の程度で開催し、以上の調査内容と結果を踏まえた、保存環境に関する課題点や改良案について協議を重ねている。 (1) 展示室内温湿度調査：162箇所 (2) 展示ケース内ほか粉塵調査：25箇所 (3) 文化財虫害生息状況調査：150箇所 ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11回開催			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
A	27年度に継続して調査の実施やデータの蓄積を着実にやっている。また、調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図った。今後、取得データの精度向上も考慮し、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えたい。 4月になら仏像館がリニューアルオープンし、改修前よりも温湿度調査箇所を増やすことで、以前より細かいデータの収集が可能となった。今後も館内環境維持のため継続して調査を行う。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	展示室では継続したモニタリングや調査を行っている。また、なら仏像館はリニューアルしたばかりなので、今後も継続したデータの蓄積を着実に実施する。29年度以降の取得データの精度向上も考慮しながら、継続的な調査を行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 収蔵品・寄託品等に関する文化財修理の観点からの調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の3点の内容について実施した。 (1) 修理方法の記録を残し将来の文化財修理に資するため、館蔵品や寄託品の保存状態の調査を行う。その内容を保存カルテとして記録する。 (2) 館蔵品や寄託品の修理を着工するにあたり、修理文化財の保存状態に関する情報を得るため調査を行った。また、調査結果を踏まえた修理調書を作成している。 (3) 修理中の文化財から取得した材質・銘文等の情報について調査と分析を行った。また、その結果を当館の研究紀要への掲載等を行いデータの蓄積を実施している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察し、そこで得られた情報を基に保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。 (2) 館蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果を基に修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。 (3) 修理中の文化財から得た木片について、共同研究の一環として京都大学生存圏研究所との協定に基づき樹種同定を実施した。また、修理中に発見された銘文は、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を行っている。25年度までの成果は従来通り当館の紀要に掲載し広く公表したが、26年度分からは文化財保存修理所修理報告として新たに刊行する予定である。			
【備考】 ・保存カルテや修理調書を基に修理された文化財は、修理完了後の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表する予定である。 (1) 保存カルテ作成件数：総計 96 件 (内訳 絵画：34 件、書跡：15 件、彫刻：11 件、工芸：14 件、考古：22 件) (2) 修理調書作成件数：総計 8 件 (内訳 絵画：4 件、書跡：0 件、彫刻：1 件、工芸：1 件、考古：2 件) (3) 材質調査及び銘文調査件数：4 件 (内訳 材質調査実施件数：4 件)			



採取した材質調査試料片


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	文化財保存修理所の修理技術者と連携を進め、X線透過撮影や顔料調査などの修理に有用な調査を実施した。保存カルテについても整備を進め、修理方針の検討に役立てた。また、材質調査や銘文調査も引き続き実施し、データの蓄積を図った。次年度には文化財保存修理所修理報告として新たに刊行し、情報の公開を進める予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	当館の文化財保存修理所は、奈良をはじめとする国指定品の修理における拠点であり、修理技術者との連携は今後も重要である。本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を公開するものである。29年度についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図る。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 収蔵品・寄託品等に関する保存科学の観点からの調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の2点の内容について実施した。 (1) 館蔵品や寄託品の修理前や修理中等に併せ、光学調査(X線透過撮影・蛍光X線分析)を実施した。そして、修理方針の策定に有効な情報を取得し反映させた。 (2) 文化財修理所での修理中の文化財については、当館の研究者と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、得られた結果を修理へ反映している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 館蔵品や寄託品の文化財(彫刻や漆工品など)の修理等に併せ、X線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。また、金銅像の材質や絵画の顔料に関する情報を得るため、蛍光X線分析装置を用いて材質分析を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も行った。 (2) 当館の研究者と工房の技術者が共同でX線透過撮影及び蛍光X線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、得られた結果は修理へ随時反映させることが可能となった。			
			
蛍光X線分析の様子			
【備考】 ・調査件数 X線透過撮影調査回数：5件 蛍光X線分析実施回数：3件			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	修理等の際に、内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。各年度の修理状況により増減はあるものの、継続的な調査を実施している。光学調査の結果は修理調書に反映し修理方針の策定にも重要な情報となっている。29年度についても継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	29年度にX線CT装置を導入し、彫刻や漆工品などの修理に活用する予定である。修理所での修理の内容により、X線撮影や蛍光X線分析などの調査数に増減はあるが、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。29年度も調査を継続し、データの蓄積を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 文化財の材質・構造等に関する共同研究			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長 木川りか
【主な成果】 他機関との文化財の材質・構造等に関する共同研究を行った。共同研究の調査件数は44件であり、科学調査を行った回数は313回であった。以下に主な成果を示す。			
(1) 「火焰土器」の科学調査 「火焰土器」の構造調査や材質に関しての知見を得るため、長岡市馬高縄文館、大塚オーミ陶業と共同で科学調査とレプリカ作製を行った。調査は表面の蛍光X線分析、X線CT、三次元計測を行った。またこれらのデータを用いて3Dプリンターによるレプリカを作製し、さらに陶器によるレプリカも作製した。レプリカはハンズオン展示として活用した。調査成果についての報告書を作成した。			
(2) 「瞳のある土偶」の構造調査 松商学園所蔵の葦原遺跡出土「瞳のある土偶」について構造調査を行った。この構造調査のデータについては報告書を作成した。 調査結果を一般公開するため、展示スペースにパソコンで土偶内部の3Dデータを見ることができるコーナーを設置し、この隣には3Dプリンターにより作製したレプリカをハンズオン展示した。			
(3) 27年度の研究成果の発表 27年度の共同研究に関する成果を日本文化財科学会と文化財保存修復学会にて発表した。			
			
「瞳のある土偶」の展示風景		火焰土器の調査風景	
【備考】 ・共同研究の調査件数：44件 科学調査を行った回数：313回 ・27年度の研究成果の報告 学会発表 「土井ヶ浜遺跡出土128号人骨のX線CTによる非破壊調査」 日本文化財科学会33回大会（6月4日、5日）他7件 新聞報道「X線CT調査が変える歴史研究の最前線」日経BIZGATE（ネット配信記事）11月2日公開			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> 調査件数は44件と年間を通して多くの文化財調査を実施することができた。 デジタルデータの活用方法について学会発表での報告や、3Dプリンターで出力したものを展示室内で活用するなどの取り組みを行った。 今後はデジタルデータの活用方法や公開の仕方についての改善点を検討していく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<ul style="list-style-type: none"> これまで11年間継続して様々な文化財の調査実績を蓄積しており、蓄積された同種の文化財データとの比較を行った。 29年度も多くのデータを蓄積し、多くの文化財の解析を行う予定である。 実験データから電圧や電流と積算時間など調査条件を精査しており、29年度に向け調査方法の改善を検討していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館における文化財保存修復に関する研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装演技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。また、「文化財を守り伝える」という博物館の役割について、作品の展示を通して一般の方々に知って頂く機会を設ける。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【主な成果】 ○「文化財保存修復研修」 実施日：8月22日(月)～26日(金)の5日間 参加者：九州産業大学2名、佐賀大学1名、広島市立大学1名の計3大学4名 内容：屏風の下貼り製作 協力者：一般社団法人国宝修理装演師連盟 装演修理技術を伝える団体として国の選定保存技術保存団体に認定されており、また当館文化財保存修復施設の利用者でもある一般社団法人国宝修理装演師連盟から協力が得られたことにより、実践的な研修を実施することができた。本研修の実施により、修理技術者の育成に寄与すると共に、参加学生の文化財保護への理解を深めることができた。  「文化財を守り伝える博物館」展示風景 ○常設展示「文化財を守り伝える博物館」 実施日：4月1日(金)～29年3月31日(金)の通年 展示場所：文化交流展示室 第1室 展示替回数：31回 博物館の役割については、これまでバックヤード見学でしか知ることができなかつたが、展示室において本テーマにて作品を展示することにより、より多くの方々に博物館の役割を知って頂く機会となった。展示は、文化財をまもりつたえてきた「保存箱」を象徴の展示とし、「修理」、「模写模造と科学調査」、「収蔵」、「環境」の4つのテーマで展開した。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	修復技術者の育成は、公共の財産である文化財を後世に伝えていくために不可欠である。また育成は継続的に行う必要があり、毎年実践的な研修を少人数で継続している本研修は、適時性や継続性が高い。博物館の役割についての展示は、同様な展示を通年で行っている博物館は他に極めて少なく、バックヤードツアーと共に当館の特色といえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画のとおり、文化財の収集・保存・修理・管理ほか、文化財及び博物館の業務に関連する調査研究を実施、及び将来的に展覧事業や教育活動等に結びつく基礎的な調査研究を実施した。「博物館の役割についての展示」及び「バックヤードツアー」の双方の事業とも好評を得ており、29年度以降も継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究（(4)－②－1))		
【事業概要】 本研究の目的は、我が国の博物館におけるIPM（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、地元NPO法人やボランティアとの共働による研修会の開催及び大学・専門教育機関・地域文化施設の連携によるIPM研修プログラム確立を通し、IPMの社会的理解度を深めつつ、博物館等におけるIPMを軸にした自立的な地域共働システムづくりを目指すものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【主な成果】			
<p>(1) IPMセミナーを実施した。定員を超える140名の参加があり、会場に入りきらなかったため、サテライト会場を設定した。セミナーでは、フランスで行われたIPM国際会議の報告、海外の博物館でのIPM活動についての報告、当館におけるIPMの取り組みに加え、市民ボランティアが当館で行っているIPM活動についても報告した。開催日：10月26日</p>			
<p>(2) 継続的に行ってきたミュージアムIPM研修（基礎編・技術編・実践編）の内容をスリム化し、受講しやすい日数に組み替えて実施した。これまでは各館1人の受講で実施してきたが、今回は各館2名の参加を原則とし、立場の違う2名1組（総務系と学芸系など）での参加とした。その結果、自館に戻ってからIPMを実践していく上で、研修で得た知識を共有し、IPMを進めて行きやすくなったと考える。開催日：10月27日、28日 受講人数：32人</p>			
<p>(3) IPM研修は募集定員24名のところ、参加申し込み開始日に北海道から沖縄まで全国58施設から109名の応募があり、全国的にIPMへの関心の高さがうかがえた。29年度以降もIPM研修を継続していく必要性を感じた。</p>			
【備考】			
<p>IPMセミナー：1回 参加人数：140人 IPM研修（2日間）：1回 参加人数：32人 学会研究会等発表：3件 「九州国立博物館における新規殺虫処理システムと最近の取り組みについて」IPMセミナー（10月26日） 「博物館展示資料の加湿温風による殺虫処理について-山笠土台部材の処理事例」 文化財保存修復学会（6月25日） 「冷凍庫を利用した木製クレートの予防的低温殺虫処理について」文化財保存修復学会（6月25日）</p>			

IPMセミナーの様子

IPM研修（虫の同定実習）の様子


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	27年度までのIPMシステム構築に向けての基礎研究の成果を踏まえ、28年度よりIPM研修の内容を大幅に変更した。受講条件を1館に対し2人で参加するようにしたところ、お互いに研修内容を共有でき、自館に戻ってIPMを実践しやすくなった様子がうかがえた。29年度は28年度に受講できなかった希望者を含め、募集方法を検討して実施したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	「有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究」という新たな枠組みの中で、IPMシステム構築に向け、基礎研究を行った。受講条件、研修内容を変えて行った結果、IPM実践に向け、より確かな形で普及することができたと考えられる。受講の希望者が多いことから、29年度以降の募集方法・講義内容を検討し、IPM研修を継続していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究(科学研究費助成事業)((4)-②-1))		
【事業概要】 本研究では、弥生時代～古墳時代の墳墓の埋葬施設(室、槨、棺)への赤色顔料の塗布について、その種類や塗布範囲の調査を行い、時期差や地域差、階層差等の有無を検討することを目的とする。これまで墳墓から出土する赤色顔料の使用方法については、塗布や散布、敷かれたなどと言われることがあるが、使用対象が木棺や遺骸といった有機物であることが多く、実際にはその使用方法は明確ではない。ここでは、石棺や甕棺などの腐朽しない棺を主な調査対象とし、これらの点について検討を行うものである。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【主な成果】 ・石棺内面全面に赤色顔料を塗布する地域や、蓋の合わせ面のみ、蓋内面のみ、蓋内面以外の内外面全面など部分的にしか塗布しない地域もみとめられ、塗布範囲に地域性が認められることが判明した。この地域性には年代差だけでなく、石棺材や石棺形態との関連性も認められた。 ・高三瀦遺跡(福岡県久留米市)の箱式石棺の調査を行い、墳墓での赤色顔料を用いた葬送儀礼の一端を明らかにした。 ・城の山古墳(新潟県胎内市)の調査を行い、赤色顔料の種類や使われ方等を東日本の前期古墳の中に位置付けた。 ・本田光子当館特任研究員が保管する赤色顔料とその関連資料について、整理を行った。 ・関連調査として城野遺跡(福岡県北九州市)の朱について産地推定を行い、中国産朱が使用されていることを明らかにした。			
			
		久留米市・高三瀦遺跡での石棺調査風景	
【備考】 ・科学研究費助成事業の4年計画の4年目 ・「東日本の前期古墳出土丹塗土器に採用されたベンガラ地域性に関する研究」『日本文化財科学会33回大会発表要旨集』日本文化財科学会 ・「城の山古墳出土の赤色顔料について」『城の山古墳発掘調査報告書(4次～9次調査)』新潟県胎内市教育委員会 ・「玉丘古墳から出土した赤色顔料について」『玉丘古墳群V』兵庫県加西市教育委員会 ほか			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	科学研究費助成事業4年計画の最終年度である28年度は、未調査地域の資料調査を行うと共に、過去3年間に行った資料についても現在の視点で見直した。出土赤色顔料の考古学的な研究は、当研究員以外行っておらず、独創性、継続性、適時性が極めて高い。また、専門的に毎年調査を継続しており、効率性や正確性が高い調査を行うことが可能となっている。その結果、今回示したように、赤色顔料の種類や塗布範囲に時期差や地域差が認められることが判明した点は大きな成果である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	これまで漠然と棺内面は全面に赤色顔料が塗布されていると考えられていたが、4年間の本研究により少なくとも石棺では部分的にしか赤色顔料を塗布しないものが一定量認められることが明らかになった。この違いについては、時期差、地域差、石棺石材の産地の差、石棺形態の差など、様々な差との相関関係が認められた。その差が生じた背景については、今後様々な資料の考古学的解釈を援用し、より詳細な検討を行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	a. 彩色塗装のある歴史的木造文化財建造物の加湿温風処理による虫害処理方法の検討に係る調査研究（科学研究費助成事業）（(4)－②－1）
【事業概要】 歴史的木造文化財建造物の劣化要因として虫害などの生物劣化は大きなウェイトを占め、従来、文化財建造物が木材害虫であるシバンムシなどによって顕著な被害を受けた場合には、修理にあわせて建物全体のガス燻蒸処理が実施されてきた。ガス燻蒸は、比較的短時間で部材内部に生息する虫まで駆除できるという点で、現時点で唯一の有効な方法である反面、燻蒸剤は毒ガスであるため、作業中や観覧者の安全確保のために厳重な対策が必要となる。さらに施工後放出される有毒ガスの周辺環境に対する影響も懸念される。本研究では、人体や環境に対して安全で、かつ有効な殺虫処理として、既に欧州などで小型の文化財について実績のある調湿温風による殺虫をとりあげ、これを漆などの彩色を施した日本の大型建造物に適用する手法を確立する。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長 木川りか
【主な成果】(1)プロトタイプチャンバーによる試験木材、漆塗膜への影響評価： 研究分担者の京都大学農学研究科・藤井義久教授の研究室にて27年度に試作した調湿温風を発生・循環できるチャンバーにおいて、実際の処理を想定した昇温、降温プログラムを何度か繰り返し、彩色層・木部における含水率とひずみ分布を測定した。基本的には、処理のときに想定される条件下では木部、彩色層ともに、顕著な影響が及ぶような大幅なひずみは生じないと考えられるデータが得られているが、材質の履歴によっては、予想外の大きなひずみがおきる可能性も想定される場合があることがわかり、処理を計画するうえで貴重な知見が得られた（京都大学にて試験）。 (2)試験用建造物の処理試験： プロトタイプチャンバーの原理を応用して、試験用の建造物（ログハウス）を処理するための装置を製作し、断熱覆屋をその周囲に作成して、建造物の処理の実験を開始した。装置としては想定した能力を発揮しており、経済的かつ有効な断熱方法の検討が残された課題である（京都大学にて試験）。 (3)日光において殺虫処理を想定した建造物における昆虫のモニタリング： 28年度は、主に日光東照宮神厩舎・鐘楼、二荒山神社大国殿においてトラップによる昆虫の分布状況を調査した。	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">試験用建造物と、温風処理用装置および断熱覆屋の試作</p>	
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目 研究全体会議 3回：6月6日（京都大学）、11月17日（京都大学）、29年1月27日（京都大学） ① 小峰幸夫、原田正彦、斉藤明子、佐藤嘉則、木川りか、藤井義久 「日光の歴史的木造建造物における新たなモニタリング手法の実用性と補集テープ調査の集計報告」（「保存科学」56号） ② 竹口彩、藤原裕子、藤井義久、木川りか、佐藤嘉則、古田嶋智子、犬塚将英 「湿度制御した温風処理による漆仕上げ材の表面ひずみの測定」（「保存科学」56号） ③ 斉藤明子「昆虫研究者のための博物館資料論・資料保存論(1) 昆虫標本の生物被害とIPM」（「昆蟲」19巻第4号） ④ 秋山純子、ほか「九州国立博物館の新たな防虫対策の取り組みについて」（「東風西声」29年3月）	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、初年度に作成したプロトタイプの装置及び運用プログラムを応用して、試験用の木造建造物を処理するための装置を製作することができた。十分な気密性、断熱性を保持しつつも、経済的にも実際に許容できる金額で作成できる処理用覆屋の設計で、十分に当初の目標を達成できたものとする。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、実地試験用の装置作成、及び断熱覆屋の試作と試験を実施した。最終年度となる29年度には、実際の処理対象となる建造物の大きさでの処理が可能となるような検討を進める必要がある。そのため、より断熱性がよく経済的にも効率的な断熱空間を可能にするための検討を進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b.文化財に使用された彩色材料に関する面的調査法の検討(科学研究費助成事業)((4)-②-1))		
【事業概要】 近年、文化財の科学調査が一般的に行われるようになってきた。しかし文化財は脆弱な材質、構造のものが多く、文化財の科学調査は調査のための作品移動の機会をなるべく少なくし、短時間に非破壊で行うことが求められる。これまでは制限がある中での点分析が主流であったが、文化財を総合的に理解するには面的な広がりで見える調査が必要である。本研究では文化財の科学調査に面的な手法を導入した有効な調査法を検討する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室研究員 秋山純子
【主な成果】			
(1)「博物図譜」(香川県立ミュージアム保管)画帖13帖の調査を行った。(11月19日) この調査により、今後詳細に調査する帖を取捨選択し、「博物図譜」の科学調査の手法を検討することができた。			
(2)「博物図譜」(香川県立ミュージアム保管)画帖4帖のカラー画像および赤外線画像を高精細スキャナーで撮影し、面的調査に有効な画像を得ることができた。(29年1月17日～19日)			
(3)「博物図譜」(香川県立ミュージアム保管)画帖4帖の顕微鏡観察および撮影を行い、図譜の彩色について詳細な情報を得ることができた。(29年1月～3月)			
(4)面的調査の基準となる染料のカラーチャートを作成し、顔料と併せて染料の面的調査を進めることができた。			
(5)染料のカラーチャートの赤外線撮影、科学分析を行うことで、基準となる染料の基礎データを得ることができた。 (29年1月26日、29年3月15日)			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の2年目 調査回数：4回 学会発表等： 「歴史資料に使用された彩色材料の調査研究」日本文化財科学会(6月4日、5日)			



香川県立ミュージアムでの調査の様子

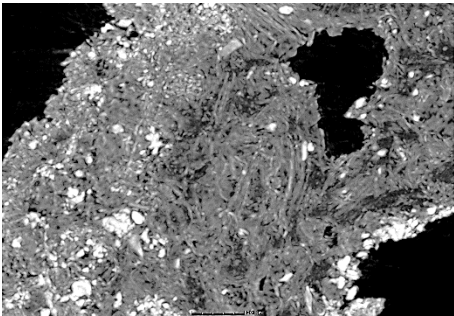
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である28年度は、文化財の彩色材料のうち染料について面的調査を進めることができた。特に「博物図譜」は様々な色彩で描かれ、彩色材料は多岐にわたっており、面的調査には大変有効であった。今後も「博物図譜」を中心に近世絵画の顔料・染料について面的調査の有効性を検証して行きたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。29年度は引き続き「博物図譜」の科学調査を中心に、面的調査の有効性を検証する。最終年度はこれまでの顔料・染料の調査データを検証し、面的調査に有効なデータを総合的にまとめる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	c. X線CTを用いた文化財有機質材料の同定方法の確立（科学研究費助成事業）（(4)－②－1）		
【事業概要】 X線CTを用いた文化財有機質材料の同定方法の確立			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 赤田昌倫
【主な成果】			
<p>1) 28年度は有機質材料の中で漆の添加物について検証を行った。観察にはマイクロフォーカスX線CTを用いた。図1に木屎を添加した漆試料のX線CT像を示す。木屎は肉眼では粉末であるが、X線CT像では繊維の集合体を非常に鮮明に確認することができた。また繊維の断面形状から繊維直径も検証することができた。</p> <p>2) この結果から、漆に添加される物質についてマイクロフォーカスX線CTによる判別が可能であることがわかった。</p> <p>3) X線CTの活用方法の一つに、物質の密度とX線吸収の相関性を利用する手法がある。各物質の密度の違いによってX線の吸収量は変化するため、X線CT像では各物質の密度差によって異なるコントラストとして表現される。マイクロフォーカスX線CTで調査したデータについてコントラストの平均値を数値化したものを輝度値とし、各有機質材料の同定に用いた。その結果、材料によって輝度値が変化することを確認した。</p>			
			
<p>図1 木屎を添加した漆試料のX線像</p>			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の初年度である。 採択が28年11月であったが、計画どおりに実験用試料の作製を行った。 また、いくつかの漆塗膜片について調査を行い、漆に添加される物質について判別が可能となった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	29年度は実験用試料の作製を継続していく。 作製した試料からマイクロフォーカスX線CTによる観察を行い、特に輝度値が変化すると考えられる顔料を添加した試料について観察を行い、得られたCTデータから輝度値変化を検証する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	d. みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム（文化庁文化芸術振興費補助金）（(4)-②-1）		
【事業概要】 九州山口各県・各県立拠点館・地域市民と連携協力し、各地のミュージアムが地域の文化・文化財をまもる拠点となるように、関係職員と地域市民が共に防災危機管理能力を高めることのできる研修プログラムを策定することを目的とする。プログラム策定のために、「調査・情報収集」、「研修試行」、「教材開発」、「会議」の開催を実施。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【主な成果】 (1) 事業計画の検討と実施、災害の教訓と課題を共有するための事例発表を含む全体合同会議、ワーキング会議を開催した。 ・第1回全体会議（5月25日）、第2回全体会議（29年2月15日） ・ワーキング会議 4回開催（7月19日、12月5日、29年2月2日、29年3月10日） (2) 被災地の施設・団体との先進的防災システムの構築のため、全国の博物館等施設の調査情報収集を行い、災害の内容や地域性を考慮した研修プログラム策定のための基礎情報を共有した。以下、調査を記載。 ・東京（宮内庁）：伝統的な危機管理手法、新潟（十日町情報館他）：市民参加型の被災資料整理活動等 日程：6月8日～10日 参加者数：13名 ・宮城及び福島（東北歴史博物館他）：東日本大震災の被災施設と文化財の現況及び市民参加の保全活動 日程：8月31日～9月3日 参加者数：12名 ・兵庫（人と防災未来センター他）：阪神大震災の教訓とその後の施設整備や市民参加の保全活動 日程：11月23日～25日 参加者数：12名 ・愛知（愛知県美術館他）：東海地震に備えた美術館の防災危機管理 大阪（国立民族博物館）：悉皆調査の取り組み 日程：11月29日～12月1日、29年2月6日～7日 参加者数：14名 ・熊本（熊本県博物館ネットワークセンター他）：熊本地震における被災状況、救出資料の一時保管状況視察 日程：12月3日 参加者数：31名 ・京都・奈良（宮内庁正倉院事務所、京博、奈良博他）：伝統的な危機管理、各館の危機管理の取り組み 日程：12月13日～15日 参加者数：18名 (3) 事例発表と調査で得た情報を活かした博物館職員及び市民が共に学ぶ研修プログラムの一部を試行した。 ・第1回：市民参加型の資料保全活動（12月3日） ・第2回：防災を考えた日常管理（29年2月1日） ・第3回：市民参加型の資料保全活動（29年3月8日） ・第4回：悉皆調査の取り組み（29年3月11日） (4) 熊本地震における文化財の被災状況に関する速やかな情報収集および救援活動を行った。 (5) 事業報告書を刊行した。			
【備考】 文化庁文化芸術振興費補助金の3年計画の3年目			



研修会「被災古文書の応急処置ワークショップ」の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	文化庁文化芸術振興費補助金の3年計画の最終年度である28年度は、地域の文化・文化財を守り継ぐための防災・危機管理研修プログラム策定の基礎情報を順調に収集・活用することができた。国立博物館を核に広域にわたる地域連携によるネットワーク構築強化を進めたことにより、4月に発生した熊本地震では、被災状況調査や被災文化財救援事業への連携協力がスムーズに実現できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	本調査研究は最終年度を迎え、研修プログラムの策定と教材開発をおこなった。また、九州山口の広域で構築されたネットワークが熊本地震における被災文化財の調査および救援活動において機能することが確認された。今後、策定した研修プログラムが継続的に活用されるとともに、広域ネットワークを維持することで、地域における防災・危機管理能力を高めるために役立てたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	e.熊本県被災文化財救援事業（公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団助成金／独立行政法人国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業）（(4)－②－1）		
【事業概要】 28年4月に発生した熊本地震を受け、独立行政法人国立文化財機構では、熊本県被災文化財救援事業（文化財レスキュー事業）を開始した。本事業の事務局である九州国立博物館では、熊本地震で被害を受けた文化財を適切に搬出・応急処理・一時保管できる体制づくりを目的として、派遣人員の調整、一時保管庫の環境整備、文化財レスキュー手法の整理・共有、レスキュー、情報発信を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 小泉 恵英
【主な成果】			
(1) 派遣人員の調整 国立文化財機構・九州山口各県の学芸員および文化財行政関係者等から、996名（のべ人数）の派遣を実施した（7月11日～3月23日）			
(2) 一時保管庫の環境整備 益城保管庫では、棚の搬入（10月12日、11月5日）と防犯およびガラス飛散対策のためのコンパネ設置（11月14日）、氷川保管庫では、網戸の設置と棚の搬入（11月15日）を実施した。あわせてデータロガー・毛髪計による環境調査を実施した。			
(3) 文化財レスキュー手法の整理・共有 津波を伴わない直下型地震における文化財レスキューで実施すべき内容を整理すべく、文化財搬出前の事前調査、文化財搬出、搬出した文化財の調書作成、レスキュー資料の応急処置についてその手法を検討した。文化財搬出前の事前調査、半壊家屋からの文化財搬出、搬出した文化財の調書作成についてのマニュアルを作成した。			
(4) レスキューの実施 被害を受けた建造物から28件、救出文化財約6,200件の文化財レスキューを実施した。			
(5) 情報発信 文化財レスキュー事業について広く紹介すべく、独立行政法人国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業公開シンポジウム「地域とともに考える文化財の防災・減災Ⅲ 熊本地震と文化財レスキュー」を開催した。（12月4日）また文化財レスキュー事業を紹介するパネルを作成し、展示を行った。（12月4日）			
【備考】 国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業3年目 公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団助成金の1年計画の1年目 派遣人員実績：996名（のべ人数） レスキュー件数実績：28件 情報発信実績：シンポジウム1回（12月4日開催 200名参加）、パネル展1回（12月4日）、論文1本（三角菜緒「【中間報告】熊本県被災文化財救援事業における作業マニュアルの策定について—災害時の文化財搬出・搬出前の事前調査・調書作成手順の検討—」、『東風西声』（29年3月）			

年度計画に対する総合的評価

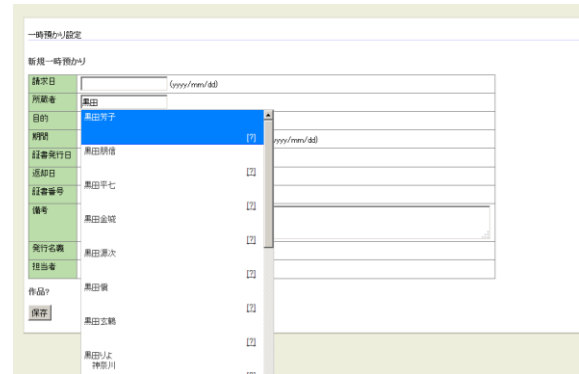
評価	判定の理由、課題と対応等
B	国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業終年度、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団助成金1年計画の1年目にあたる28年度は、防災ネットワーク推進事業の2年度目までに行ってきたネットワークの構築および研究・研修の成果を生かして、熊本地震で被害を受けた文化財を適切に搬出・応急処理・一時保管できる体制構築を短期間で行うことができた。事業では28件、救出文化財約6,200件の文化財救出を実施しており、当初目標は十分に達成できたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本事業では、派遣人員の調整、一時保管庫の環境整備、文化財レスキュー手法の整理・共有、レスキュー、情報発信を行い、実際に28件、救出文化財約6,200件のレスキューを実施することができた。今回事業で検討した手法は、今後発生が予測される津波を伴わない直下型地震での文化財レスキューにおいても活用可能である。引き続き研究を進めるとともに、情報発信を行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二
【主な成果】			
<p>(1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、貸与管理、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。</p> <p>(2) ユーザアカウントについて、これまでシステムが独自に管理していたが、館内業務システムで利用している認証サーバを用いるよう変更した。これにより、ユーザは業務用端末と同じIDで利用できるようになった。</p> <p>(3) 各機能の入力・編集画面における操作性の向上のため、JavaScriptライブラリの移行を検討した。</p> <p>(4) 外部からの一時預かり品の管理を行うことについて検討し、一時預かり品の登録や、預かり証の発行を行う機能を試験的に実装した。</p> <p>(5) 収蔵品データベースの一般公開に向けて、当館ウェブサイト上の展示作品データと収蔵品管理システム上の作品データの異同を検出する手法について検討した。</p> <p>(6) 本研究によって得られた知見について、『東京国立博物館紀要』第52号において論文を発表した。</p>			
【備考】			
<p>収集データ件数 221,907件 (内訳)</p> <p>作品データ件数 213,228件 平常展データ件数 4,494件 鑑査会議データ件数 87件 貸与データ件数 1,485件 修理データ件数 2,613件</p> <p>関連論文 ・村田良二「文化財情報の構造と組織化について—データベース化の実践をもとに—」東京国立博物館紀要、第52号、29年3月</p>			



一時預かり品管理画面（試験版）

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発でき、学芸業務に欠かせないツールとして着実に発展させることができた。ユーザ認証を館内業務システムとアカウント情報を連携させることにより、利便性を向上させることができた。一時預かり品に関わる業務について分析し、システムによる管理に向けて検討を進めることができた。また、これまでに得られた知見について論文にまとめて発表することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	28年度以降の中期計画期間では、システム全体の設計を再検討し、さらに発展させていく。28年度は継続的な改善と同時に、論文においてこれまでの知見をまとめたことにより、今後の再検討に向けた準備を進めることができた。29年度以降は、新規に開発した一時預かり品の管理機能を改善するとともに、入力・編集画面のインターフェースにおいて28年度に検討したライブラリの移行について、本格的な導入を進める。また収蔵品データベースの公開に向けて、当館ウェブサイトと収蔵品管理システムのデータの比較を自動的に行う機能について検討を進める。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 34年度の東京国立博物館創立150年へ向けて、『東京国立博物館150年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。28年度は寄贈された文書類の目録化と、館内から収集した文書類の付箋挿入と整理に加え、PDFなどデータ化を進め、保存措置を講じる。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長 井上洋一
【主な成果】 (1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置(4月4日～29年3月27日:週に1～2日) 資料保管室(資料館3階)に収集した約8,500件の館史関係文書類について、27年度に完成した目録(仮)と対応するための付箋挿入をするなど整理を進めた。以上は、資料整理アルバイト1名、非常勤職員1名と、東京国立博物館百五十年史編纂室員がともに作業を行った。 (2)東京国立博物館百五十年史編纂ワーキング打合せの実施(5月11日ほか) 『150年史』編纂のためのワーキング打合せを実施した。編纂物の内容を決定し、執筆者の選定を進めた。 (3)館史の内容に即した文書類の整理・確認 a)関東大震災時・第二次世界大戦時における被災文化財資料(7月13日ほか) 文化財レスキュー事業に関連して、館史上の被災文化財の確認とその対応について資料を収集し、データ化を行った。インターン1名がデータ化を進め、編纂室員がシンポジウムでその内容を発表した。 b)東京国立博物館館史における教育普及事業関係資料(7月1日から) 歴代の教育普及事業関連資料を収集し、変遷表を作成するとともに、関連調査を進めた。 (4)文書類のデジタル化(4月7日ほか) 『東京国立博物館百年史』編纂の際に用いられた資料・原稿等のPDF化を進めるとともに、外部関係者より借り出した元職員の日記資料などをデジタル・データ化した。 (5)総合文化展にて館史に関わる特集展示の実施(8月23日～10月16日ほか) 特集「壬申検査—博物館草創期の文化財保護活動—」、特集「臨時全国宝物取調局の活動—明治中期の文化財調査—」の展示を企画し実施した。 (6)問い合わせへの対応(4月18日ほか) 館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。			
【備考】 (1)収集した文書類の整理:72日間実施 (2)編纂ワーキング打合せ:4回実施 (3)a)関東大震災時・第二次世界大戦時における被災文化財資料の整理・確認:11日間実施 シンポジウム「歴史と共に考える 文化財の防災・減災」で発表 (7月18日、恵美千鶴子「関東大震災、第二次世界大戦の文化財」) b)東京国立博物館館史における教育普及事業関係資料の整理・確認:30日間実施 (4)資料・原稿等デジタル化:158件(約2,000点) (6)問い合わせ対応:7件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	27年度より継続的に収集した文書類の整理・保存措置について進めることができた。また、27年度に完成した目録を館内で公開したことにより、個別の調査・問い合わせへの対応が迅速に行えるようになった。収集・整理した文書類のデータを活用し、教育普及の歴史に関する年表を作成することができた。引き続き、館内各所に所在する文書類の収集整理を課題とするとともに、それらの文書類を『150年史』編纂に有効に活用できるようにするとともに、ほかの事業にも役立つようなデータ作成を行っていく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	目録が館内で周知されるようになったことで文書類の活用が可能となり、館史に関わるさまざまな作業に対応できるようになったことから、中期計画に対する進捗状況は順調である。平成29年度以降も引き続き文書類の整理を進めるとともに、利用しやすいデータ作りに努め、さらなる活用を図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ 博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究 (4)－②－2))
【事業概要】 本研究は、幕末期における西欧の博物館との接触から、維新後における博物館の創設を経て、帝室博物館の成立に至る明治期を中心とした博物館史を、世界史的な視野で再構成するための基礎的な資料調査と研究を、特に所蔵品の流通に着目して行おうとするものである。 そのために外国博物館との当時の文書や交換・寄贈された文化財を調査する。 あわせて、館史資料の撮影を進め、館史資料の公開・共有を目指す。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課
【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室長 白井克也
【主な成果】 1) 館史資料の調査 27年度までの科学研究費補助金によって高精細デジタル撮影を行った『列品録』『重要雑録』『動物録』『例規録』などの館史資料のうち、いくつかについて釈読を行い、一部は実物によって確認した。 ここから得られた成果の一部は、特別展『古代ギリシャー時空を超えた旅ー』の図録に論文として発表した。 また、『重要雑録』の中に、シカゴ・コロンブス世界博覧会（シカゴ万博、明治26年（1893））の出品作品の準備やその後の処理に関する文書の存在を見出したが、これは従来の同博覧会に関する研究では利用されたことのない新史料であることがわかったので、釈読を開始した。 これに関連して、資料館に図書として保管する、シカゴ万博関係の図書『臨時博覧會事務局報告』（前3冊）を調査した。 一方、列品のうち「埃国博覧会掛引継」、「埃国博覧会事務局寄贈」とする作品について、美術品台帳を分析し、これらは内務省内の組織改正に伴う引継であり、これらの作品がすべてウィーン万博に出品されたという推測が成り立たないことを見出した。 2) 館史資料の高精細デジタル撮影を実施（1500コマ）。 3) 列品調査 9月14日に、ペンシルヴェニア大学から返礼として寄贈された考古資料（以下、交換品）に関して、所在と現状を調査した。このうち1件は列品の登録から削除されていたが、その後、当該作品を収蔵庫内で見出して調査、この結果、同大学からの交換品のすべてが館内に依存していることを確認した。削除されていた1件については、平成28年度第3回鑑査会議を経て列品として復活した。 さらに、シカゴ・コロンブス世界博覧会に出品された水彩画の下絵とみられるものが、歴史資料の列品に2件確認されたので、調査を実施した。 4) 聞き取り調査 ペンシルヴェニア大学が所蔵する、シカゴ万博時の寄贈品について調査経験のある島根大学・及川穰准教授より情報を得て、9月27日に聞き取り調査を実施し、同大学所蔵資料の現状や、今後の調査方針について意見交換した。 5) 現地調査 11月3日にペンシルヴェニア大学を訪問し、シカゴ万博のときに当時の帝国博物館から寄贈された考古資料や水彩画、関連する文書を調査した。また、交換品の母体となった古代エジプトコレクションを調査した。また担当者の西村曜子氏と意見交換した。 29年2月2日、3日にも、同大学において帝国博物館からの寄贈品、同大学から帝国博物館への交換品の追加調査を行った。	
【備考】 高精細デジタル撮影 1500コマ 聞き取り調査回数 1回 現地調査回数 2回	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	シカゴ・コロンブス世界博覧会の際に行われた文化財交換に関して、『重要雑録』に、従来の館史研究に活用されていなかった資料の存在を認めたこと、また、ペンシルヴェニア大学に交換品が残されていることが判明するなど、年度当初には想定していなかった新たな成果が得られた。 従来は美術・工芸の分野からその意義を語られることが多かったシカゴ・コロンブス博覧会に関して、考古資料に関して新発見が得られたことで、当時の国際舞台における博物館の役割について新たな視点をひらくとともに、明治時代の日本における考古資料に対する認識に関する研究に道を開いた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	本研究は、東京国立博物館百五十年史編纂に向けて基礎資料を準備するためのものであったが、平成28年度の調査において新資料が発掘されたことにより、従来の館史研究で欠けていた視点を補うことができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 博物館における文化財の情報資源化に関する研究（科学研究費助成事業）（(4)－②－2）		
【事業概要】 本研究は、博物館が収集した文化財と関連する資料（図書・文書など）の分析と整理、データ化を行い、文化財との相互の関連付けを行うことで、これらを一元的に管理し、必要なときに引き出して活用できる博物館アーカイブズを構築する。さらに他の研究機関と情報の共有化を図るため、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をとおして研究する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 高橋裕次
【主な成果】 ① 文化財の活用のあり方に関する研究成果をもとに、文化財の相互の関係を明らかにし、さらに周辺の学問との関連図を作成することで、人々が必要とする情報にたどり着くための方法を模索した。 ② 宮内省の臨時全国宝物取調局が、明治21年(1888)より10年間にわたって行った文化財の悉皆調査の関連資料の検討をとおして、この調査が社会に及ぼした影響や、その背景などを明らかにするための作業を行った。 ③ 臨時全国宝物取調局で作成された目録は、全国の文化財の貴重な履歴である。用途の異なる数種の目録の分析によって、情報をどのように整理したかを検討した。 ④ 公文書類、展覧会情報、写真資料、新聞のスクラップなどと関連付けを行った文化財の相互の関連を分析するために構築するデータベースを購入し、その準備を開始した。			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の3年目 調査件数 2,000件 デジタル撮影件数 77件 公文書テキストデータ化 300件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4ヵ年計画の3年目である本年度は、宮内省が明治21年(1888)より10年間にわたって実施した臨時全国宝物取調局の調査に関わる資料をとおして、文化財に対する一般の人々の意識や、博物館における文化財の管理体制に与えた影響などを考察した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、東京国立博物館百五十年史の編纂に向けた作業のなかで、文化財の情報資源化という観点から、MLLA連携を見据えた統合データベースの構築をめざしている。計画的に調査・研究を行い、所期の目標を達成した。 平成29年度は、これまでの研究のまとめとして、個々の文化財に関連付けた目録類、図書、文書などのデータをもとに、文化財を多角的にとらえた総合的な情報について確認する。また、検索された情報について、各研究機関と共有する上での適合性を検証する。報告書については、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をとおして研究するという、研究の目的にふさわしい内容かどうかについて討論を重ねる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究（科学研究費助成事業） （(4)－②－2）		
【事業概要】 1939年以降海外で開催された日本古美術展について一覧化を進めるとともに、文化庁所蔵資料のデータ化及び主要な展覧会の資料を収集・整理することにより、海外における日本観とその変遷を考察・研究する基礎資料を整備する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	広報室長 鬼頭智美
【主な成果】 (1) ドイツ・ベルリン国立博物館アーカイヴ、イタリア・ローマ国立東洋美術館にて図書・写真・文献資料調査、一部複写・収集し、関係展示を視察した。（7月24日～31日） ・米国スミソニアン・アーカイヴス、フリア美術館及びメトロポリタン美術館にて、図書・文献資料調査、一部複写・収集し、日本美術担当学芸員に面談調査を行った。（11月1日～6日） ・米国ボストン美術館、同附属図書館、ボストン公立図書館、ハーバード大学美術館にて図書・文献資料調査、一部複写・収集し、関連施設を視察した。（12月7日～13日） ・英国・大英博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館などで資料調査を行うとともに関係者との面談を行った。（29年1月9日～15日） ・台湾の国立故宮博物院及び同南分院にて「日本美術之最」展について面談調査及び現地展覧会視察を行った。（29年2月9日～12日） ・文化庁所在資料を調査、必要部分のスキャニングを進めた。 (2) ドイツ、米国での調査により、調査先の美術館で開催された日本古美術展の原資料にあたり、各展覧会の詳細についての知見を得た。また、図書資料の所在を確認、リストに書誌情報をかなり追加することができた。 (3) 海外日本古美術展の一覧を作成、WEB公開用データとして整理し、当館研究情報アーカイブス上で公開した。また、3カ年の研究実績及び記録について、29年3月に報告書を刊行した。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の最終年度 『海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究』刊行（29年3月）			



故宮博物院における調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の最終年度である28年度は、昭和14年（1939）開催のベルリンにおける「日本古美術展」の元となったと考えられる昭和11年（1936）米国開催展覧会以降2016年までに海外で開催された日本古美術展について一覧化を完成、WEB及び報告書により公開した。また、文化庁所蔵資料については分室保管分について関係資料の大部分をデータ化、これまでの資料とあわせて整理し、海外における日本観とその変遷を考察・研究する基礎資料を整備した。 3カ年に予定していた展覧会リストの完成及び基礎資料の収集については概ね計画通りの成果をあげることができた。今後、原資料の複写分のうち重要なものの翻刻を進め、今回完成したデータベースに追加することが課題となる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、その他有形文化財に関連する調査研究を実施した。 3カ年の研究期間内に、1936-2016年に開催された日本古美術展（企画展）のリストを完成し、重要な事例について関係文献資料・展覧会図録、会場写真等の基礎資料の収集・整理し、リストに組み込めるものは記載・公開した。また、研究記録とリストについては報告書を刊行した。これらの基礎資料の公開により、海外での日本古美術については伝統文化への関心・イメージの形成・変遷を考察し、今後博物館としていかに外国人に日本文化への興味を喚起し理解を深めることができるか検討し、外国人向けの展示・展覧会等の企画に活用が可能となった。また、今回の調査で明らかになった主なテーマ、また開催地について個別に考察、日本文化発信の拠点設置についての検討材料となる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	a. 東京国立博物館所蔵帝室本データベース（科学研究費助成事業）（(4)－②－2）		
【事業概要】 当館所蔵の和古書コレクション「帝室本和書」のうち、主に他に所蔵のない典籍を中心に高精細画像を作成し、当館研究情報アーカイブズ上の「デジタルライブラリー」において全頁の公開を行う。			
【担当部課】	博物館情報課	調査研究課	【プロジェクト責任者】 田良島 哲
【主な成果】 帝室本和書（列品番号QA）のうち 448件、631冊、32,631カットの画像を作成し、検索項目の確認のできた資料から、順次、「デジタルライブラリー」 http://webarchives.tnm.jp/dlib/ で公開した。			
			
デジタルライブラリーでの公開画面			
【備考】 科学研究費助成事業（単年度）			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	研究成果公開として、計画どおりのデータ作成および公開を実現した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	平成29年度は、研究成果公開促進費が採択されなかったため、館内経費を用いて、可能な限りの画像データ作成と公開を継続する。引き続き各種競争的資金の獲得をめざす。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b.東京国立博物館国立博物館所蔵写真資料データベース(科学研究費助成事業)((4)-②-2))		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵写真資料データベースは、東京国立博物館が所蔵する幕末から昭和初期にかけて撮影された紙焼き写真をデジタル化し、広く一般に公開することを目的とする。現在「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」としてホームページ上で公開しているデータは、18～21年度の科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付によって作成された。 本事業では、上記のデータベース作成事業を引き継ぎ、従来の紙焼き写真に加え、東京国立博物館が所蔵するガラス乾板を含めた全写真資料について調査とデジタル化を行い、データベースの充実を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 富田淳
【主な成果】 (1)ガラス乾板の調査 東京国立博物館が収蔵する明治～昭和初期撮影されたガラス乾板のうち、四切写真約5,000枚とキャビネ写真約2,400枚の法量(縦、横)、墨書等文字の項目について、5月～29年3月に東京国立博物館で調査し、併せてガラス乾板の保存状態を確認した。 (2)ガラス乾板のスキャナー作業 未撮影の乾板の内、約720枚のスキャナー作業を10月～29年3月に東京国立博物館で行った。 (3)紙焼き写真のデータ整理 紙焼き写真について、約2,000枚について既成画像を元に公開用データを作成した。			
			
ガラス乾板のスキャナー作業及び調査風景			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目。 「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」(http://dbs.tnm.jp/kaken/oldphotos.html)において約7,000件を公開した。 調査回数54回。ガラス乾板のスキャナー作業18回。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である28年度は、新たに未撮影乾板のスキャナー作業を実施し、公開データに組み込むことができた。また、東京国立博物館が収蔵する明治～大正時代にかけて撮影された主要なガラス乾板を調査することができ、紙焼き写真については予定していた件数のデータ整理を行うことができたので、概ね所期の目標を達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。本研究計画では、東京国立博物館が収蔵する主なガラス乾板を3か年に分けて実施調査を計画しており、進捗状況はほぼ順調である。最終年度である29年度はさらに調査の効率化を図り、公開データの増加を目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財情報に関する調査研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討や機構共通システムの運用に対する対応、博物館システムの発展的整備の方向性など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 宮川 禎一
【主な成果】			
<p>(1) 当館における文化財情報のアーカイブズやウェブサイトなど、各種データベースや公開システム等について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、継続的に博物館システムの検討を行った。</p> <p>(2) 博物館におけるインフラとしての情報ネットワーク整備や、アーカイブズに求められる知財管理について、近年の他機関における動向や社会的ニーズの変化を踏まえ、継続して調査・検討を行った。</p> <p>(3) 科学調査研究の推進に伴ってデータ量が急増しているため、データを保管するストレージシステムの構成拡張や運用調整等について検討を行い、情報システム面での整備を推進した。</p> <p>(4) Windows7のサポート年限が残り5年を切ったため、博物館システムにおけるWindows10の正式採用に向けた各種検証や試験導入等について検討を行い、対応を推進した。</p>			
			
研究系サーバラック			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報システム検討会 6回 ・ 情報システム調査 6回 			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	博物館におけるインフラとしての情報ネットワーク整備や、アーカイブズに求められる知財管理について、近年の他機関における動向や社会的ニーズの変化を踏まえ、継続して調査・検討を行い、文化財情報に関する調査研究を推進できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	中期計画において求められている文化財情報の研究について、科学調査研究の推進に伴ってデータ量が急増しているため、データを保管するストレージシステムの構成拡張や運用調整等について検討を行い、情報システム面での整備などを通じて対応できた。 29年度以降についても、データの増大や社会的ニーズの変化に伴う高度化を踏まえつつ、調査研究を推進する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開並びに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎幹子
【主な成果】 デジタル撮影の安定的な稼働を目指して、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システムや公開用データベースのデータ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。 (1) 写真撮影としては、特別展「国宝信貴山縁起絵巻一朝護孫子寺と毘沙門天王の至宝」並びに「忍性-救済に捧げた生涯-」の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各分野の文化財の撮影を多数行った。信貴山縁起絵巻展では、信貴山縁起絵巻を最新の撮影機材をもちいての全巻撮影が叶い、また忍性展では全国各地の忍性関連資料の写真撮影を実施することが出来た。また、今春に控えた「快慶-日本人を魅了したほとけのかたち」展の準備として、多数の快慶作品の撮影を行った。これらによって、当館における文化財写真アーカイブズの更なる充実を図ることが可能となった。 (2) ガラス乾板の保存活用の一環として、ガラス乾板の整理作業を引き続き行った。この作業は、デジタル化、ガラス乾板の保存処置（カビや埃の除去）、畳紙・保存箱への納入、新たな専用キャビネットへの排架とが連動したもので、館内の貴重な資料の保存活用と情報公開が同時に目指された活動であり、今後も継続して行う計画である。 (3) 奈良地域の文化財の画像公開を目的とする「奈良地域関連資料画像データベース公開事業」において、奈良女子大学附属図書館と学術協力の協定を締結している。28年度はこの事業の一環として、能満院の春日浄土曼荼羅を始めとする寄託品の撮影を実施し、画像提供を行った。 (4) 収蔵品・画像データベースから画像の無償ダウンロードが可能となるよう、27年度にシステムの改修を行い、28年3月からサービスを開始したため、28年度が実質的な提供となったが、利用者はインターネットから直接画像をダウンロードすることが可能となり、画像データの利用促進に貢献するものと期待される。			
【備考】			
		撮影風景 浄土寺 阿弥陀三尊像	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	文化財の調査と撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、学術的に重要でありながら調査と撮影の機会を十分に得ることが難しかった分野について、調査を実施し、質の高い画像を取得して、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。今後も当館の事業と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の一大拠点として、アーカイブズの質・量双方の維持に努める予定である。 情報資源の運用にあたっては、新たに館蔵ガラス乾板のデータベースを公開するなど、文化財アーカイブズ形成の実践を鋭意進めている。今後も更なる発展を視野に入れて研究に力を注いでいく。 また、画像の無償ダウンロードでは、高品質の画像を、利用者に活用しやすいかたちでの情報提供を目指しており、調査研究の成果を幅広い層に向けて還元していくという意味でも大きな成果をあげるものと期待できる。人員と予算が限られる現在のような体制の中で、幅広い活動を展開している点でも評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	デジタル撮影については現在のところ安定的な稼働を実現できている。館内での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線・透過X線のデジタル撮影にとどまらず、CT撮影についてもデジタル化を実現すべく、機材・設備の整備が急務である。当館では仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重な画像コレクションを維持管理しているが、文化財調査の拡充に併せて、アーカイブズの拡充が図れるよう更に体制を整備していくことが肝要である。 今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能すべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支える理論の構築にも取り組んでいく。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学术交流等								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM(国際博物館会議)京都大会に向けた活動を促進する。 (東京国立博物館) 1) 学术交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。 2) 日中韓国立博物館長会議、IEO(国際展覧会オーガナイザー会議)等の国際会議へ参加する。									
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	国際交流室長 井上 洋一(兼任)						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 中国、韓国、米国など4か国の博物館・美術館等から計73人の研究者・研修生を招へいしまたは受け入れ、研究交流を行った。 2) 中国、韓国、タイ、米国、ヨーロッパなど10か国・地域の博物館・美術館等へ当館研究職員を60人派遣し、収蔵品及びその活用に関する研究を行い、現地の研究者と交流した。 3) 文化庁支援事業として、北米・欧州ミュージアム日本専門家連携・交流事業の一環である日本専門家会議(29年1月27日)及び国際シンポジウム「日本美術をみせるーリニューアルとリノベーションー」(29年1月28日～29日東京国立博物館)を開催した。 4) ICOMミラノ大会、第1回ユネスコハイレベル博物館フォーラム等、国際会議への参加を通して、ICOM京都大会への参加を呼びかけた。 (東京国立博物館) 1) 韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館などとの学术交流協定に基づき、研究員の交流・派遣を行うとともに、海外での共同事業の企画・実施準備、国際会議に研究員を派遣、また海外博物館の新規建設にかかわる助言を行うなど、調査研究、ネットワーク構築、交流事業の推進を図った。 2) 第9回日中韓国立博物館長会議に参加し、中国国立国家博物館及び韓国国立中央博物館の代表者と交流・情報交換を行い(11月4日北京)、3館共同事業による展覧会を同地にて行った(11月5日～12月11日)。また、IEOに参加し、主要美術館の展覧会関係者との意見交換を図った(4月14日～15日ダブリン)。									
【補足事項】 (4館共通) 上記研究員派遣人数は当館予算による派遣延べ人数を示す。 科学研究費助成事業等外部資金等を含む人数は145人。 (東京国立博物館) 1) 海外交流の成果共有のため、学术交流発表会を実施した。・韓国国立中央博物館研究員による発表会(6月11日朴秀桓氏・8月30日金ウルリム氏)、当館研究員による報告会(29年1月18日恵美千鶴子主任研究員・荒木臣紀調査分析室長) 2) 日中韓国立博物館長会議では、次回30年韓国開催、展覧会開催等について合意した。 ・海外展としては、日中韓共同企画展である「15-19世紀日中韓絵画精品展」(中国国家博物館)のほか、「菩提の世界ー醍醐寺芸術珍宝展」(中国上海博物館・陝西歴史博物館)と「日本美術の粋ー東京・九州国立博物館精品展」(台湾国立故宫博物院南院)を開催し、多方面から高い評価を得た。									
【定量的評価】項目		28年度実績	目標値	評定	経年変化	24	25	26	27
海外からの研究者招へい		73人	-	-	経年変化	11	21	47	83
海外への研究者派遣		60人	-	-		34	41	18	47
国際シンポジウム開催数		1回	-	-		-	-	2	1
国際シンポジウム参加者数		463人	-	-		-	-	422	284
【年度計画に対する総合評価】 評定：A			【判定根拠、課題と対応】 韓国国立中央博物館・上海博物館との協定に基づく主体的な招へいに加え、研修生受け入れ等、海外から合計73名の研究者を受け入れた。また海外へは60名を派遣した。本年度3度目となる米国・欧州ミュージアム日本専門家連携・交流事業にも10か国35名の参加があった。これらの取り組みにより海外研究者との交流が進み、今後の展覧会等事業や研究交流につながっている。今後、交流対象国をより広めていくことに努めたい。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評定：A			【判定根拠、課題と対応】 目標値以上の研究者招へいと派遣を実施し成果を達成し、順調に遂行できた。2019年ICOM京都大会の開催に向けて、当初計画により2016年ミラノ大会に参加したことに加え、第1回ユネスコハイレベル博物館フォーラムに参加し、大会の周知とネットワーク拡大を図った。第3回となった米国・欧州ミュージアム日本専門家会議では今後の組織づくり等の展開に向け前向きかつ活発な議論が進み、2日間のシンポジウムには一般参加を含め2日間で延べ463名が参加し、国内博物館活性化の先導的役割かつネットワーク構築について着実な成果を結んできている。今後具体的な活動の更なる活発化を目指す。						



学术交流発表会(朴秀桓)



日中韓国立博物館長会議

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM(国際博物館会議) 京都大会に向けた活動を促進する。									
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長 植田義雄 企画室長 伊藤信二						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 6月10日、ギメ東洋美術館館長 Sophie Makariou氏を招聘し、27年度に締結した学術交流協定を前提とし、今後の連携協力に関する打合せ等を行った。 2) 研究交流並びに研修のため職員を21人派遣した。 3) 29年3月30日、メトロポリタン美術館アジア美術部アシスタント・キュレーター ビンチュク・モニカ氏を招聘し国内の漆工の研究者6名及び当館研究員1名にて、中世漆工を中心とした国際研究会交流会を開催した。 4) 2016年ICOMミラノ大会の分科会にて当館職員2名が発表を行った。(上記派遣人数を含む) ・12月24日(土)、土曜講座にてICOM関連の講座を行った。 5) サンフランシスコ・アジア美術館(アメリカ)とパートナーシップを結び、日本文化を紹介する教育用サイト「TeachJapan.org」の立上げに協力した									
【補足事項】 (4館共通) 2) 4月、29年度開催予定の特別展覧会「海北友松」の作品調査及び出品交渉のため、当館職員2名をアメリカへ派遣した。 ・7月、陝西歴史博物館に行われる「日本醍醐寺国宝展」展時作業のため、当館職員2名を中華人民共和国へ派遣した。 ・ほか、上海美術館、クイリナーレ宮美術館(イタリア)、マルチメディアホール(クロアチア)などへ派遣した。 4) 12月24日「博物館の国際会議とは? - ICOM2016ミラノ大会から2019京都大会へ」 講師: 学芸部教育室長 山川暁 参加人数: 38人									
【定量的評価】項目		28年度実績	目標値	評価	経年変化	24	25	26	27
海外からの研究者招聘		2人	-	-	経年変化	3	0	2	2
海外への研究者派遣		21人	-	-		15	19	14	17
国際シンポジウム開催数		0回	-	-		1	-	1	1
国際シンポジウム参加者数		0人	-	-		209	-	168	200
【年度計画に対する総合評価】 評価: B			【判定根拠、課題と対応】 例年の海外交流に加えて、28年はICOMミラノ大会のため5人派遣し、ICOM関連の土曜講座を行うなど、2019年ICOM京都大会に向けた布石となる活動を充分に行うことができた。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評価: B			【判定根拠、課題と対応】 海外からの研究者を2名招聘し、海外の博物館等へ21人派遣したことに加え、2019年ICOM京都大会開催のための活動を行い、国内外のネットワーク構築を順調に進捗することができた。今後についても、国内外の博物館・美術館や研究機関とのネットワークを構築し、博物館活動の活性化に寄与していく予定である。また、29年度には、2019年ICOM京都大会に向けた国際シンポジウム等を開催し、一般の方々への広報活動を実施していく予定である。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等								
【年度計画】(4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM(国際博物館会議)京都大会に向けた活動を促進する。 (奈良国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館との交流を活発に行う。									
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 内藤 栄						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 中国・韓国の博物館から研究者等9名を招聘し、今後の研究や展示活動及び博物館活動全般に関わる情報交換を実施した。 2) 職員延べ19名(事務系職員含む)を諸外国に派遣し、文化財に関する研修および現地研究者との研究交流を実施した。 3) 国際研究集会「古代日韓の装飾と技術」を12月13日に開催。学術交流事業で招聘した国立慶州博物館研究員と当館研究員2人による研究発表と討論を行い、計30人の参加があった。 4) ICOMミラノ大会(7月4日～9日)に職員1名を派遣し、また国内の関係者が集まる「ICOMミラノ大会報告研修会」(10月8日、京都)に参加した。 (奈良国立博物館) 1) 中国上海博物館、中国河南博物院、韓国国立慶州博物館との間で、学術交流協定に基づいて職員を派遣し、また先方の館員を招聘して、それぞれの専門分野にかかわる研究交流、意見交換を実施した。									
 <p style="text-align: right;">国際研究集会「古代日韓の装飾と技術」</p>									
【補足事項】 (4館共通) 1) 招聘人数の内訳は、韓国国立慶州博物館4名、中国上海博物館3名、中国河南博物院2名。 2) 派遣人数の内訳は、韓国国立慶州博物館1名、中国上海博物館5名、中国河南博物院1名、中国浙江省博物館等1名、中国陝西歴史博物館1名、台湾故宮博物院等3名、蘇州博物館等1名、イタリア(ミラノ)ブレラ美術館1名、イタリア(ローマ)クイリナーレ宮美術館1名、米国クリーブランド美術館等4名。 3) 国際研究集会「古代日韓の装飾と技術」(於当館講堂) 12月13日 研究発表「慶州月池出土骨製花鳥紋装飾研究」 発表者：田孝秀(国立慶州博物館学芸研究士) 研究発表「金属製品をめぐる“技術”について—科学的保存処理の技術と金工技術—」 発表者：大江克己(当館アソシエイトフェロー) 4) ICOMミラノ大会では、COMCOL委員会に参加した。 (奈良国立博物館) 1) 学術交流協定に基づいて、以下の交流を実施した。 ・中国上海博物館から職員3名を10日間招聘し、当館から職員3名を10日間派遣した。 ・中国河南博物院から職員2名を1ヵ月間招聘し、当館から職員1名を15日間派遣した。 ・韓国国立慶州博物館から職員2名を各1ヵ月間招聘し、当館から職員1名を1ヵ月間派遣した。									
 <p style="text-align: right;">慶州博物館招聘者の現地研修 榎原考古学研究所にて</p>									
【定量的評価】項目		28年度実績	目標値	評定	経年変化	24	25	26	27
海外からの研究者招聘		9人	-	-	経年変化	7	9	9	13
海外への研究者派遣		16人	-	-		17	8	13	20
国際シンポジウム開催数		-	-	-		-	-	-	-
国際シンポジウム参加者数		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 海外の博物館の研究者を招聘しての交流、職員を海外の博物館へ派遣しての研究交流とも、実施件数は例年並であるが、それぞれの機会に文化財調査や研究交流は着実に実施できている。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 学術交流協定に基づく海外博物館との交流は、招聘及び派遣を継続できており、派遣に関してはそれ以外の博物館・美術館の間でも活発に実施している。派遣時、あるいは招聘時には、有意義な意見交換・現地調査等を実施しているが、より一層の内容の充実を図っていく必要がある。						


中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM（国際博物館会議）京都大会に向けた活動を促進する。 (九州国立博物館) 1) 国際交流活動推進へ向けての基盤を整備するとともに学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。								
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長 木川りか 課長 吉川利幸 課長 菅原秀倫					
【実績・成果】(4館共通) 1) タイ王国文化省芸術局長を招聘し、研究交流及び29年度開催の特別展「タイ～仏の国の輝き～」に関する協議を行った。(7月30日～8月3日) 2) 当機構職員を韓国、中国をはじめとした海外の博物館・美術館等に67人派遣し、研究交流等を実施した。 3) 日中韓文化遺産フォーラムを開催した。(29年2月12日、参加者173人) 4) ICOM京都大会に開催に向け、7月にミラノで開催されたICOM世界大会に出席し情報収集を行った。 (九州国立博物館) 1) 国際交流活動の推進へ向けての基盤を整備し、海外博物館等との交流を実施した。(瀋陽故宮博物院等) 2) 水中考古学フォーラムにおいて、オランダ文化遺産庁のマータイン氏他2名が講演を行った。(8月27日、参加者約45人)								
【補足事項】(4館共通) 1) ・タイ王国文化省芸術局長を招聘し、特別展「タイ～仏の国の輝き～」に関する協議を行った。また、特別展の会場となる当館及び東京国立博物館の視察を行った。(7月30日～8月3日) ・28年度外国人芸術家・文化財専門家招聘事業（文化庁長官官房国際課）により、韓国国立中央博物館・学芸研究室長・関丙賛氏を招聘し、当館の視察をはじめ、長崎県松浦市、平戸市などにおいて、高麗仏に関する調査を行った(10月19日～22日)。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定に基づく交流事業により、韓国国立公州博物館及び国立扶餘博物館の研究員(8月30日～9月12日：2人参加)を招聘し、研究員等の交流を実施した。また、瀋陽故宮博物院と学術文化交流協定を締結し、今後の特別展の開催や研究員等の交流について協議を行った。(11月22日)								
瀋陽故宮博物院との学術文化交流協定締結の様子								
【定量的評価】項目	28年度実績	目標値	評定	経年変化	24	25	26	27
海外からの研究者招聘	43人	-	-	経年変化	3	16	35	51
海外への研究者派遣	67人	-	-		60	87	82	77
国際シンポジウム開催数	1回	-	-		2	1	2	1
国際シンポジウム参加者数	173人	-	-		450	207	403	80
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 学術文化交流協定締結館を中心に67人の研究者を海外へ派遣して交流を深め、国際シンポジウムを開催するなど研究交流等を順調に実施できた。							
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 3名の海外の研究者を招聘し水中考古学フォーラムを開催するなど、中期計画に沿った事業を順調に行うことができた。また、ミラノで開催されたICOM世界大会に出席するなど、国内外の博物館等とのネットワーク構築を推進することができた。今後も海外の優れた研究者を招聘し、国際シンポジウムの開催や共同調査の実施などの取組を進めていきたい。							


中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1) 「東京国立博物館情報アーカイブ」等の運用をし、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2) 紀要・図版目録等を刊行する。 3) 法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4) 研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)								
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課	事業責任者	企画課長 浅見 龍介 博物館情報課長 田良島 哲					
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『東京国立博物館文化財修理報告XVII』を刊行した。 (東京国立博物館) 1) ・「東京国立博物館情報アーカイブ」等の運用をし、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。「東京国立博物館情報アーカイブ」は、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」としてリニューアルし、研究員の調査研究活動等に関する情報公開を拡充した。 ・特集陳列印刷物リーフレットのPDFファイル版を当館ウェブサイト上に公開することによって研究情報の普及を図った。 2) ・『東京国立博物館紀要』52号を刊行した。 ・『東京国立博物館図版目録 改訂版経塚遺物(東日本篇)』を刊行した。 3) 『法隆寺献納宝物特別調査概報XXXVII 古今目録抄3』を刊行した。 4) 研究誌『MUSEUM』661号～666号を刊行した。 ○『東京国立博物館セレクション シルクロードの美術』を刊行した。 ○『日本の考古 ガイドブック』を刊行した。 ○特別展図録6件・特集陳列印刷物9件(リーフレット6件、冊子3件)を編集した。 ○出版企画委員会4回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会9回を開催し、博物館の出版事業の拡充を図った。								
【補足事項】(東京国立博物館) ○出版物については別記(c-⑥ 調査研究刊行物一覧)を参照。								
【定量的評価】項目	28年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	24	25	26	27
定期刊行物	16件	16件	B		17	16	16	16
紀要等	4件	4件	B		4	4	4	4
『MUSEUM』	6件	6件	B		6	6	6	6
『東京国立博物館ニュース』	6件	6件	B		7	6	6	6
特別展の開催回数(海外展除く)	8回	-	-		7	6	6	6
テーマ別展示の開催件数	33件	-	-		47	33	22	31
講演会等の開催回数	160回	-	-		126	131	127	146
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』等の定期刊行物を16件刊行するとともに、その他文化財修理報告書、図版目録等を計画どおり刊行することができた。また、「東京国立博物館情報アーカイブ」は、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」としてリニューアルし、研究員の調査研究活動等に関する情報公開を拡充したほか、特集陳列印刷物リーフレットのPDFファイル版を当館ウェブサイトに掲載することで、さらなる情報公開に努めた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 『東京国立博物館図版目録 改訂版経塚遺物(東日本篇)』を発行するなど、図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行するとともに、来館者の要望が高い出版物を刊行し、販売部数を伸ばすことができた。また、ウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。また今後「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」での発信をさらに拡充する。							



東京国立博物館研究情報アーカイブズ

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館) 1) 研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。 2) 社寺調査報告書等を刊行する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 伊藤信二					
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書14を刊行した。 (京都国立博物館) 1) 『学叢38号』を刊行した。28年度は学叢第28号のPDFを当館ウェブサイトにて追加公開した。 2) 既に過年度において調査済みである社寺の社寺調査報告書を刊行するべく調査の整理を行ったが、報告書の精度を担保すべく、調査の確認及び整理を充分に行う必要があることが判明したため、29年度以降に刊行することとした。 ○特別展覧会にて2件、特集陳列にて4件の計6件の図録を刊行した(定期刊行物実績値には含まない)。								
【補足事項】 (京都国立博物館) ○特集陳列「丹後の仏教美術」の図録については、出品が叶った、通常拝観できない秘仏である重要文化財「千手観音像」(京都・緑城寺蔵)を掲載するなど、京丹後地域の文化及び調査研究成果を展示のみならず図録においても発信することができた。 ○特集陳列「生誕300年 伊藤若冲」の図録については、東京都美術館や京都市美術館においても伊藤若冲関連の特別展覧会が行われ、伊藤若冲への関心が高まっていることを受け、ほかの特集陳列図録より充分な数を制作の上、順調に販売することができ、調査研究成果の公表のみならず、来館者サービスの向上及び自己収入増加に寄与することができた。								
 「丹後の仏教美術」図録								
【定量的評価】項目	28年度実績	目標値	評価	経年変化	24	25	26	27
定期刊行物	10件	11件	C		11	10	10	11
紀要等	2件	3件	C		3	3	2	3
『博物館だより』	4件	4件	B		4	4	4	4
『Newsletter』	4件	4件	B		4	3	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)	2回	-	-		5	3	2	3
テーマ別展示の開催件数	9件	-	-		-	-	4	7
講演会等の開催回数	45回	-	-	19	21	36	39	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 社寺調査報告書については刊行できなかったものの、ほかの定期刊行物については順調に刊行することができた。また、特集陳列において図録を4件刊行し、調査研究成果の公表を充分に行うとともに、来館者サービスの向上等に寄与するなど、総合的には十分な成果を達成した。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 社寺調査報告書を刊行せず、紀要等の発行については目標値を達成することができなかったが、中期計画初年度としては、特集陳列の図録刊行等にて調査研究成果の発信を十分に質・量ともに充分に拡充することができた。また、28年度は既に過年度において調査済みである社寺の調査の整理に着手し、29年度以降刊行することの見通しを立てた。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表								
【年度計画】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。 (奈良国立博物館) 1) 研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査について、報告書を刊行する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤 栄						
【実績・成果】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 研究紀要『鹿園雑集』第17号・第18号(合併号)内に包摂する形で、25年度の文化財修理に関する調査研究成果を刊行した。26年度以降の調査研究成果については、今後『鹿園雑集』から分冊して、文化財保存修理書 修理報告書として刊行するべく、編集作業を行った。(第一号は29年5月刊行予定) (奈良国立博物館) 1) 研究紀要『鹿園雑集』第17号・第18号(合併号)を刊行(29年1月)し、併せて当館ウェブサイトに掲載することで研究成果を広く公表した。 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査について、『国宝聖徳太子及天台高僧像光学調査報告書―特殊画像編―』を29年3月に刊行した。									
【補足事項】  展覧会図録・研究紀要等									
【定量的評価】項目		28年度実績	目標値	評定	経年変化	24	25	26	27
定期刊行物		6件	5件	A		5	4	5	4
紀要等		2件	1件	A		1	0	1	0
『博物館だより』		4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)		3件	-	-		3	3	3	3
テーマ別展示の開催件数		4件	-	-		6	10	9	4
講演会等の開催回数		26回	-	-	29	26	27	28	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 27年度は刊行できなかった『鹿園雑集』を刊行したことで、27年度までの調査研究事業報告を完了することができた。その他定期刊行物についても順調に刊行、公開することができており、目標を達成している。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 調査・研究の成果は、展覧会に関わる刊行物を中心に発信できている。また、文化財研究の成果を研究紀要『鹿園雑集』に刊行、報告するとともに、ウェブサイトでの公開を実施し、中期計画は順調に遂行している。29年度からは、文化財の修理報告書を単体で刊行し、より充実した内容を目指していく。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させる。								
担当部課	学芸部博物館科学課			担当部課	学芸部博物館科学課			
【実績・成果】 (奈良国立博物館、九州国立博物館) 1) ・九州国立博物館「博物館科学の取り組みと設備」を改訂し、刊行した。(部数2,000部) ・文化庁共催事業「日中韓文化遺産フォーラム 水中文化遺産の保護と活用」(29年2月12日に開催) 報告書(部数:2,100部)、英文パンフレット(部数:1,000部)を刊行した。 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』12号を刊行した。(掲載論文数10本、部数1,000部) 2) ・当館修復施設を使用する修復技術者と連携し、『平成28年度版 中学 社会デジタル教科書』(日本文教出版株式会社)の制作に協力した。その成果は「歴史を掘り下げる 文化財を守り伝える仕事—九州国立博物館の取り組み」として同教科書に掲載された。 ・文化交流展示「文化財を守り伝える博物館」の中で、当館内で修理を行った重要文化財宗家文書を展示し、修理工程についてもパネルで紹介した。また、火焰型土器の3次元計測結果を3Dプリントによって可視化し、展示した。								
					 <p>『平成28年度版 中学社会デジタル教科書』</p>			
【補足事項】 1) 「博物館科学の取り組みと設備」においては、文化財修理に活用される文化財の色材や紙、糊などの分析に使用される機器や取り組み例を紹介した。 1) 『東風西声』12号では10本の論文を掲載した。(うち当館職員9本) ○特別展図録・特集陳列等図録7冊を刊行した。 (うちトピック展示図録3冊)								
【定量的評価】項目	28年度実績	目標値	評価	経年変化	24	25	26	27
定期刊行物	5件	5件	B		5	5	5	5
紀要等	1件	1件	B		1	1	1	1
季刊情報誌『アジアージュ』	4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)	4回	-	-		4	4	5	4
テーマ別展示の開催件数	6件	-	-		12	14	11	8
講演会等の開催回数	77回	-	-	102	90	82	87	
【年度計画に対する総合評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要についても、掲載論文数、内容がより充実したものを刊行することができ、また文化財修理に関わる調査等について一般の理解を助ける刊行物を印刷することができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 予定通りに印刷物を刊行することができた。また、文化財修理や科学調査の結果を平常展示や教科書で公表することもでき、中期計画に沿って順調に計画を実施している。							